

卒業論文 2016年度

「魔女」シドニア・フォン・ボルケのイメージに関する考察

指導教員

香田芳樹教授

慶應義塾大学
文学部第Ⅲ類
学籍番号10192524

Ayumi v. Borcke

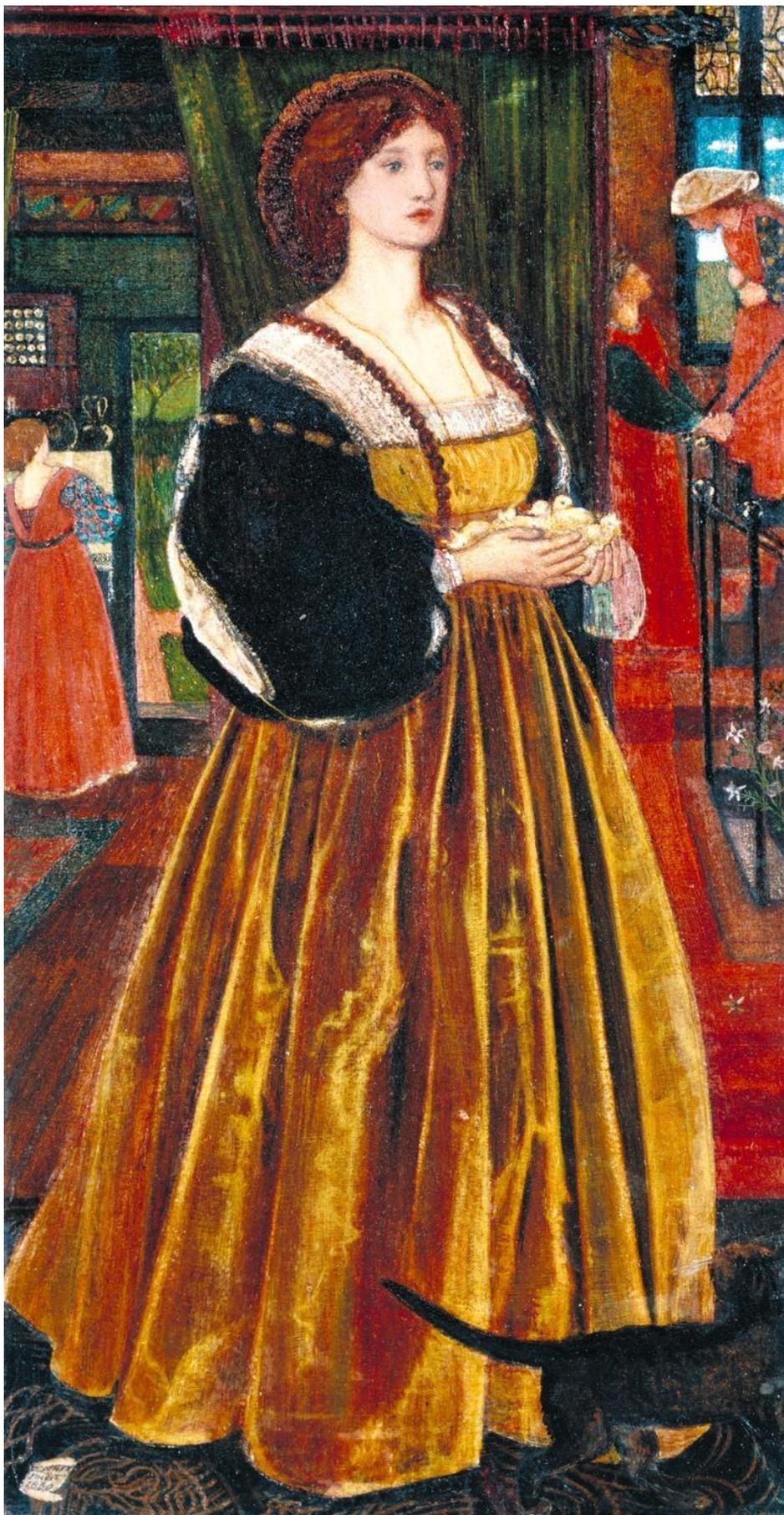


图 1 Clara von Bork, 1860 by Sir Edward Coley Burne-Jones, Tate Gallery 所藏

目次

はじめに	1
第一章 小説の歴史的背景	4
1 魔女について	4
(1) ドイツにおける魔女狩り	4
(2) 魔女の種類とその所業・特徴	5
(3) どのような人が「魔女」として告発されたか	6
2 ポンメルン公爵家	8
第二章 伝承の中のシドニア像	10
1 J.C. デナートの記述から	10
(1) シドニア伝説	10
(2) シドニアに対する魔女裁判の経過	12
2 バートルドの記述から	15
第三章 小説の中のシドニア像	19
1 C. A. ヴルピウス作『注目すべき名高いご婦人方のパンテオン』	19
2 アルミニア作『シドニア・フォン・ボルク』	25
3 J. E. ベンノ作『シドニア・フォン・ボルク—歴史小説—』	31
4 H. E. R. ベラーニ作『シドニア・狂気の威力』	39
5 マインホルト作『修道院の魔女シドニア・フォン・ボルケ』	46
まとめ	64
参考文献	68

はじめに

ルードヴィヒ・ハーマンの小説『マリーエンフリース修道院の魔女』¹の序文によると、シドニア・フォン・ボルケに対する魔女裁判は、1620年当時既に人々の注目を大いに引き、数々の小説家が文学作品の材料にしたという。

1682年ブランデンブルク家の宮廷説教師 J. W. レンチは、「ポンメルンとマルクでは、シドニアがポンメルン公家の王子達を生殖不能にしたという噂が絶えない²」と記しているが、J. C. デナートによると、裁判記録では生殖能力は問題にされておらず、つまり処刑の40年後には既に尾ひれが付いている話が記録されていた事になる。しかし、このような尾ひれこそが、その後特に19世紀に入って作家達の想像力をかきたてる事になったと言えよう。

シドニア・フォン・ボルケ³を主題とした著書には、記録、ザーゲ、小説、劇、論文がある⁴が、中でも一番著名なのはヴィルヘルム・マインホルトの小説『修道院の魔女シドニア⁵』である。1847-48年にノヴェレン・ツァイトゥングにて発表されたこのゴシック小説は、本国では前作『琥珀の魔女⁶』（1843）のような成功は見なかったが、発表されるや否やオスカー・ワイルドの母親であるレディー・ワイルドによって英訳され、ゴシック小説が流行った19世紀イギリスで特に広く読まれる事になった。オスカー・ワイルドも、子供の頃が一番好きだった小説としてマインホルトの二作品を挙げているが⁷、特に『修道院の魔女』は何故か「玄人受け⁸」し、1848年にイギリスにて画家・美術評論家・詩人により結成されたラファエル前派の旗手であるダンテ・ゲイブリエル・ロセッティが傾倒した影響で、エドワード・バーン・ジョーンズが同小説の登場人物であるシドニアとクララの（想像による）肖像画を1860年に作成するに至った⁹。又、その翌年2月、同小説は音楽を付けて劇化され女王陛下劇場で公演され、大成功をおさめたという¹⁰。

1857年にマンチェスターでラファエル前派の展覧会を訪れたフォンターネは、シドニアを題材に小説を書くつもりで1879年にポンメルンに調査旅行をし、1882年ま

¹ Ludwig Hamann. *Die Klosterhexe von Marienfließ und der Untergang des Pommerschen Herzogs-Geschlechts*. In: *D. H. G. Roman-Sammlung zeitgenössischer Schriftsteller*, Band 1. Leipzig: Deutsche Handels-Gesellschaft, 1917.

² Johann Wolfgang Rentsch. *Brandenburgischer Ceder-Hein, worinnen des Durchleuchtigsten Hauses Brandenburg Aufwachs- und Abstammung, auch Helden-Geschichte und Gros-Thaten, aus denen Archiven und Ur-Brifschäften, auch andern bewerten Documenten mit Fleiß zusammen getragen und neben zirlichen Kupfer-Bildnißen vorgestellt worden*. Brandenburg: Baret, 1682, S.115-16.

³ Sidonia von Borcke. 名前は Sidonie Bork, Borke, Borck とも書かれる。本人は Szidonia と綴っている。（図2、本論文3頁）

⁴ 以降、「シドニア文学」と総称する。

⁵ Wilhelm Meinhold. *Sidonia von Bork die Klosterhexe, angebliche Vertilgerin des gesammten herzoglich-pommerschen Regentenhauses*. Leipzig: Weber, 1848. 以下、*Sidonia, die Klosterhexe* 或いは『修道院の魔女』と省略する。

⁶ 前川道介, 本岡五男 訳, 創土社, 1984年

⁷ Barbara Belford. *Oscar Wilde. Ein paradoxes Genie*. Zürich: Haffmans, 2000, S. 21.

⁸ “No other German novel has enjoyed the particular kind of artistic *succès d’estime*“ Bridgwater, Patrick. “Who’s Afraid of Sidonia von Bork?” In: *The Novel in Anglo-German Context: Cultural Cross-Currents and Affinities*. Stark, Susanne. (Hrsg.) Amsterdam-Atlanta: Rodopi, 2000, 213頁

⁹ シドニア：巻末絵（図10）クララ：口絵。尚、クララはマインホルトの小説の登場人物。

¹⁰ Anna Maria Stuby. „Edward Burne-Jones, Sidonia von Borcke und die Präraffaeliten.“ In: *Klosterfrauen Klosterhexen. Theodor Fontanes Sidonie von Borcke im kulturellen Kontext*. Hrsg. Hubertus Fischer. Neustadt am Rübenberge: Rübenberger, 2005, S. 168.

でメモを作成していた。フォンターネの『シドニア』は作品として完成には至らなかったものの、しかし、17世紀に魔女裁判により焚刑に処された実在の人物であるシドニア・フォン・ボルケを主題とした文学は、実は本国ドイツにおいては遅くとも17世紀後半から数多く書かれていた。

マインホルト作『修道院の魔女』に関しては、アンドレア・ルードルフ¹¹やベルナデッタ・マトウシャク＝ローゼ¹²が論文も書いているが、他のシドニアを題材にした小説は〈ゴシック文学〉というジャンルのせいか今日では顧みられる事がなく、インターネット上論文も見当たらない¹³。インターネットで発掘できたのは年代順に、C. A. ヴルピウス (1812)、アルミア (1832)、J. E. ベンノ (1833)、H. E. R. ベラーニ (1838)、マインホルト (1847/48)、P. J. ヴェント (1874)、(フォンターネ (1882))、前述 L. ハーマン (1917) の作品である。

マインホルトの小説上のシドニアは、狼に変身し、箒に股がり煙突から飛翔するが、他の作品ではシドニアはどのように描かれているのか。本論文では、ヴルピウスからマインホルトまでの作品を取り上げ、テーマを「魔女」シドニアのイメージに絞って考察する。

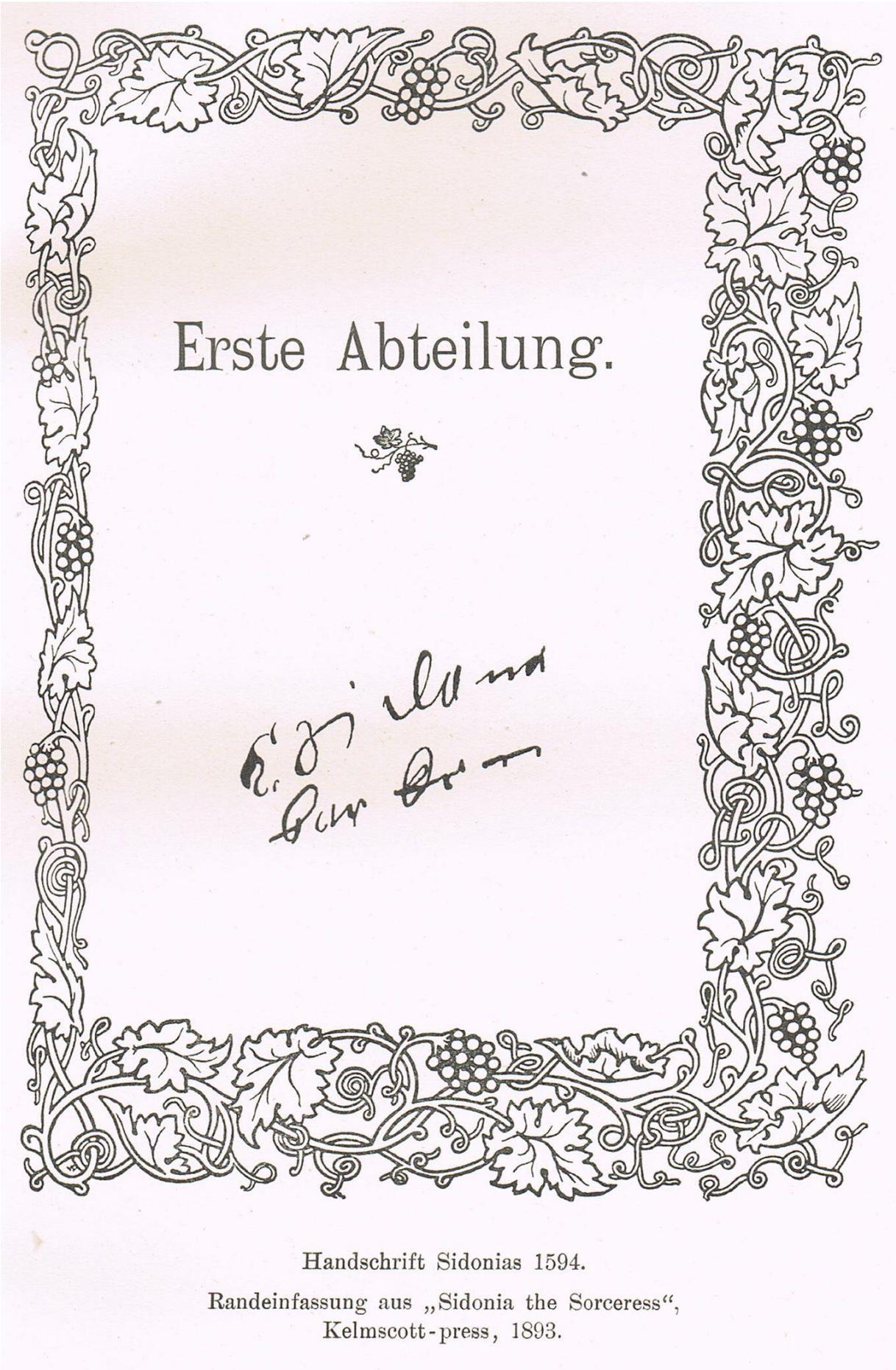
尚、翻訳は特記しない限り全て筆者による。

¹¹ Andrea Rudolph. „Wilhelm Meinholds Hexenroman Sidonia von Bork (1847/48) - eine Abrechnung mit der libertinen Frauenemanzipation als ein ‘Leiden unserer Zeit’.“ In: *Hexen: Historische Faktizität und fiktive Bildlichkeit*. Hrsg. George & Rudolph, Dettelbach: Röhl, 2004, S. 155-184

¹² マトウシャク＝ローゼは、ヴルピウスとベンノの作品については触れている。Bernadetta Matuszak-Loose. „Wilhelm Meinholds Roman *Sidonia, die Klosterhexe*.“ Hubertus Fischer (Hrsg.), S. 77-107.

¹³ フォンターネのシドニアに関してはフベルトウス・フィッシャーの論文がある。

(Hubertus Fischer. „Theodor Fontanes *Sidonie von Borcke*.“ Ebd. S. 109-136.)



Erste Abteilung.



Handwritten signature in cursive script, likely reading "Sidonia" or similar.

Handschrift Sidonias 1594.

Randeffassung aus „Sidonia the Sorceress“,
Kelmscott-press, 1893.

図2 1594年のシドニアのサイン (ケルムスコット社版『修道院の魔女』縁取り)

第一章 小説の歴史的背景

1 魔女について

(1) ドイツにおける魔女狩り

中世末から近世は西ヨーロッパの心理的不安の時代であった。気象異常による作物不作、インフレーション、貧富の階層分化、疫病の流行に見舞われる中、異端運動により教会の権威は揺らぎ、教皇のアヴィニョン幽閉（1309-76年）と教皇の正当性を巡り既存秩序は動揺し、宗教改革と反宗教改革が激突した。又、1453年に東ローマ帝国がオスマン帝国に滅ぼされたのは大きな衝撃であった。

異端弾圧は原始キリスト教時代から行われていたが、1000年頃から異端に対する処刑が実施されるようになった。11世紀に始まった十字軍の運動と14世紀半ばに全ヨーロッパ内陸に伝染した黒死病をきっかけにユダヤ人、異端者と魔女が「サタンの奴隷」として迫害されるようになった。

南フランスや北イタリアの魔女裁判は異端審問と連続性を持つが、異端審問は北上すると、ドイツでは上からの弾圧ではなく、民衆が老婆・乞食・精神異常者や弱者を「魔女」として摘発し、地元の裁判官と執行吏が裁く魔女裁判と化した。

ヨーロッパにおける魔女狩りのピークは1560年から1630年の70年間で、第一波は悪天候と不作が続いた1580-90年だった。ドイツではフランス・スイス・イタリアに遅れて開始されたものの、魔女狩りが熾烈になったのは宗教改革以降¹⁴であり、他国に比べて最も厳しく追及され、最も夥しい数の犠牲者が出た¹⁵。ルターが迷信を邪信として犯罪の対象にした事で、悪行を行わなくても、「不道徳」を理由に魔女を処刑する素地ができたのであった。又、魔女狩りは大都市では行われず、盛んなのは小・中都市においてであったが、ドイツでは都市の実に90-95%が小都市であったので、魔女狩りが起こり易い地理的条件にあったと言えよう¹⁶。

1532年には帝国統一法典としてカロリーナ刑事法典が成立したものの、各領邦には例外が認められ、遵守されなかった。しかも、裁判において糾問制度と拷問制が採り入れられていた。職業裁判官の数は限られており、法律専門家不在の裁判所は大学の法学部に鑑定を求め、火刑の判定を頻発する大学に依頼が殺到した。1600年頃には魔女に対して形式通りの尋問が行われ、公式文書は改ざんされる慣習ができていた。

そのような魔女弾圧に抗議したフリードリヒ・フォン・シュペー¹⁷は、1631年『裁判官への警告』にて、ドイツに処刑される魔女が多い理由として、民衆の無

¹⁴ 宗教改革運動に対してイエズス会を中心に反宗教改革運動が活発になり、互いに悪魔の汚名を着せようとした。（森島恒雄『魔女狩り』岩波書店、1970年、174頁）

¹⁵ 同上、146、173頁及び上山安敏『魔女とキリスト教』講談社、1999年、221頁

¹⁶ 都市宗教であるキリスト教は、都市においては商人、知識人を信徒として獲得できたが、農村においては異教崇拝が守られた。（上山、81頁）「魔女信仰が生きていたのは、主として恥の文化の生きている農村であった。（同上、13頁）更に、農村で起きた魔女狩りの動きが、近隣の小都市に波及する事もあった。尚、中世では小都市の人口は500-2,000人。（同上、222頁）

¹⁷ 魔女弾圧の最盛期にも魔女裁判に命がけで抗議した人々もいた。シュペーの他、ヤン・ヴィーア（『悪魔の欺瞞』1563年）、コルネリウス・ルース『妖術の真と偽』（1592年）など。（森島、193-96頁）

知、迷信、妬みや悪意を挙げ¹⁸、魔女狩りを煽動する者として「汚い牢獄も重い鎖も拷問道具も哀れな人間の悲嘆も知らない神学者と高位聖職者」、「魔女裁判を儲かる仕事と考えている裁判官」と訴えた¹⁹。

ドイツにおける魔女裁判のピークは三十年戦争の時代で、最後の処刑は1775年に行われた²⁰。ヨーロッパで処刑された魔女の総数は、クルツによると、1484年以降で30万人、ガードナーは900万人としている。G・L・バーは、ドイツだけで最低10万人と推定している²¹。しかし、その他にも数知れない犠牲者が集団暴行、リンチ、村八分などの制裁を受けた²²。

シドニア・フォン・ボルケ（1548?-1620）が生きたのは、正に魔女狩りのピーク期にあたった。

(2) 魔女の種類とその所業・特徴

a. 民間伝承の魔女

ドイツ語の魔女（=Hexe）は北欧の魔女（=hagazussa）から由来している。ゲルマン地方には、古くから「嵐の夜に死霊の群れが荒々しい狩りをする」という亡霊信仰²³があった。

一方、北欧の魔女が hag（=垣根）の上を飛ぶ zussa（=女性）であるのに対して、南欧（イタリア・スペイン・フランス）の魔女は、主に占い師（bruja²⁴はスペインの女占い師・魔法使い）、魔法使い（フランスの sorcière）、或いは女放浪者（イタリアの strega）である。このストリガは夜に徘徊する女の亡霊で、嬰兒をさらって毒のミルクを飲ませたり、血を吸ったりする、と恐れられていた。ゲルマン最古の法典である6世紀の『サリカ法典』では、人を喰ったストリガに対する罰が定められている²⁵。更に、ストリガは鳥（フクロウ²⁶）に変身するとされたが、〈変身〉に関しては、遅くとも7-8世紀にはザクセン地方で狼男の信仰が民衆の間で見られた²⁷。

¹⁸ 「迷信、嫉妬、中傷、かげ口、あてこすり、そういう類のものがドイツ人、とくにカトリック教徒の間で信じられないほど流行し、[...] あらゆる責任を、神でも自然でもなく、魔女が引き受けさせられるのだ。」（同上、200頁）

¹⁹ 同上、198頁

²⁰ R. H. ロビンズ著『妖術と悪魔論の百科全書』によると、最後の魔女裁判は、イングランドが1717年、スコットランド1722年、フランス1745年、ドイツ1775年、スペイン1781年、スイス1782年、ポーランド1793年、イタリアは1791年であった。（同上、201頁）

²¹ 同上、201-202頁

²² ジェフリ・スカル及びジョン・カロウ『ヨーロッパ史入門魔女狩り』小泉徹訳、岩波書店、2007年、2頁

²³ オーストリア南部～バイエルンのペルヒト伝説、中部ドイツのホルダ伝説（上山、67頁）

²⁴ バスク地方では、「ブルハは子供の血を吸って命を奪う」と信じられ、発疹により子が死ぬと、魔女の吸血行為だとされた。（度会好一『魔女幻想』中公新書、1999年、64頁）

²⁵ 上山、73-74頁

²⁶ 古代ユダヤにも梟を不吉と見る観念はあり、ローマの民間信仰では、子供をさらって血を吸う不吉な鳥であった。（同上、68-70頁）

²⁷ ベネディクト会修道士ボニファティウスの報告による。（同上、72頁）

又、ドイツの伝説の中の魔女は、猫や三足の鬼、ガマガエル、キツネ、カラス、尾の無いネズミ、蝶やトンボに変身する。²⁸

b. 教会の創造による魔女

このようなゲルマンの亡霊信仰に解釈替えが謀られ、15世紀の前半に教会が創造した「魔女」は、「悪魔と契約・性的関係を結んで超能力を帯び、マレフィキウム（魔術を用いて死、病気、財産の損傷、男性を不能或いは女性を不妊にする、恋情や憎しみの情を引き起こす、などの悪事）を行うだけでなく、箒や雄山羊にまたがって宙を飛び、サバト（魔女集会）に集結しては悪魔崇拜の儀式や人食いや乱交を行なう²⁹」、或いは自らも動物に変身する、というものであった。

c. 実在の魔女

上記は想像上の「魔女」であったが、実際に「魔術」或いは「呪術」を使う人々もいた。英語の witch（魔女・妖術師）は古代イギリスの wicca / wicce から由来し、「賢い女性」という意味である³⁰。

産婆、〈白魔女〉（=英 white witch）、〈賢い女〉（=英 wise woman、独 weise Frau、仏 sage femme）、〈恵みの魔女〉、〈器用な人〉、〈物知り〉（=英 cunning man）、〈占い病治し〉（=仏 devins-guérisseur）と呼ばれる人々が医療にあたりたり、黒魔術に対抗したり、予言したり、宝物や失せものを見つけたりした³¹。聖トマス・アクィナスによると、イングランドではこれらの人々は、普段は職人、農民、商人、聖職者などで、本職以外にお金を取って「魔術」を行使していた³²。

しかし、ある人物にとっての白魔術が、他の人にとっては黒魔術になり得た。特に産婆は、出産を補助し、薬草を使って鎮痛や止血もしたが、避妊や墮胎、間引きも引き受けていた。

(3) どのような人が「魔女」として告発されたか

- ①しゃがれ声、外見的には、しわだらけ、眼力で他者に災害をもたらす斜視、赤目、左右で目の色が違う、眼光が鋭い者³³。（〈凶眼〉又は〈邪視〉信仰）
- ②性格的には、ガミガミ女（=英 scold）が多く、次いでふしだらな女性³⁴。

アラン・マクファーレイ著『チューダー朝とスチュアート朝イングランドの魔女術』（1970年）によると、

- ③魔女とその告発者は以前から顔見知りの隣人
- ④多くは、未亡人で、50～70才ぐらいの老人。極貧層に属する訳ではないが、隣人

²⁸ 同上、65頁及び72-73頁

²⁹ 度会、28-29頁

³⁰ 上山、65頁

³¹ 度会、109頁及びスカール／カロウ、9頁

³² スカール／カロウ、15頁

³³ 度会、4及び157頁

³⁴ 同上、157及び162頁

に物乞いをして断られ、呪いの言葉や悪態をついた後に、その隣人の身内や本人に実際に不幸が起きたり、家畜が病気になったり死んだりすると、告発された。³⁵

⑤産婆³⁶。医術が未熟な時代、出産と死は紙一重であった。母子の生死問題に直接関わる産婆は、不幸が起きた場合、告発され易かった。産婆は堕胎をし、或いは生まれたが奇形や経済的理由で始末する役も担っていた事から、『魔女への鉄槌』では、生まれたばかりで洗礼を受けていない嬰兒をデーモンに奉獻する、或いは殺してその肢体から空を飛ぶ為の軟膏をこしらえる、という嫌疑をかけ、「カトリックの信仰にとって産婆以上に有害なものはない」と断定していた³⁷。

ヴォルムスのブルヒャルト（965-1025年）が収集した信者の告解にも見られるように、「呪い」や攻撃的な言葉の「呪力」を信じる信仰や、牛乳や蜂蜜を始め「他人の財産を盗む魔法」に対する信仰も根強かった³⁸。民衆にとっては、家族や家畜を傷付けられた・殺された、バターを台無しにされた、井戸水を腐らせた、悪天候になった、などの日常的な損害が告発の根拠であったが、教会にとっては、「悪魔との情交」が最悪の冒瀆とされ、年齢・性別や身分・職業を問わず、聖職者、判事、博士、市公務員、子供（幼児も）が魔女として告発され、処刑された。

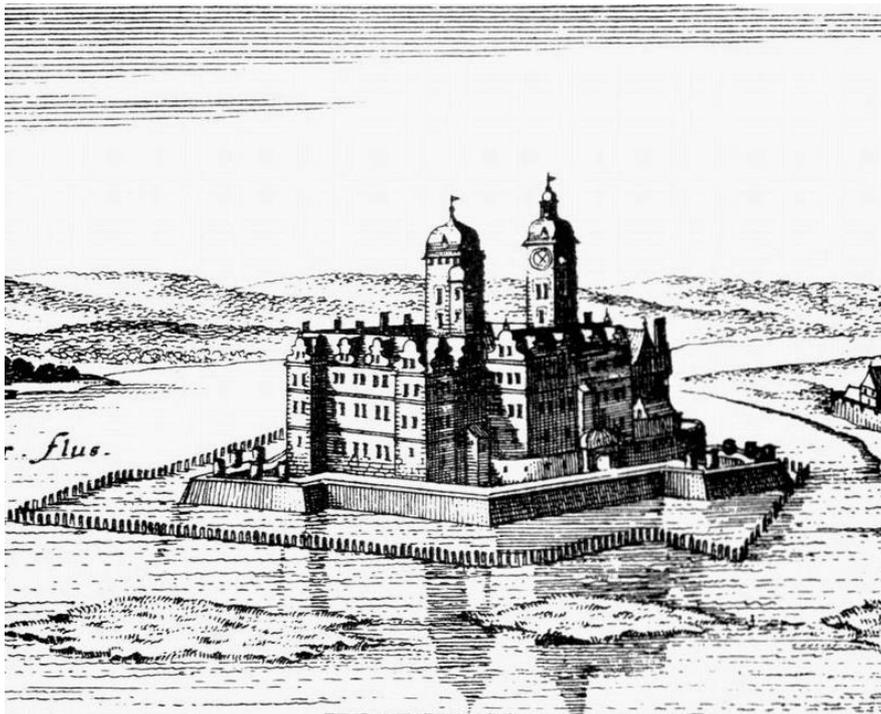


図3 ヴォルガスト城 Matthäus Merian, 1692（銅版画）

³⁵ 同上、142-43頁

³⁶ 度会だけは、「現存する裁判記録で確認できる産婆の数は決して多いとはいえない」（100頁）と、主張している。

³⁷ 大和岩雄『魔女論—なぜ空を飛び、人を喰うか』大和書房、2011年、333頁及び度会、96-97頁

³⁸ 度会、166頁

2 ポンメルン公爵家³⁹

ポンメルン⁴⁰は、オーダー川を挟んで西の前ポンメルン、東の後ポンメルンを合わせたバルト海に面する地域で、北及び北西からはスウェーデンやデンマーク、東からはドイツ騎士団やポーランド、南からはザクセンやブランデンブルクなどの脅威にさらされながらも、ヴァーティスラフ1世（†1135?）が治めて以来、別名「グライフェン」⁴¹とも呼ばれるポンメルン公爵家が1637年まで16代に亘って支配していた。

ポンメルンは、公爵家内の争いや政情により公国が複数の小さな国に分割され、統一した大きな勢力としてドイツの他の国々と匹敵できる程の発展を見る事はなかった。が、この状況は、15世紀にボギスラフ10世が爵位を継ぎ、200年ぶりに統一された約50年間、中断された。ポンメルン公爵家の歴史において最も有能だったボギスラフ10世（大ボギスラフ）は、対内的には国家組織の改革を試み、対外的には1493年のピュリッツ条約により封建関係の解除に成功した⁴²が、その代償として、跡継ぎが途絶えた場合には、公国がブランデンブルク選帝侯の手に落ちる約束が交わされた。妻マルガレーテ・フォン・ブランデンブルクとの間には子に恵まれなかった為、離婚し、まだ14才のポーランド王女と再婚し、生まれた息子のゲオルク1世とバーニム9世はボギスラフ10世没後、協力して政治を司った。ゲオルク1世没後、公国は子フィリップ1世とバーニム9世との間で、ヴォルガスト公国（前ポンメルン）とステッティン公国（後ポンメルン）に分けられた。

両者共ルターの宗教改革を支持し、1534年ヨハネス・ブーゲンハーゲンの指導によりポンメルンはプロテスタントに改宗された。この時、修道院の内5つは貴族達の要請により、未婚の子女が公爵の管理下に生活する施設となった。シドニアが晩年を過ごしたマリーエンフリース修道院は、1248年にシトー派の修道院として設立されたが、1544年に司教が他界すると、プロテスタントに改宗され、1556年からは公爵家が監督を務めていた。

ルターの腹心の友であるブーゲンハーゲンの仲介によりフィリップ1世とマリア・フォン・ザクセンが結婚する運びとなり、トルガウ城の教会で多くのプロテスタントの公爵達の陪席の元、二人はルターの手により挙式した。この婚礼の様子は、1553年に制作されたクロイ・タペストリーに捉えられており、ヴァーティスラフ9世が1456年に創立したグライフスヴァルト大学に現在も保管されている。

フィリップ1世は45才で亡くなったが、息子が5人いた⁴³ので、家系が途絶える心配は無用であるかのようにであった。跡継ぎのいない叔父バーニム9世は、1569年甥達の為に引退し、ヨハン・フリードリヒがステッティンを、エルンスト・ルードヴィヒがヴォルガストを統治する事になった。ボギスラフ13世はバートとノイエンカンフを、バーニム10世はリュウゲンヴァルデとビュートゥを、カジミルはカミーヌ司教区を得たので、公国は5つの国に分割された。ところが、5人共早死にしてしま

³⁹ Wulf-Dietrich v. Borcke. *Sidonia von Borcke: Die Hexe aus dem Kloster Marienfließ*. Schwerin: Helms Verlag, 2002, S. 11–15 及び Fischer, S. 13–38 及び *Neue deutsche Biographie*, Bd. 7. Berlin: Duncker & Humblot, 1966. S. 29–33.

⁴⁰ スラヴ語で「海辺」の意味。1945年より後ポンメルンはポーランド領。

⁴¹ 1214年より紋章に、上半身がワシで下半身がライオンの怪物グリフィンが使われていた。

⁴² ボギスラフ10世は、ブランデンブルクを統治しているホーエンツォルレン家から封土を受け取る形で公国を統一した後、封土的関係を解除しようと努力していた。

⁴³ 七人の内二人は夭逝。

う。

エルンスト・ルードヴィヒとボギスラフ13世のみが跡継ぎを残したが、この時点で6人いた跡継ぎの内、50才まで生き長らえられたのはボギスラフ14世のみで、1625年に公国は再び統一されたものの、ボギスラフ14世は既に病める47才で世継ぎは無く、1637年に亡くなると、一族は途絶えた。

ポンメルンは30年戦争（1618-48）の時期からスウェーデン軍と帝国軍の戦場であり、同戦争で50%以上の人口を喪失した⁴⁴。1648年のウェストファリア平和条約で同国はスウェーデンとブランデンブルクに分割され、前ポンメルン（リュウゲン島、ヴィスマー、オーダー河河口を含む）は封土としてスウェーデンに与えられ、ブランデンブルクは後ポンメルンの大部分を得、ポンメルン公国は消滅した。

正確には、1620年にシドニアが処刑された時、ポンメルン家はまだ途絶えていなかったが、シドニアの魔女裁判が始まった前後にフィリップ2世とフランツ公が死亡した事より、二人の死が「魔女」シドニアに結び付けられ、「美形のエルンスト・ルードヴィヒ公に振られたシドニアがポンメルン公爵家を呪って絶滅させた。」という伝説が出来上がったのではないかと想像される。

ポンメルン家系図⁴⁵

Phiipp I. (1515-60) ∞ Maria von Sachsen (1515-83)

- Georg (1540-44)

- Johan Friedrich (1542-1600) ∞ Erdmuth von Brandenburg

- Ernst Ludwig (1545-92) ∞ Sophia Hedwig von Braunschweig-Wolfenbüttel

- Hedwig Maria (1579-1606)

- Elisabeth Magdalena (1580-1649)

- Philipp Julius (1584-1625) ∞ Agnes von Brandenburg

- Bogislav XIII (1544-1606) ∞ Klara von Braunschweig-Lüneburg

- Philipp II. (1573-1618)

- Franz (1577-1620) ... Stettin ∞ Sphie von Sachsen

- Bogislav XIV. (1580-1637) ∞ Elisabeth v. Schleswig-Holstein-Sonderburg

- Georg II. (1582-1617)

- Johann Ernst (1586-90)

- Ulrich (1589-1622) ∞ Hedwig von Braunschweig-Wolfenbüttel

- Barnim X. (1549-1603) ∞ Anna Maria von Brandenburg

- Erich (1551-51)

- Casimir VI. (1557-1605)

⁴⁴ Gerd Fesser. *Duden. Basiswissen Schule: Geschichte*. Hrsg. Prof. Hans-Joachim Gutjahr. Mannheim: Dudenverlag, 2007, S. 256.

⁴⁵ https://de.wikipedia.org/wiki/Stammliste_der_Greifen#Bogislav_X._bis_Bogislav_XIV., <http://www.ruegenwalde.com/greifen/>, 2016.11.8. 及び Borcke, 2002, S. 12。小説に出て来る人物以外の女子は省略

第二章 伝承の中のシドニア像

ハーマンによると、「詩人及び小説家が参考文献としたのは、裁判記録の他、主に J. C. デナート⁴⁶とバートホルド⁴⁷の著書であった（前章）」。この章では、数多い史書や伝承集の内、この二人の年代記からシドニアの運命がどのように著されているか検討する。尚、小説に出て来る人物には初出時に下線を引いた。

1 J. C. デナートの記述から⁴⁸

デナートは、

方々から取りなしが試みられたにもかかわらず、シドニア・フォン・ボルケは、1620年にステッティンのミューレントアの前で斬首されてから火刑に処された⁴⁹。シドニアの身分が高かっただけに年代記作家達はこの件を述べずにはいられず、その結果シドニアの話は寓話が混ざり、或いは完全なフィクションであると信じられるようになった。例えば、[...] 裁判記録では生殖能力も結び紐⁵⁰も問題にされていない。以下は、グスタフ・ハインリヒ・シュヴァレンベルク⁵¹を手本に、裁判記録に忠実に、シドニアへの冤罪を証明しようとするものである。

と断っており、第四巻に収められたデナート自身の叙述は裁判記録に忠実であると思われるが、第五巻には他の執筆者による補足が付け足され、特にデナートが手本としたシュヴァレンベルクによる「シドニアの肖像画に対する補足⁵²」とされる「記録」は、フィクションである〈シドニア伝説〉そのものであり、結果としてデナートの著作も史実ではなく、フィクションを広める事になってしまっている。

(1) シドニア伝説

〈シドニア伝説〉とは、

ポンメルンで一番美しく一番裕福だったシドニア・フォン・ボルケは、身分相応の求婚者をにべなく振り、大抵をヴォルガストの宮廷で過ごし、フィリップ1世の七人の子息の内、当時二十歳の、ポンメルン家一の美形だったエルンスト・ルードヴィヒ・フォン・ヴォルガストと結婚の約束を交わした。しかし、ポンメルン公爵家は、ドイツ全土で一番美しいヘドヴィヒ・フォン・ブラウンシュヴァイク姫の肖

⁴⁶ Johann Carl Dähnert. *J. C. Dähnerts Pommersche Bibliothek, Vierter & Fünfter Band*. Greifswald: Dähnert, 1755 & 56.

⁴⁷ Friedrich Wilhelm Barthold. *Geschichte von Rügen und Pommern. Vierter Theil, zweiter Band*. Hamburg: Friedrich Perthes, 1845, S. 485-500. 但し、上記バートホルドの記述は1845年に出版されたので、次章で紹介する小説の内、最後のマインホルト以外の作品には影響は与え得ない。

⁴⁸ Dähnert, 4. Band, S. 233-51.

⁴⁹ 火刑は極刑、絞首刑はやや軽い刑で、剣による斬首は「慈悲」ある刑であった。（浜本隆志『魔女とカルトのドイツ史』講談社、2004年、101頁）

⁵⁰ = Nestelknüpfen. 結婚式の最中に紐に三つの結び目を作ると、自分を捨てて他の女と結婚した憎い男の結婚を台無しにできる、という呪術。（度会、24頁）

⁵¹ 歴史家 Gustav Heinrich Schwallenberg (1644-1719)。文献によっては Schwalenberg。

⁵² Dähnert, 5. Band, S. 426-27.

像画を用いてエルンスト・ルードヴィヒに心替えさせ、シドニアとの婚約は破棄された。

シドニアは公爵家の嫌がらせを根に持ち、屈辱感は年々強くなって行った。又、聖書の代わりに『アマデイス⁵³』を愛読し、恋人の騎士に振られた婦人が呪術を用いて仕返しをした、という話を沢山読んでいたので、自らも、ある老女から習った魔法を用いて悪事を沢山働き、とりわけ六人の公爵に魔法をかけ、それぞれ若い奥方がいたにもかかわらず跡取りを根絶させた。

1618年に爵位を継いだフランチ公爵は、魔女退治に積極的で、それらが拷問にかけられると、一致してマリーエンフリース修道院の女子修道院長であったシドニアを「魔女だ」と誣告したので、公爵の命令によりシドニアはステッティンに護送され、公爵家を根絶させた事を自白した。

存命の公爵達の身から呪いを解く代わりに公爵が恩赦を約束したが、シドニアは、

「悪魔に聞いてみたが、錠をかけ、川に投げ入れた呪いを拾う事は禁じられている」と、悪魔が答えたと言う。そこで、隣国の公爵や選帝侯らのとりなしが試みられたにもかかわらず、シドニア・ボルケは1620年にステッティンのラーベンスティンで斬首されてから火刑に処された。

火刑後、公爵は宮廷絵師に命じて、若い頃のシドニアの肖像画に、牢屋でのシドニアの肖像を付け足して描かせ、[シュヴァレンベルクの]祖父もシドニアの魔術によって殺された事から、ボギスラフ 14世はその絵を[シュヴァレンベルクの]祖母に贈った。

というものである。それに対して、以下は、デナート自身が記述している部分の引用であり、史実に近いと思われる(236-37頁及び246-49頁)。シドニアに関しては、

- ・ 魔女の嫌疑がかけられた1619年には80才であった。
- ・ シドニアは、誇り高く、大胆、邪悪、我が儘で好奇心が強く、迷信にとらわれていた。隣人と仲良くする才能が欠落しており、皆がおののき恐れ、こそこそと隠れたりすると、自尊心がくすぐられた。
- ・ 一族の威力を鼻にかけ、「お城育ちの令嬢」と自称し、他の修道女達を「職人風情の娘」呼ばわりしていた。
- ・ シドニアは修道院長ではなかった。院内の序列は11番目であった。
- ・ 女子修道院長をさしおいて共同の食堂を勝手に自分のものにし、他の人に入室を禁止していた⁵⁴。
- ・ まるで宮廷家庭教師の権化のように院内の風紀に気を配り、特に修道女達が結婚話に花咲かすのを許さなかった。牧師の病気を心配する修道女達を疑い、ドロテア・ステッティンがリュデケ牧師と祭壇の後ろで話していたのを、「猥褻行為」として役員会に報告した。
- ・ 高齢のせいとは言え、好奇心が強く、占い師、中でもヴォルデから新しい噂と嘘を仕入れては気前よくほうびを与えた。それで、これらの老女共は報酬を得ようと、シドニアの元を訪ねた。殊に修道女達にとって、勝手に処女性を言い当てられるのは迷惑だった。
- ・ しかしそのくせ、シドニア自身結婚相手としてヴェーディヒ・フォン・ヴェーデルに目を付けており、占い師達に相談する必要があった。

⁵³ Amadisromane の事。中世後期に人気を得た騎士物語。現存する一番古い物は Garci Rodríguez de Montavlo の著作(1508)であるが、1370年の Vasco de Lobeira 著作の題名が *Amadis de Gaula* (主人公の名) だった。(https://de.wikipedia.org/wiki/Amadis_de_Gaula, 2016.9.8. 参照)

⁵⁴ デーナート曰く、この序列志向のせいで後世の歴史家が誤ってシドニアを女子修道院長だと勘違いした。他の修道女達は20才に満たない者もいた。(247頁)

- ・複数の訴訟を起こしていたので、他の修道女に比べて出掛ける事が多く、門番との間に摩擦があった。
- ・二人の地方代官の公正さに目を光らせ、ザーツィヒの代官であったヨースト・フォン・ボルケに対しては、荷車 83 台分の壁石を自領のストラメールに運ばせた嫌疑をかけ、マリーエンフリースの代官エッガート・スパーリングに関しては、年々公爵領から家畜を横領⁵⁵し、屠殺されなかった家畜を売って 300 フロリン儲けた事を宮廷に報告した。
- ・人に嘲弄的なあだ名を付ける事に長け、デヴィッツ、スパーリング、ウフターハーゲンのヴェーデルの事はそれぞれ「ずさんなデブ」、「ザーツィヒとウフターハーゲンの奴ら」と呼び、宮廷の事務官を「詐欺師」・「文書奴隷」・「庶民の男」と呼び、年配の女子修道院長を猫呼ばわりしていた („Katze Branschau“)。
- ・このようなシドニアの性質は教育の欠如の結果である。

(2) シドニアに対する魔女裁判の経過

シドニアが占い師の中で一番頼りにしていた老女ヴォルデ・アルプレヒトは、何年もジプシーと放浪していた経歴があり、魔女の嫌疑で1619年9月7日に拷問にかけられると、次の事を白状した。(237頁)

- ・同僚の修道女達がどのような男達と結婚するであろうか、特にカタリーナ・フォン・ヴェーデルはまだ処女だろうか、などを悪魔に聞いて欲しい、とシドニアに頼まれた。
- ・シドニアにはヨアヒム或いはヒム⁵⁶という名の魔物がいたが、威力が弱いので、ヴォルデの悪魔ユルゲンの助力で修道院のリュデケ牧師及び門番マティエース・ヴィンターフェルトの首をへし折って欲しい、とシドニアに頼まれた。そして、それは遂行された。
- ・一緒に呪術をしたので、シドニアから毛皮のコートをもらった。
- ・魔女仲間のマリーエンフリース村の他の農婦の名前を挙げた。⁵⁷
- ・牢屋にシドニアが下女を送り込み、ヴォルデに暴行を加えさせた。

ヴォルデが処刑される前にシドニアは裁判でヴォルデと対決しなければならなかった。公爵家の法律顧問クリストフ・リュデケ⁵⁸が検事、ヨースト・フォン・ボルケとエッガート・スパーリングが陪席、公証人クリストフ・ラーンが書記を務めた。先にヴォルデ一人を呼び入れ、自白内容が真実であるかどうかを確認し、次にシドニア一人を尋問しようとしたが、シドニアは「このような不自然な忍耐力の検査に無実な自分を委ねる事(238頁)」に懸念を示し、敵ヨーストのいる室内に入る事も最初は拒否した。

シドニアは、「親戚の絆をズタズタに裂いたヨーストは見るのも嫌だ、自分の父親の領地を横取りし、自分への生活費の支払いが滞っている。」と、訴えた。「ヒムという悪魔を持っているか」という審問官の質問には怒って、「そんな事を言う奴こそ悪魔に連れてかれるが良い！」と言い放った。

ヴォルデが呼び入れられ、シドニアの前でも上記を証言すると、シドニアは激怒し、ヴォルデを「嘘つきの売女」と呼び、検事にもヨーストにも怒りをぶつけ、友人達と仕返しをしてやる、と脅した。ののしり暴れながらシドニアは退席させら

⁵⁵ 「雌馬 11 頭、羊 150 頭、牛 16 頭、種豚 42 頭を不当に所有」 (251 頁)

⁵⁶ シドニアが飼っていた猫の事。

⁵⁷ 証拠が無いのでその者達は罰せられなかった。(237 頁)

⁵⁸ マインホルトの小説では牧師リュデケと検事リュデケは兄弟。

れ、修道院内の部屋で監禁される事になった。が、身に危険を感じた審問官は、11月22日にシドニアをオーダーブルクの狭い牢屋⁵⁹に護送させた。

6名の修道女を含む8名から事情が聴取され、心ない噂を根拠に下記の条項がまとめられた。(239-40頁)

- ・シドニアは、フィリップ2世⁶⁰を呪い殺したかヒムに殺させ、崩御を喜んだ。証拠は、修道院の醸造舎で目撃された一匹の兎で、同じような兎はボギスラフ公爵の死後も修道院で目撃された。この兎は、[猫の]ヒムが兎の姿に化けてシドニアに殺害成功の報告をしようとした姿で、大ボギスラフ公の崩御の後にも目撃された。⁶¹
- ・ヨーストも健康が優れず、シドニアに呪いをかけられているような気がしている。
- ・審問官も、シドニアが、手を掲げて「復讐してやる！」と怒り、指で十字を切ったのは、魔法をかけようとしたのだと断定した。
- ・甥オットー・フォン・ボルケを呪い殺した。
- ・門番ヴィンターフェルトと牧師リュデケが亡くなった件で、牧師が説教壇からシドニアを魔女と指差した事から、シドニアは牧師を殺した。牧師は、何週間も四肢の痙攣に苦しんだ後、寝込み、5日後に亡くなった。片方の下肢は茶色い瘡に覆われ、鼻と口から出血しており、胸が唇の高さまで膨らんでいた。シドニアは二人の事でよく悪態をついていた。
- ・敵の不幸を喜び、「犬や猫の喧嘩と一緒に！⁶²」と言った。
- ・シドニアは既に処刑された魔女達と交流があり、その死を残念がり、泣いたりしていた⁶³。
- ・物を失くすと、その者達に相談していた。
- ・シドニアの机の下には時折箒が1~2本置いてあった。⁶⁴

これらの噂は裁判中にも広まり、当時シドニアがどれだけ恐れられたかが次の記述から見て取れる。(240-41頁)

- ・メレンティン家の従兄弟同士がシュレテニッツとシェリンの間を旅しながらシドニア裁判の噂話をしていた処、突然突風が吹き、馬二頭が馬車から脱走し、結局スタガートで捕まえた時には全く怯えている状態だった。馬丁はしばらく経ってから死んだ。
- ・二年前、ウフテンハーゲンのクリストフ・フォン・ヴェーデルがケーニヒスベルクから帰宅する日を、シドニアが義母に予言した事があった。

これらは、わざわざ検事に報告された。

シドニアは、著名な弁護士であったエリーアス・パウリ博士に弁護を頼み、彼は全力を尽くした。1619年12月4日、公証人と書記官の前で74項目の尋問に関して返答を求められ、シドニアは全て否定したが、既に火刑に処された者達に用事とパンを与えていた事は否定せず、病気を理由に挙げた。パウリ博士が132項目の質問を用意し、逆に検事がこれらに答えた後、証明と反証に入った。シドニア側の証言者はマリア・フォン・ヴェーデルを含む28名だった。(これらの証言を記録した物は紛失。)

⁵⁹ 通常魔女は、術を使って脱出しないよう、狭い部屋に閉じ込められた。(浜本、95頁)

⁶⁰ 1618年に卒中発作を起こして亡くなった。

⁶¹ 白い首輪をした三本足の兎又は猫がシドニアの部屋の前に座っていた。(5. Band, S. 129)

⁶² „So kleyen und kratzen meine Hunde und Katzen!“ (4. Band, S. 240) 小説にも出て来るシドニアの言い癖。5巻129頁では „So krabben...“

⁶³ 起訴された他の魔女達に同情し、死装束を寄付していた。(4巻、246頁)

⁶⁴ 又は、緑の箒を机の下に十字に置いていた。(5. Band, S. 129)

証言が検討された後、マクデブルクの裁判所の判決が出、1620年7月26日に刑吏が拷問具を見せながら「自白しなければ温情を以てしかし厳しく痛めつけられる」と脅した後、17項目の尋問が行なわれ、28日にオーダーブルクの大ホールにてカロリーナ刑事法典に基づき拷問が執行される事になった。市長テオドル・プレニース博士⁶⁵始め五人が列席した。シドニアは拷問室に連れて行かれ、マイスター・ハンスが拷問具を見せ、「事実は必ずや引き出される」と、威嚇した。「自分は悲しみにやつれた弱い老女であるから、弁護士を呼んで欲しい」という主張が聞き入れられないと知るや、シドニアは神に、「もし私自身に罪があるのであれば、印をお与え下さい。」と、祈った。そして、「このような不公平な判決を下した者は最後の審判の日には責任を取り切れないであろう。」と、付け加えた。(241-43頁)

デナートは、「シドニアは、拷問されるぐらいなら自刃する⁶⁶、と言う程拷問を恐れていたのです、自白できる事があればしたであろう。」と言っている。

刑吏と下僕に下着姿にさせられ、両手を背に縛られ、梯子に寝かされても、シドニアはまだ否認していたが、足に締め具を着け、綱が引っ張られるとやっと魔女である事を認めた。目隠しをさせられ、更に「スペイン風ブーツ」が締められ、認めたのは下記の事項である。

- ・サタンに水銀を使って毒殺する方法を教わり、ビールに水銀を注いでリュデケ牧師を毒殺した。
- ・ヒムに関して：ヴォルデが悪魔のヒムを灰色の猫の姿で持って来た、シドニアの部屋の屋根裏に住んでいた、ヒムにほうびに魂を約束した、人間の男姿のヒムと同衾した、精子は冷たかった。
- ・甥オットーとの訴訟に勝てなかった為、悪魔を使ってフィリップ公を殺害させた。
- ・修道院で目撃された兎はヒムであった。ヒムをコートに隠して牢へ運び、牢の中でも男の姿のヒムと毎晩同衾していた。
- ・下女トリーネが見本の布を盗んだので、家の中に毒を注ぎ、トリーネは脚に障害を負った。
- ・甥オットーに関しては、下女アンネに毒を盛ったワインをデヴィッツ家まで届けさせた。甥はその8日後に死んだ。(費用 1 Düttgen)
- ・ヒムを使ってヨーストにも病災をもたらした。

こうしてシドニアは魔女裁判の犠牲となったが、最大の原因はヴォルデの「シドニアも魔女」という誣告であった。ヴォルデは修道女達のせいで拷問に遇ったと考え、とりわけシドニアを疑った。以前は仲良かったが、鞭で叩き出されて⁶⁷ヴォルデは、シドニアが密告したと勘違いし、拷問中シドニアのみか二人の農婦も魔女として誣告した。

その他、デナートがシドニアに関して記述しているのは、

- ・勾留中にシドニアの住居が搜索されたが、家財道具と選り抜かれた祈禱書以外には何も見つからなかった。
- ・シドニアは、誰をも誣告しなかった。
- ・「何とか火刑を回避し、斬首されたい」と、漏らしていた。

⁶⁵ マインホルトの作品の本文はプレニース博士が書いた報告書になっている。

⁶⁶ しかし、キリスト教の教えに従って、自殺は試みなかった。(249頁)

⁶⁷ ヴォルデが予言しないと、鞭で叩いた。(250頁)

2 バートホルド⁶⁸の記述から

年代記作家バートホルドの記述は、女子修道院長の名前を間違えるなどの不正確さや所々主観も含まれている。それは、シドニアの処刑から225年経っているにもかかわらず、シドニアを「教養が無く、手跡は幼稚」或いは「完全無罪であるとも思わない」、副修道院長を「自身も評判が悪い」、修道女 アンナ・ヘッボーンを「処女とは言えない」などと断定している箇所に見られるが、デナートの記述には無い、裁判の内情や導入された背景などにも触れている。以下は全てバートホルド作『リュウゲン島とポンメルンの歴史』からの引用である。

「裕福で美しいシドニアは、身分相応の求婚者を無視し、大抵ヴォルガストの宮廷で過ごし、フィリップ1世の子息の内、メランコリーなリュートの弾き手であったエルンスト・ルードヴィヒから結婚の約束を取り付けた。しかし、それは公爵家の手により解消され、ゲルフ⁶⁹の子孫が充てがわれた。」という伝説には証拠が無い。父親の封土は兄オットーが相続し、シドニアは抵当としてツァッホーにあるいくつかの農場を相続したに過ぎなかった。彼女は教養が無く、自分の名前 **Szidonia Borcke** も幼稚な手跡であり、『アマデイス・フォン・ガリエン⁷⁰』も聞いた事がなかったであろう⁷¹。彼女は定住地を持たず、後ポンメルンを転々とし、身分の釣り合わない冒険者何人かと結婚の約束をしてはその解消になけなしの財産を失い、一族は苦々しく思っていた。

ボギスラフ13世の娘であるクララ・マリア・フォン・メクレンブルク公爵夫人が後援を申し出たものの、シドニアはヴォルガストの宮廷との繋がりがあったためしは無かった。しかし、シドニアと年齢の近かったエルンスト・ルードヴィヒ公の死は実際に不可思議であったし、その娘⁷²の不可解な病気や、ヨアヒム・フォン・ヴェーデルの言う処の「ヴォルガスト城における悪魔現象」も記憶に新しい。1610年のヴェーデルの死も、シドニアの魔法のせいとされている⁷³。

当のシドニアは57才になりながらもまだ結婚するつもりでいたが、1604年に高貴な人々の尽力とボギスラフ13世の同情を得てマリーエンフリース修道院に入る事になった。そこには22人の修道女が起居していたが、シドニアよりずっと若かった。女子院長 マルガレータ・ペーターズドルフ⁷⁴の下、シドニアは副院長の地位を得たが、一年も経たない内に院内の規則に抵抗し、支配欲・思い上がり・口の悪さ・修道院に相応しくないのしり癖・おせっかいと暴力で揉め事を起こし、皆にひどく嫌われ、副院長の位も取り上げられた。修道院長ヨハン・フォン・ヘイトハウゼン

⁶⁸ Barthold, S. 486-500.

⁶⁹ Guelfen. ローマ教皇派。 (<https://ja.wikipedia.org/wiki/教皇派と皇帝派>, 2016. 9. 13. 参照)

⁷⁰ 1370年のヴァスコ・デ・ロベイラ著作アマデイス・デ・ガウラ（主人公の名）の事。 (https://de.wikipedia.org/wiki/Amadis_de_Gaula, 2016. 9. 8. 参照)

⁷¹ 一族の中には文盲もいた中、シドニアは、常に貧困と闘う一生であったにもかかわらず、従姉妹達に比べて多くの書籍を有していた。1619年に逮捕された際に記録された所有物の中には、インク壺や手紙の他、宗教書や祈禱書は勿論、ハーブに関する本も含まれており、自分で薬を処方した。(Borcke, 2002, S. 36)

⁷² Elisabeth Magdalena を指すと思われる。マインホルトの小説ではシドニアの呪いにより悪魔に取り憑かれてしまう。

⁷³ ヘイトハウゼンによると、シドニアは祈りによって敵を罰する事ができると自慢していた。

⁷⁴ 正しくは、マグダレーナ・フォン・ペーターズドルフ

はシドニアの事を公の場でも「修道院の悪魔」・「落ち着かぬ人物」・「蛇」などと呼んだ。

シドニアは、事ある毎にボギスラフ 13 世やフィリップ 2 世に不満を訴えたが、仕舞には、態度を変えなければ修道院を出て行くようにと脅される始末だった。しかしシドニアは 60 才の高齢ものともせず、門の南京錠を斧で叩き壊し、好き勝手に修道院を留守にし、外界の人々と交際した。

ヴェーデル、ヘヒトハウゼン、ペータースドルフが没し、代わりにシドニアの従弟ヨースト・フォン・ボルケが教区臨時管理者、エッグアート・スパーリングが修道院長、アグネス・クライストが女子院長になった。

1615 年に親族間の訴訟が加わると、雲行きが変わった。シドニアが相続したツァッホーの農家を甥のオットーがヨーストに譲渡してしまい、シドニアの生活費が切り詰められてしまったのだ。シドニアはフィリップ公に助けを求めたが、公爵は、忠実な家来であるヨーストに対するシドニアの嫌疑や、修道院の風紀に関わるスキャンダル⁷⁵、占い師とシドニアの関わりを良く思っていなかった。1617 年 12 月に公爵が崩御し、甥も突然死すると、愚かなシドニアは人の不幸を隠さず喜んだ。新しく公爵位に就いたフランツは魔女に対して容赦なく、ここにてシドニアの敵が一丸となって用意周到に準備した訴訟を起こす機会が訪れた。最高法院長も寛大なマルティン・ヒュムニッツからパウル・フォン・ダミッツへ交替し、宮廷裁判は悪魔払いに好意的なマティーアス・フォン・カーニッツが取り仕切り、ステッティンとヴォルガストの宮廷裁判の検事クリスティアン・リュデケがヨーストの利益を擁護する事になった。

シドニアと折り合いの悪かった牧師ダヴィド・リュデケと門番マティーアス・ヴァンターフェルトも怪しい死に方をし、ヨーストも病に次々と襲われたと感じていた。1619 年 7 月 28 日ヨーストと修道院長スパーリングが、シドニアが起こした訴訟の調査と称して修道院で事情徴収し、逆にシドニアに対する宗教裁判を起こした。ヨーストは、シドニアに名誉毀損で訴えられている三人の修道女、アンナ・アーペンボルグ、自身も評判の悪いドロテア・ステッティン、処女とは言えないアンナ・ヘッボーンに、シドニアとヴォルデ・アルプレヒトの関係について調書を取った。老ヴォルデは、若い頃タタール人と放浪した、ふしだらな半ば狂気じみた嘘つき女で、予言と魔術で金を取っていたものの、宿なしの極貧生活をしていた。自身に影響は及ばないとヨーストに騙されて、ヴォルデは修道女達の結婚と処女性についてシドニアに尋ねられた事を白状した。シドニアは、ヴォルデと交流していた事は認めたが、ヨーストをののしり怒りをぶちまけた。

ヴォルデは逮捕され、迷信深いフランツ公の特命でフランクフルト・アン・デア・オーダーの法学部に鑑定させた後、同年 9 月 7 日にヨースト、修道院長と正式な公証人ではない書記の前で拷問が執行され、全ての罪状を認めた。遺産を失いたくないヨーストは、規定に違反してもシドニアを壊滅させようとした。最も悪趣味で命の危険に迫る罪状は、「ヴォルデもシドニアもそれぞれ悪魔を持ち、その助力で牧師と門番の首をへし折った」という箇所だった。驚愕したフランツ公は同月 25 日にステッティンの最高裁判所に書類を回し、ヴォルデの処刑が決まったが、その前にシドニアと対決させる事になった。28 日にクリスティアン・リュデケが検事に任命され、10 月 1 日にヨーストと修道院長の前でシドニアは罪を否定した。

⁷⁵ シドニアは、牧師リュデケがシドニアに聖餐式を拒んだ事、同牧師が副院長ドロテア・ステッティンと情愛関係にあると訴えた。

シドニアは「魔女」の嫌疑を烈しく否定し、ヴォルデを非難しリュデケを「獄吏よりもあくどい」と、罵倒したので、公爵の命令により修道院内で監視される事になり、自身がステッティンに赴いて直接訴える事は禁じられた。シドニアを共犯者としながらヴォルデは、8日にマリーエンフリースのそばで焚刑に処された。

主要証人の死で前言撤回はできなくなり、シドニアに対する訴訟は続行された。世の全ての人々から嫌われ見放され、シドニアが自殺を口にし、無駄な逃亡を試みた事から、12日にも修道院よりも「安全な」場所への護送が申請された。リュデケは、軽卒な事情調査で集めた16年来の噂から40ヶ条の告発状を用意し、それに加えて「フィリップ公を呪い殺した」という、それまで誰も口にしなかった嫌疑も加えた。真面目な訴訟手続きを取る事なく、主に修道女達やヴォルデその他の敵の心ないおしゃべりを根拠として条項をまとめ、更に、略式の裁判、及び法律上の恩典を与えないよう心がけ、「充分狭い牢でなければ魔法で人々に危害を与え兼ねない」とし、11月21日に公爵の命で、かつてはバーニム10世の住居であったが既に荒れ果てたオーダーブルクに護送された。これで、シドニアの取るに足らない持ち物、特に、訴訟好きで全ての書類を整理していたファイルも意のままに処分する事が叶った。僅かでも自殺の兆候が無いかどうかなども獄吏から聴き取られ、12月2日には74ヶ条以上の訴訟項目が宮廷裁判所に提出され、拷問が申請された。しかし、ほとんどの項目は信じられない程馬鹿げていた。例えばシドニアが「ザクセン・シュピーゲル」をもらい受けたので、ヒムという名の霊或いは悪魔の助力で予言でき、呪いで前述の人々やフィリップ公の命を奪った、など。12月3日に取るに足らない嫌疑を認めてしまってから、シドニアはエリーアス・パウリ博士に弁護を頼んだ。しかし、シドニアの支払い能力を疑問視する弁護側は、告発側が酌量軽減申請の除訴期間を設定するまで動こうとしなかった。とは言え、シドニアの無実を信じていた節のあるパウリ博士の努力は認めざるを得ない。1620年2月29日にパウリ博士は反証提出の期限を延ばす事に成功したものの、5月5日のマクデブルクの裁判所に提示された反証は未完成だったと思われる。パウリ博士下の弁護士オイスタヒウス・ロートマンは更に勇敢で、4月26日のマリーエンフリースにおける証人喚問でも「11年も前に処刑された女を引っ張って来てシドニアに関連づけるのはお笑い」と、言っただけ。気を悪くした検事は翌日付けの公爵宛の書状でロートマンを、「仕立屋の息子の分際で、本来ならば正直な人々の靴磨きをしなければならない処を、文書屋をしているおしゃべりな若造」呼ばわりし、「鞭で教育し直すべき」と、怒りを露わにした。これに対してロートマンは公爵に、リュデケが如何に不道徳的⁷⁶かの証拠を提示した。高等裁判所は、1620年7月26日に規定通り刑吏が拷問具を見せながら先ず脅す。「自白しなければ温情を以てしかし厳しく痛めつけられる。」そして、17項目の尋問⁷⁷が行なわれた。

1620年7月28日にオーダーブルクの大ホールにて宮廷代官、市長、刑吏や何人かの裁判所職員の前にシドニアが連れて来られ、拷問具を見せながら使用法を説明して尋問が行なわれた。告発状の全条項を否定し、神に誓って無罪である事、特定の人を損なう為に旧約聖書詩篇109章を唱えたのではない事、祈る事は罪ではないし、罰せられないはずと主張した。不幸の大本であるヨーストへの憎しみを押さえ

⁷⁶ 不道徳的= lüderlich を Lüdecke に引っ掛けた駄洒落。(496頁)

⁷⁷ 魔法を行使できるのか。誰に男色魔をもらったのか。牧師、フィリップ公、門番、女子院長、ヨアヒム・フォン・ヴェーデル、オットー・ボルケを魔法で殺害したのか。又、修道院長をひどい目に遇わせるなどの悪事を働いたか、など。

ず、取るに足らない罪状⁷⁸しか認めようとしなかった。そこで、高齢にもかかわらず下着姿にさせられ、首の十字架を取りあげられ、梯子に縛り付け、足に締め具を着け、目隠しをさせられると、シドニアは全ての嫌疑を認めた。

シドニアが、決定的な告発は認め、取るに足らないものを否定したのは謎である。

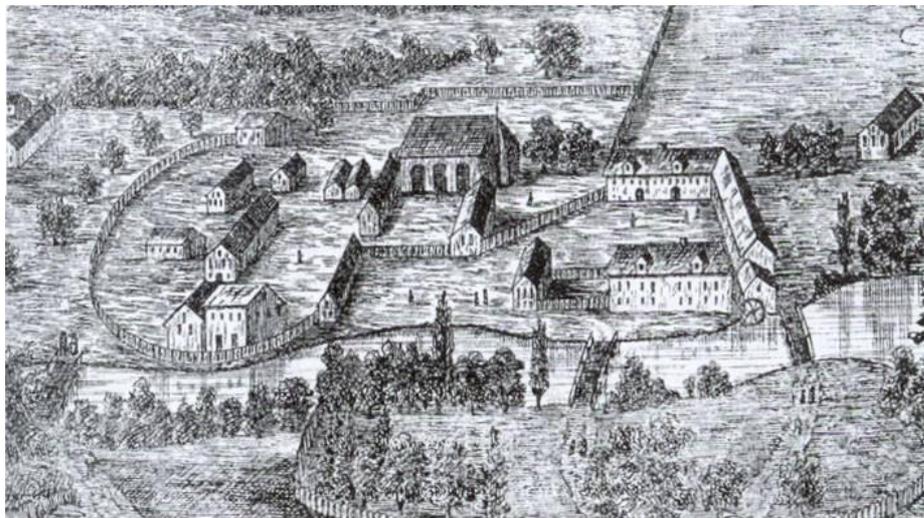
異議があるかどうか尋ねられると、「これ以上生きていたくない」と言い、拷問から解放され、「自白」した内容が読み上げられると、内容を認め、牧師と最後まで忠実であった女中を呼んで欲しい、と願った。

書類の原文はここで終わる。後は、装飾された或いはでっち上げられた伝説の通りである。フランツ公爵がシドニアに怯えて、生き残っている公爵家男児が早死にしないように、又、男児に恵まれない奥方達の呪縛を解けば恩赦を与えようとしたが、「呪いが結合された錠前は、ヒムすら湖の底から拾い上げる事ができない」と言った、など。

シドニア・フォン・ボルケは1620年8月19日に、伝えられる処では隣国の侯爵達のとりなしにもかかわらず、しかし慈悲で斬首されてから焚刑に処された⁷⁹。そして、その前に公爵家の画家が、若い頃のシドニアの肖像の背に不格好な肖像を付け足した。

しかし、私はシドニアが完全無罪であるとも思わない。若い時の暴飲暴食により早くに命を枯らした公爵や他の人を殺害したという証拠は必要無いし、ビールに水銀を注いだという説も、毒の盛り方が簡単過ぎる。しかし、シドニアが、魔女に傾倒したり、他の人に仕返しをしたり、害を及ぼす祈りをした悪意や、人の不幸を喜んだ事は否定できない。

以上、デナートが魔女狩りの盲目さに怒りを滲ませ、啓蒙的な熱意を以てシドニアの無実を証明する裁判記録を披露したのに対し、バートホルドは無論魔女の存在を信じてはいないが、シドニアに対しては「完全無罪であるとも思わない」と言い、批判的な態度で裁判の過程を記述している。



⁷⁸ 風変わりな薬草風呂、逃亡未遂など。

⁷⁹ 火刑は極刑、絞首刑はやや軽い刑で、剣による斬首は「慈悲」ある刑であった。（浜本、101頁）

第三章 小説の中のシドニア像

1 C. A. ヴルピウス作『注目すべき名高いご婦人方のパンテオン』⁸⁰

(1) 主な登場人物

Sidonia von Borke

Prinz v. Pommern (王子)

公爵 (王子の父)

(2) あらすじ

田舎育ちにもかかわらず誇り高く、自己の美しさを過信していたシドニアは、最初から結婚相手は王子、と決めていた。それで、町へ出て宮廷に入り、王子を誘惑した。ある時は好意に満ちた、或いは媚びるような眼差し、別の時には命令的で脅すような視線にすっかり惑わされた王子は、すぐにも求愛した。王子がシドニアに、自分に愛と心を捧げ、幸福にしてくれるよう頼むと、シドニアは、

S: そのような事を私に話すべきではございません。私も又、そのような事を聞くべきではございませんわ。

E: え? お嬢さん、何と? そなたこそ...

S: 私が何か?

E: 私を優しい、恋した目で...

S: そう取られたのですか? 勘違いなさっただけです。

E: え? 勘違い? どういう事ですか?

[...]

S: 私の愛と心は将来の夫にしか捧げられません。王子は私の夫になれますか?

E: なれます。

S: 許される事でしょうか?

E: なりたいのです。

S: 私を誠に愛しておられるなら、証拠を示して下さい。本当は... 申し上げるべきではないのですが...、私も...

E: そなたは私の事を慕っておられるのでは...?

S: 王子!

E: 私の事を愛していらっしゃるのでは?

S: まあ!

E: そうなのですか? そうだとおっしゃって下さい、美しいシドニアよ。 [...]

S: ああ! そう言いたいとしても、王子、私達は愛し合ってはなりませんわ。ご両親がそんな事... もう私達はお会いしてはなりません。私は故郷の田舎に戻ります。

⁸⁰ Christian August Vulpius. *Sidonia von Borke*. In: *Pantheon berühmter und merkwürdiger Frauen*. Dritter Theil. Leipzig: Hahnschen, 1812, S. 69-88. (全 20 頁)。以下『パンテオン』と省略。

シドニアはそのまま宮廷を退出してしまう。作者は、「これは計算された行動であった」と、注釈する。

泉のほとりでシドニアは馬を降り、やおらリュートを取り出し、「心は何故これ程も高鳴り、震えるのか」などと歌い出す。折々ため息をつきつつ「心は何処に置いて来てしまったのだろうか？」と歌い続けると、木陰に忍んでいた王子はたまらなくなり、「そなたの心はここにある！」と、飛び出してしまう。

S：ああ、私は何か追いかけられる羽目になるような事をしてしまったのでしょうか？

E：おお、シドニア！追いかけない訳には行かなかったのです。そなたがどこへ行かれようと。

S：いけませんわ、王子。ご両親も奥方も、お許しになりませんわ。

E：奥方？奥方だって？お手を、シドニア。私の妻となる人をお教えしましょう。

S：え？もしや…

E：そうです。

S：私は…

E：君が私の妻だ。おいで。

S：どこへ？

E：教会に。

S：何ですって？ […] 私の事をそのように軽々しいとお考えなのですね！誤解なされているようです。王子は不幸になってはいけません。そして私も不幸になるのは嫌でございます。

E：不幸だって？私と不幸に？

S： […] ご両親がご参列されないのでしたら、私は教会には参りません。

E：おお、シドニア！君は何て残酷なのだ！ […] 私を愛していないのだね。

S：そうかも知れません。（と言い、顔をそむけ、ハンカチに埋めた。王子は泣き声を聞き、動揺して彼女を抱きしめ、叫んだ。）

E：君は私のものだ！私は君のものだ！永遠に！

S：（頬に王子の燃えるような頬を感じ、勇気をふるって体を離し、） […] 王子は私が何者かをお忘れなのではないのでしょうか。 […] このような遊びを許す事はできません。お父上のお許しを得られないのであれば、二度とお訪ね下さいますな。 […] そっとしておいて下さらないのであれば、私はどこか遠い国に行くか修道院に入らざるを得ません。

E：修道院に入って幸せなのか？

S：いいえ。

E：だが、私とは幸せになれるではないか！

S：王子！私がどう考えているかはご存知のはず。私の貞操と愛をご尊重下さいませ。

修道院では王子と王子の奥方とお子様の為にお祈りを捧げましょう。おお、もう私の元を去って下さい。

E： […] シドニア！この指輪で君と結婚しよう。愛と希望をもって。 […]

S：この指輪をはめる訳にはいきませぬ。

E：よいのだ。はめておくれ。君は私の妻になるのだから。

S：おお！王子！

シドニアは王子の腕の中に飛び込み、王子は彼女を胸に押し付け、震えながら彼女の半ば開いた口に唇を押し付けた。王子はこの甘い磁石から身を離す事ができず、美しいうっとりした目の中を覗き、「ああ、シドニア！」としか言えなかった。が、シドニアは、「誓いはお守り下さいまし！」と、念を押した。

狩人に目撃され、二人は道を別つ。シドニアは自領に、王子は宮廷に戻った。

両親に告白する勇気の無い王子は、宮廷説教師に相談するが、噂は父公爵の耳にも届き、花嫁は父公爵が選ぶ王女でなければならない事、よってシドニアを諦めるよう命令される。そしてすぐにも花嫁探しが始められる。

計算通りに事が運ばないのを知ったシドニアは手紙を書き、もう一度同じ泉のほとりで会う手筈をとる。そして、「真の愛は一生に一度」と、言いながら指輪を返し、泉から水を酌み、それに少量のワインを加えて王子に渡す。王子が飲み干すや、「修道院に入る自分も子供を持つ事は無いが、そなたも子供を持たないまま死ぬであろう。」と、予言する。その後、シドニアは80才の時に魔女の容疑で調査されるまでマリーエンフリース修道院で過ごした。王子は既に亡くなっていた。

その修道院では若い修道女達と諍いが絶えず、その都度シドニアは宮廷に訴えた。修道女達はシドニアの事を「年老いた魔女」と呼び、シドニアの処刑を望むようになった。シドニアは従弟のヨーストに横領の廉で、又、修道院長のスパーリングには公爵を裏切った嫌疑をかけたが、逆にこの二人は異端審問官、刑事裁判の判事として、修道女達は証人としてシドニアを死に迫りやる事に成功した。

先ずシドニアと交流のあったヴォルデというジプシーが起訴された。拷問にかけられたヴォルデが、二人共魔女である事を告白したので、シドニアは1619年の11月オーダーブルクの牢へ入れられた。修道院で使用していた部屋が取り調べられたが、厳選された祈禱書が見つかっただけだった。パウリ博士が弁護したが、最早救済できず、拷問にかけられた。請願書が寄せられたがシドニアは死を選び、1620年の秋、ステッティンのミュールントアの外で斬首されてから火刑に処された。

一族の手元に美しさの際立つ傑作とされるシドニアの肖像画⁸¹が保管されている。1786年のジュルナル・フォン・ウント・フュア・ドイチュランド誌にはその絵を元にした銅版画が印刷されたが、奇妙な事にシドニアの後ろにジプシーのヴォルデが佇んでいる⁸²。

(3) 作品の解説

ゲーテの義兄である作者ヴルピウスは、ドイツ文学における盗賊小説⁸³の代表者である。チョッケの先行作品⁸⁴を模して著した代表作『リナルド・リナルディーニ⁸⁵』は直ちに全ヨーロッパで名声を獲得し、その時代の最大のベストセラーであった。⁸⁶

⁸¹ 本論文 46 頁、図 7

⁸² Philipp Anton Sigmund Freyherrn von Bibra. *Journal von und für Deutschland*, Dritter Jahrgang, Eilftes Stück. Fulda: 1786, S. 376 の図 (本論文中 図 5、24 頁)。ヴルピウスは図中の人物をヴォルデとシドニアとしているが、同誌では、ボギスラフ 14 世の命により宮廷絵師が、80 才のシドニアと共に 20 才頃のシドニアの複数の肖像画から若かりし日のシドニアを同じ絵の中に描いた、という事になっている。又、背景の城は、スタガート近郊のザーツィヒ城で、シドニアが監禁されていた丸い塔と拷問に使われた梯子が描かれている、と注釈している。(378 頁)

⁸³ = *Räuberromane*. 1790 年代、〈盗賊小説〉が登場すると、〈騎士小説〉を凌ぐほどの人気を博した。ドイツの〈盗賊小説〉の盗賊は通常「気高い盗賊」や「義賊」として描かれた。(亀井伸治『ドイツのゴシック小説』彩流社、2009 年、87 頁及び 108-109 頁)

⁸⁴ Johann Heinrich Daniel Zschokke. *Abällino, der große Bandit*. Frankfurt & Leipzig: 1794.

⁸⁵ *Rinaldo Rinaldini, der Räuber-Hauptmann: eine romantische Geschichte unsers Jahrhunderts in drei Theilen oder neun Büchern*. Leipzig: 1799.

⁸⁶ 亀井、24 頁、117-18 頁。

ヴルピウスの小品集の一つである『パンテオン』は、伝承や記録を除くと、現存するシドニア文学の中で一番古いと思しき創作品。その時代に伝わるシドニアに関する逸話を書き留めたに留まらず、作者ヴルピウスの想像するシドニア像が、特に婚約を誓うシーンの会話に現れている。このシーンには唯一風景の描写が含まれる。樹齢百年の檜の大木が佇む泉のほとりはシドニアの田舎の小さな森の中だと思われる。「ホームグラウンド」でもあるこの森でシドニアは、王子から結婚の約束を取り付け、しかし婚約破棄の為にも王子を同じ場所に呼び出したのは、他の姫と結婚するという王子に子供が生まれない魔法をかける為だと思われる。森はグリム童話でも日常を逸した場所であり、更に泉は水の精霊が出没する場所である。

とは言え、作品中、風景及び登場人物の描写はほとんど無いに等しい⁸⁷。「彼女は、樹齢百年の檜の足下の泉のほとりに横たわり、肘を折って頭を乗せ、銀色に澄み切った鏡に映った自分の姿を眺めていた。王子は、忍び足でゆっくり近付き、彼女を観察する為に一本の木の後ろに隠れた。(73頁)」と描写されるのみで、「風景」と言っても、二本の木と泉の存在が言及されているに過ぎない。タールマンによると、〈檜の木〉はゲルマン人の信仰の対象であった事から、ドイツのゴシック文学の中では恐怖の象徴或いは不吉な出来事の前触れとして用いられる、という⁸⁸。又、〈魔法の泉〉は〈恐怖小説〉に頻出するアイテムである。

『パンテオン』では全般的にシドニアの容姿は描かれず、あくまでも言動が記述されているだけに留まるが、創作の会話を入れた事、肖像画の存在に触れた事で、これを受けて、興味をそそられた読者の中から独自にシドニアの物語を創作する後続者が出て来た事が考えられる。

シドニアの容姿：

シドニアは、「美しさと魅力に恵まれ、雄弁で利発的(69頁)」であり、作者は、「彼女にねらわれたどの男が彼女の魅力に抗えたというのであろう？ どうやって彼女の才気に参らずにいられたであろう？(70頁)」と、言っている。しかし、容姿の描写は省き、髪の色も瞳の色も不明であれば、ドレスに関する記述も無い。1786年に雑誌で公開された銅版画(本論文中図5、24頁)に関しても、「美しさを見事に表している傑作(87頁)」と述べるのみである。

シドニアのイメージ：

ヴルピウスは、マインホルト同様、①宮廷に入る前のシドニア、②宮廷でのシドニア、③森でのシドニア、④修道院でのシドニアを描いている。

①宮廷に入る前のシドニア…牧歌的、夢見がちで非現実的

作者がシドニアについて書いている部分を引用すると、「分不相応な程気位が高い」、「自分の美しさを過信していた」が、「素朴な羊飼いの少女のように、田舎

⁸⁷ タールマンは、「通俗小説によっては、風景描写を完全に省くか、或いは風景がまるで脚本の注釈のようにぞんざいに冒頭に置かれているに過ぎない。」と、分析している。

(*Der Trivialroman des 18. Jahrhunderts und der romantische Roman: Ein Beitrag zur Entwicklungsgeschichte der Geheimbundmystik*. Berlin: Emil Eberling, 1923, S. 4.)

⁸⁸ 同上、26頁

の孤独の中でたった一つの心の拠り所として、王子と結婚するロマンチックな夢を見ていた」だけで、〈悪〉のイメージは無い（69頁）。

②宮廷及び③森において…小悪魔的（コケットリー、二重性と計算高さ）

コケティッシュな態度は、特に目の使い分けに現れていよう。「好意的な」「有無を言わせぬ」「脅すような」「媚びた」（70頁）「心酔し切った（78頁）」視線を取っ替え引っ替え向けられ、王子は「彼女の虜になり、苦しんだ（70頁）」。

②では「計算高さ」及び「二重性」が強調されている。計算高さを示す箇所は、「彼女は宮廷に入り、計画通りに自分の役目を演じた。[…] 恵まれた才気と容姿で彼女は手に入れたいものをつかまえ、繋ぎとめた。彼女が望んだ通りに王子は彼女の虜になった。（70頁）」、「[宮廷を飛び出したのは] 計算された行動であった（73頁）」などである。又、王子が父公爵を説得できなかった事で、「彼女は恋人が強情を通すと計算していたが、見込み違いであった。（79頁）」と、作者は注釈している。

シドニアの〈二重性〉を示す箇所は、王子を「手に入れようとした（70頁）」にもかかわらず、実際には王子に、「私達は愛し合ってはなりませんわ。[…] もう会う事なりませんわ。（71頁）」と言い、王子が追いかけて来る事を見込みながら、「私が何をしておっしゃるのでしょうか！何か追いかけられる羽目になるような事をしたのでしょうか？（75頁）」と、王子を責めるところに現れている。又、「修道院では王子と王子の奥方とお子様の為にお祈りを捧げましょう。おお、もう私の元を去って下さい。（77頁）」などと言う箇所に〈二重性〉が見られる。

「親に従うのは道理だから、あなたが約束を破った事を私は忘れましょう。」と言い、約束を守らなかった王子を一旦安堵させておいてから、泉の水に少量のワインを混ぜた物を王子が飲み干すや、「子供を持たないまま死ぬであろう。」と、予言する箇所は、シドニアの恐ろしい一面を現している。

④修道院に入ってから

④の記述は史実を客観的にまとめたものであり、作者の創作である①・②のシドニアのイメージとの連続性は無い。修道院に入るのは、王子と別れてすぐであるが、修道院での様子が描かれるのは、処刑間際の80才の「気難しい（82頁）」、「愚かな（84頁）」シドニアである。その姿に関する記述は皆無で、件の「二重肖像画」に関しても、若いシドニアの後ろの老女は、伝承では晩年のシドニアと言われていたが、ヴルピウスは、ジプシーのヴォルデであるとしている。

魔女性：

作者のシドニアに対する評価は中立的で、④ではシドニアを、修道院長（スパーリング）・従弟ヨースト・若い修道女とヴォルデの証言による犠牲者としているが（87頁）、シドニアの方の過失として、他の人の気に障る程誇りが高く、他人を蔑み、皆から忌まれていた事（82頁）、起訴された他の魔女達に同情し、死装束を寄付したのは愚行であった事を指摘している（84-85頁）。

問題は、シドニアが王子に渡した飲料に〈秘薬〉が混ぜられたかどうかだが、作者は「薬」だとも魔法だとも述べておらず、作品中の裁判においても問題にしていない。もし純粋な（泉の）水を飲んで不妊症になったのなら、泉の魔法のせいか、でなければ単に遺伝上の問題になるが、するとシドニアの不吉な予言との関係性が

成り立ちにくい。もし100%ワインであれば、シドニアが薬を飲ませた、と誰もが判定する処となり、そこには作者の意図が介在している事になる。又、シドニアが魔法をかける意図を持っていれば、薬が濃い方が効き目は確かなので、ワインを水で薄める事はしないであろう。「泉の水+少量のワイン」という微妙な混合酒では、シドニアの積極的な関与がかなり後退する。王子がシドニアに思わず求婚してしまった事と、生涯子供が生まれなかった事は、森や泉の魔法にかかったせいなのかも知れず、作者は「謎」というオブラートをかけ、「魔女」だとも「魔法を使った」とも述べていない。

シドニアは、「真の愛は一生に一度しかありません。一度捧げたら、無かったものにする事はできません。ですから、王子も奥方に手を差し伸べはしても、奥方は王子の心と愛を得る事はできないのです。(81頁)」と言っているのです、それで勝手に「子は成せない」と予言した、と取れなくもない。87頁で作者はシドニアを「罪の無い人」、「不幸な人」と呼んでいる。



Stich von J. Ph. Ganz nach dem Ölgemälde in Stargordt,
aus Journal von und für Deutschland III, 1786.

図5 1786年のJournal von und für Deutschland誌に掲載された銅版画

2 アルミア作『シドニア・フォン・ボルク』⁸⁹

(1) 主な登場人物

Sidonia von Bork (公爵夫人の女官)

Herzog Bogislav zu Stettin (ボギスラフ公)

公爵未亡人 (ボギスラフ公の母親)

⁸⁹ Arminia (Karoline Albertine Elenore Luise von Haugwitz). *Sidonia von Bork*. In: *Das Dritte Dreiblatt, oder pommersche Geschichten*. Leipzig: C. E. Kollmann, 1832, S. 149-216. (全68頁)

Kurt (公爵未亡人の寵臣)

Kathrine (シドニアに医術を教える賢女)

(2) あらすじ

伯父ゾルディン伯爵の城に招かれたベアーテ嬢は、普段使われていない部屋を宿泊に充てがわれる。大きな天蓋ベッドが、シドニアに関する逸話を描いた不思議なタペストリーに三方を囲まれている事から、その寝室は「シドニアの間」と呼ばれていた。夜心細く思いながらテーブルに置かれた灯りを持って一つ一つの絵を照らし出すと、描かれているのは、

- ・夜中、雷光に浮かび上がる、金色の巻き毛と纏った華麗なドレスが嵐になびくシドニアの姿。岸边から大きな川に南京錠を投げ込む所を、優美な服装をした細腰の男が木陰から忍ぶように伺っている図。
- ・町の路地で金髪のシドニアがひげもじゃの野蛮な男達によって牢に連れて行かれるシーン。シドニアは、縛られたか弱い手を胸に押さえ付け、救いを求めるように天を仰いでいる。
- ・処刑のシーン。青白くやつれ果てた顔をうなだれるシドニアが荒々しい男達に囲まれ、広い野原を横切り、積まれた薪の山に向かう。一方、町の門から大きな人集りが流れ出ようとしている図、であった。

不吉な絵の意味するところを考えると、突然雷鳴が轟く。と同時に戸をそつと叩く音がし、他の宿泊客達は雷を避けて階下に集まっている事が知らされる。伯爵夫人の部屋では、年配のアンリースヒェンがシドニアの運命を語り出す。

シドニアは父母の死後、ステッティン公爵未亡人の女官としてステッティン城にやって来ていた。美しく賢く控えめで、宮廷でのしきたりにも直に慣れ、公爵未亡人の息子ボギスラフと恋仲に陥る。が、実は公爵未亡人の廷臣であるクルトもシドニアに片思いしている事から、クルトがシドニアとボギスラフ公の關係に気付く。

寵臣クルトより息子ボギスラフの気持を知った公爵未亡人は、すぐにも妃候補を探す手配をし、誕生日の祝典において全宮廷人の前で、特別なプレゼントとして妃を用意した事を発表し、「皆の者よ、公爵に二重のお祝いを申すが良い」と、命じる。シドニアはあまりのショックに失神してしまうが、公爵未亡人は驚きもしない。

自身も打撃を受けた公子は、シドニアを部屋に見舞う。

S: 何のご用でしょうか。ここは婚約者のいる婿殿が来られる場所ではございませぬ。

B: おお、心から愛しているシドニアよ。そのような厳しい言葉で私を苦しめるとは。

私の胸はそうでなくとも引き裂かれ、そなたから優しい言葉を必要としているのに。辛くてとても耐えられない。

S: (ため息をついて、) まあ、慰めを求めていらっしゃるのでしたら、こちらにいらっしゃるのは間違いですわ。私は殿の為にも自分の為にも慰めの言葉なぞ持ち合わせておりませんし、そのようなものを求めてもおりません。ただもう早く死にたいだけです。この世での幸せはもう望めませぬからには。

B: (シドニアの足元にすがって、シドニアを抱きしめ、叫ぶ。) おお、そんな事は言うでない! 公爵としての私ではなく、ボギスラフを愛している証をおくれ。何度も優しく誓ってくれたのではないか。私を見捨てないでおくれ。たとえ私が知りもせぬ憎い嫁に手を差し伸べねばならずとも。いつまでも私に優しく忠実でいておくれ。そなただけが

私の心を今も未来も占めている事を片時も疑うな。

S：ええ。殿が国で一番貧しい貴人であったなら、[…]そしてこの私が殿の忠実な妻としてお仕える事ができたなら、と私が何度も夢みている事は、神がご存知です。けれども、結婚している殿方との恋愛関係は、貞淑な乙女が結ぶべき関係ではござりませぬ。私はもう殿を永遠に失ってしまいました。

B：ならぬ、ならぬ。そなたを手放す事なぞできぬ。まだ私は自由の身で、そなたは私のものだ！（と、叫び、シドニアをきつく抱きしめる。）

S：ええ。そのとおりですわ。今、そなたはまだ私のもの…。まだ奥方をご覧になっていない今は。まだ他に忠誠を誓っていない間は、私のもの…。（と言い、かがむ。シドニアの具合が悪い事を承知しながらも公爵未亡人からお召しがあり、）

S：ええ、すぐ参ります。楽しい舞踏会でもう一度幸福な夢を見たいわ。胸の痛みを封印して、まるで何かいい事があったかのように振る舞い、私の不幸を喜ぼうとしている人達の鼻を明かしてやりましょう。では、私を一人にして下さいませ。

ある日、シドニアが首のいぼを取り除いてもらう為、年老いたカトリーネの元を訪ねると、その際カトリーネが不思議な呪文で子供の負った傷を治してしまうのを目にし、シドニアは自分にも「技」を教授してくれるよう頼む。するとカトリーネは、新婚の夫婦に子供が生まれないようにする術を教える。折しも城で話題になるのは、懐妊できない妻の命をねらった事件で、それに対してボギスラフ公が「自分なら子供を授かる事のできない妻は離縁するが、悪事を働くような事は決してしないでであろう。」と話すのを聞き、シドニアはカトリーネに教わった術を用いる事を思い付く。

結婚式の日にはボギスラフ公に手を取られて現れた姫はしかし、ボギスラフ公も驚く程、薔薇か白百合かと見紛う程美しく若かった。シドニアは、今にも卒倒しそうになりながらもカトリーネに教わった通り、牧師が祝福を述べている最中南京錠の鍵を3回回し、新郎新婦が子供に恵まれないまじないをする。しかし、その南京錠を川に放り込む所を、跡を付けて来たクルトに目撃されてしまう。

翌日より熱にうなされたシドニアは、回復後宮廷を退出し、父から相続した騎士領に下がるが、二年経ち、ほとぼりが冷めたのを見計らって、クルトが訪ねて来る。

美しいシドニアと裕福な騎士領を手に入れようとクルトが求婚すると、シドニアは、待ってましたとばかりにはねつける。折しも訪ねて来た母子に治療を施すシドニアを見て、又、黒い大きな猫がシドニアの肩に飛び乗ったのを目撃し、クルトはすぐさまシドニアに魔女の嫌疑を抱き、シドニアを薪の上に追いやる事を決心する。

若い公爵夫妻に子供が生まれぬ事が噂に上っている折に、年配の女官が、結婚式の後、寝込んでいたシドニアの様子がおかしかった事を報告する。シドニアはうなされながら寝言で、錠と鍵を川に投げ入れた事、これで子孫が生まれぬ若い妻は離縁されるであろうなどと言い、「熱い、熱い、燃え尽きてしまいそうだ！」と叫んでいた、と言う。しかも、クルトは、シドニアが前の晩に一人でオーダー川に何かを放り投げ、奈落から闇の力を呼び出していたのを目撃した、と証言しているのだ。

公爵未亡人ばかりか怒りも露わな妻や贖罪司祭に押されてボギスラフ公は渋々シドニアを逮捕させる。数年前には夢のような日々を過ごしたステッティンの街にシドニアは罪人として戻った。いよいよ拷問せざるを得なくなった時、ある晩ボギスラフ公が牢中にシドニアを訪ねて来る。マントを脱いで顔を露わにした公を見て、シドニアは身を切るような痛ましい声を挙げる。

「もし魔物と共同でかけた呪いを解くなら恩赦しよう、かつてはとても好きだったそなたの身だから」と言う公に、シドニアは、「好きだったかも知れないが、真の愛ではなかった」と、責める。あれは魔法ではなく自然の秘密の力を借りて、いつか二人が離婚するようまじないをかけたただけだ、そして、それは公の望む処なのだとは自分は思っていた、と。まじないを解く事はできないので、死を与えて欲しい、もうずっと生きていた事が疎ましく、死を望んでいたのだ、自分の方は本当に愛していたから、他の女の腕の中よりは墓の中に横たわっているのを見たいぐらいだ、夫人の事は自分の命が尽きるまで憎んでやる、と痛々しく泣いた。シドニアの頑固な様子に公は怒り、「それでは裁判官の判決に従うが良い」と言い放ち、牢を後にする。

拷問にかけられ、身に覚えの無い罪を認めては後で取り消し、裁判は何年も長引いた。当時、魔女は泥棒や殺人者よりもずっと非難されたが、シドニアにも焚刑が言い渡された。処刑場でシドニアは拝むように手を合わせ、「私は罪無く死にます！けれども、告発者や裁判官を恨んではいません！この地上での苦悩により天国に導かれますように！」と、最後の力を振り絞って祈り、ガクリと跪き、炎に呑み込まれた。残り火が消えると、その跡から真っ白な鳩が飛び立った。

(3) 作品の解説

ドイツにおいて18世紀後半より女性作家の手で女性向けの沢山の小説が著されたが⁹⁰、作者は1782年にステッティン近郊のダーバーにカロリーネ・アルバティーネ・エレノーレ・ルイーゼ・フォン・ローアとして生まれ、1804年にカール・フォン・ハウグヴィッツ伯爵と結婚してからはシレジア地方に住み、アルミナというペンネームで著作活動をしていた⁹¹。「文学や絵画などを通して女性たちが自己表現を試みるのに十分な社会的な条件がまだ整っていなかった⁹²」時代に、例外的に先駆的な女性の一人であったと思われる。

現存する中では一番古いと思しきシドニアを主題とした小説。城の宿泊客が雷を逃れて夜中に談笑する中でシドニアにまつわる逸話が話される、という構成の、ゴシック的要素が含まれたノヴェレ⁹³である。

ヴルピウス作『パンテオン』では最後に実在するシドニアの肖像画について記述されたが、アルミニアの作品では、シドニアにまつわる不思議な絵（タペストリー）を巻頭に持って来て、読者の想像をふくらませてからシドニアの運命が語られる⁹⁴。又、公子との会話はヴルピウスの作品に出て来るものに似ており、この会話はマインホルトの作品にも出て来る。

⁹⁰ 1770-1810年の40年間でも約80人の女性小説家により約500編の小説が著された。（星野純子『ゲーテ時代のジェンダーと文学—金のりんごを盛る銀の皿』鳥影社・ロゴス企画部、2005年、182頁）

⁹¹ Roswita Wisniewski. *Geschichte der deutschen Literatur Pommerns: Vom Mittelalter bis zum Beginn des 21. Jahrhunderts*. Berlin: Weidler, 2013, S. 226.

⁹² 馬場孚瑳江、田邊玲子編『ドイツ／女のエクリチュール』勁草書房、1994年、244頁

⁹³ 実際に起こった、或いは起こり得る、先例のない風変わりな単一の事件を扱い、談話の形をとる。

⁹⁴ 絵画を巻頭に持って来て読者の想像をふくらませてから物語に入る手法は、ベンノもマインホルトも踏襲している。

シドニアの逸話はボギスラフ公の25才の華々しい誕生日の祝いから始まり、最期は同じ街の牢屋と処刑場で幕を閉じる事、又、シドニアの処刑を導入するのは史実では従弟のヨーストだが、アルミアの作品ではかつての恋人であるボギスラフ公が処刑を命じる事、他のシドニア文学とは違い、まだ若く美しい姿で、しかも生きたまま火炙りに遭う事により、悲劇性が高められている。

(4) シドニアのイメージ

シドニアの容姿：

ここにて初めてシドニアの容姿が具体的に描写される。

「愛らしい若々しさの盛り」の「気品に満ちた背のすらっとした」様子は「ステッティンでは他に例を見なかった」、「深紅のふさふさとした巻き毛がまとわりつく」「これ程眩しい程白い、白鳥のような首はポンメルン全土にもなかった」、「大きな深い青色の瞳は愛と至福に満ちた空を思い起こさせた」。(164頁)

処刑台に立った姿は、「未だに気品に満ちていた」、「光の消えた美しい目」をし、「風が戯れ、金色の巻き毛が肩の上を跳ねた」。(215頁)

シドニアのイメージ：

①宮廷に入る前…牧歌的

実際には宮廷に入る前のシーンは無いが、宮廷を退出してからは「昔と同じ田舎暮らし」を送る。即ち、「従順な動物と美しい花々を愛し、田舎生活に満足していた(193頁)」。

②宮廷にて…美しく賢明

シドニアは、「思慮分別があり、気品に満ちた話術を会得している(164頁)」、美しく賢明な女官として登場する。ボギスラフ公はシドニアに一目惚れし、相思相愛で親密になるまでに、ほとんど一年かけて絶え間なく忠誠を誓い続けなければならなかった。アルミアのシドニアは、ヴルピウスのシドニアのような〈二重性〉や〈計算高さ〉を持ち合わせておらず、〈コケットリー〉も用いない。「シドニアは公爵を際限なく愛していた(168頁)」。

「自分も人々の病気や悩みを治してあげたい」と言うシドニアを、カトリーネは「寛大で善良な令嬢」と評している。(177頁)

③自領にて…賢女/白魔女

領地では、「貧しい者達に寛大で慈悲深く(198頁)」疾病を治してくれる、という評判。庭園を花で飾り、あちこちの部屋に鳥かごをぶら下げ、鳴鳥と犬と猫を飼い、元の田舎生活に慣れて元気を取り戻し、「花壇の薔薇と競い合える程若々しく美しい(193頁)」が、女中達が祭に踊りに行くのを涙して羨んでもいた。

宮廷では上手にクルトをかわしていたが、自領に訪ねて来たクルトにはわざと長々とプロポーズを述べさせ、痛烈で辛辣な返事が思い浮かぶまでしばらく黙っていた。そして、「犬や猫と一緒にね!⁹⁵」、「でも、悪意と謀反を胸に抱きながら、蜜のように甘い言葉がとうとうと口から流れ出る郷土に比べたら、いくら優雅でも犬

⁹⁵ „So kleien und kratzen meine Hunde und Katzen!“ (S. 197.) 伝承に伝わるシドニアの言い癖。

や猫の方がよっぽど正直だわ。」と言う。そして、クルトを「強烈に傷付けようとした」。(200頁)

宮廷にいた頃には見られなかったこのような「意地悪さ」は、ステッティンの宮廷への恨みによって培われたと考えられる。

魔女性：

シドニアは「昔から秘密の理学のようなものが好き(173頁)」で、美容の為に「賢女(170頁)」と呼ばれているカトリーネの所に通い、白魔術を教えてもらう。カトリーネは、疾病の治癒に用いる術は〈魔術〉ではなく、悪魔の力を借りているのでもなく、説明できない〈自然の秘密の力〉を利用しているだけだ、と説明する。「子供を授かる事のできない妻は離縁する」と聞き、「不妊の術」を新婚夫妻に行使する事を思い付いた瞬間、シドニアは決して暗い気持ちではなく、作者は「シドニアは明るい希望を抱いた(180頁)」としている。又、牢を訪ねて来た公爵にシドニアは、「[離婚する事は]殿の意志だと思っていた(212頁)」と言っている。

しかし、南京錠を川に投げ込んだ後、シドニアは「奈落を制する者達よ、錠が二度と日の目を見る事がないよう保管せよ！」と、言わば悪魔にお願いしている。白魔術として教わった術を黒魔術として使用してしまった理由は、

①〈計算高さ〉と〈二重性〉を特徴とする二人の登場人物…クルトと公爵未亡人

クルトは、シドニアの挙動を逐一公爵未亡人に報告し、シドニアの恋を潰した上でぬけぬけとシドニアに求婚する。ボギスラフ公がシドニア宛に書いた恋文も、入手するや、公爵未亡人に見せていた。しかし、公爵未亡人は息子とシドニアが恋仲にある事に知らぬ振りし、誕生日の祝典において妃が嫁して来る事を発表し、息子の公爵に有無を言わせない。シドニアは、公爵未亡人の「他人の不幸を喜ぶ」性質を知っており、実際に公爵未亡人は、愛し合っている息子とシドニアの困惑を見て「計画が上手く行ったのに密かに喜んだ(163頁)」。

公爵未亡人はそして、嫁いで来る花嫁が充分美しい事をよく知りながら、前もって「美しい」と宣伝すれば、期待に負けてしまう事を計算し、予め「美しさでは叶わないけれど」と小出しにしておく。退出を願い出るシドニアに、公爵未亡人は、「そなたを失うのは痛い、よく尽くしてくれたそなたの望みとあっては聞き入れねばなるまい」と言うが、どの道「シドニアを利巧なやり方で宮廷から遠ざけようと密かに決めていた(192頁)」。又、最終的にはシドニアの処分を息子に迫る。公爵未亡人は魔法こそ用いないが、グリム童話の〈継母〉/〈義母〉に近い。

②予想外に美しい王妃への嫉妬と、ボギスラフ公が簡単に心替えした事に対する失望と、クルトや公の母親に対する恨みが賢女から教わった魔術の実行に結び付いた。

花嫁が思いの外美しくしっかりしているのにボギスラフ公が喜びを露わにするのを見て、「シドニアの心は引き裂かれる思いだった(185頁)」。結婚の儀に参列しながら「外面は快活だったが、内面は懊悩煩悶していた(184頁)」。花嫁とシドニアと、どちらの方が美しいかを論争する郷土達に、公爵が、「二人共眩しい程白い肌をしているからには、私にとっては[その白肌を際立たせる]漆黒の髪をしている我が愛する妻が勝っている。(190頁)」と言った事、公爵未亡人とクルトが共謀し

て公爵の関心をシドニアから花嫁ゲートルートに向けさせようと計略した事を知り、「クルトと二人の公爵夫人に対して燃えるような憎しみがシドニアの胸に根付いた（191頁）」。

作者によると、「シドニアは、賢女カトリーネを知るようになってから、魔女の存在を余り信じなくなり、カトリーネに習ったような術が〈魔術〉と呼ばれている事は間違っている、と考えるようになっていた（203頁）」が、逆に、クルト・公爵・両公爵夫人・贖罪司祭は〈悪魔〉を信じ、シドニアを〈悪魔と結託した魔女〉であると疑う。シドニアに魔女の疑いがかけられる根拠は、

- ・公爵夫妻に子供が生まれないよう魔法をかけ、南京錠を川に投げ込んだ。⁹⁶
- ・大きな黒い猫を飼っている。
- ・ほくろを取り除く薬を処方した。
- ・所有する家畜と畑の農作物の育ちがいい

などの点である。後者二つは作者の創作で、魔女狩り時代にはしばしば魔女が検挙される根拠とされた。両者を付け加える事により、魔女狩りに対する批判的な姿勢を表現していると思われる⁹⁷。

作者の、このような魔女狩りに対する批判的な姿勢から、シドニアは魔女としてではなく、失恋の痛みが恨みに変わり、清純さが失われて行く女性として描かれている。牢の中でシドニアは公爵に面と向かって、公爵夫妻の離婚のみならず公爵の死と公爵夫人の不幸を望んでいる事を口にし、醜さを露呈したものの、最期は処刑場にて全ての人を許し、白い鳩となり天に上る。

⁹⁶ 伝承と同じ内容

⁹⁷ 「当時の誠に盲目的正義（210頁）」、「拷問によってしばしば全く犯していない犯罪の告白が引き出された（214頁）」。ヴィスニエフスキーも、アルミニアの魔女狩りに対する批判的な姿勢を指摘している（227頁）。

3 J. E. ベンノ作『シドニア・フォン・ボルク—歴史小説—』⁹⁸

(1) 主な登場人物

Herzog Ernst Ludwig (シドニアと密かに愛し合うポンメルン家の公子)

Herzog Johann Friedrich (公子の兄)

Sidonia von Bork (Wulf v. Bork の娘であり、Franz v. Bork の姪)

Dubislav von Eichstett (Ernst Ludwig 公子の忠実な家臣であり親友。シドニアとは姻戚関係にある。)

郷士 Wedig von Truhen / Trojen (シドニアに恋し、追いかけている)

老騎士 Georg von Truhen (ヴェーディヒの父)

Thyde Loytz (町一番の豪商のどら息子)

Magister Peter Speck (居酒屋で働く元カルトジオ会の脱落僧)

(2) あらすじ (第一巻)

1575年2月2日、ステッティンの港は凍てついているが、翌日から始まるオマージュの式典を前にして町は参加者や野次馬で賑わっている。夜1時の鐘が鳴ると、とある居酒屋にてペーター・シュペックは、「さあ旦那方、丑三つ時が近付いて来やしたぜ！」と言い、ろうそくの炎を吹き消した。気分を害した常連が「お前の頭には幽霊が巣食ってんじゃねえか？」と、からかうと、身分の高そうな一人の客が立ち上がり、居酒屋を後にした。シュペックは早速その謎の客の噂話をして場を盛り上げようとする。件の騎士はホルスタインでも有数の金持ちだが、もうずっと行方不明の息子を探して旅しているらしい。息子ヴェーディヒは、ある女神のような女性の瞳に魅入られ、身も心も捧げたものの、不遜な態度で軽んじられ、やっと気持ちを言葉にして伝えても、曖昧な微笑みを返されただけで済まされたりしている内に段々と精神が錯乱し、まるで陰のように彼女を追いかけるようになった、という。シュペックが、「数日前の公爵夫人の引っ越しの行列の中にも、魅惑的な方々が混じってらっしゃいましたけどねえ。」と言うと、今度は若い男が席を立った。すると、「ロイツ！いくら親父さんの金を積んでも、公爵夫人のお供のダイヤのような瞳は手に入らないぜ！可哀想になあ！」と、後を追うように野次が飛んだ。

翌日、早朝からずらりと並んだ人垣の視線を浴びながら、ティーデ・ロイツは選り抜きの駿馬に股がり、公爵の到来を今か今かとお供を控えながら待っていた。

「来たぞ！来たぞ！」というどよめきと共に現れた一行は、遠くからもいかにもそれらしき威厳を放っている。ロイツはお供の者達に万歳を三唱させる中、すぐにも駆けつけ、挨拶を奏上したが、相手は見下げたように、「公爵様なら、あと一時間もすれば到着なさるだろう。」と言う。ロイツが公爵と見定めた人物は、家臣のドゥビスラフ・フォン・アイヒシュテットだったのだ。

昼頃一行が聖堂に到着すると、聖歌隊席には朝早くから詰めていた貴婦人達がお待ちかねだった。ところが、そこを一心に見上げている老騎士がいる。「そなたが見つめている貴婦人から、これ以上怖がらせるのをやめて欲しいとことづかって参

⁹⁸ Johann Ernst Benno. *Sidonia von Bork. Mit einem Kupfer: Ein historischer Roman*. Cöslin: Heinemann, 1833. (第一部：251頁)

りました。」と、アイヒシュテットにそっと注意されると、騎士は教会を後にした。その貴婦人こそシドニアであった。シドニアに目を付けたのは昨夜の老騎士である。

その夜、城でエルンスト・ルードヴィヒ公子がチェスの手を休めて、今朝指図を受けて唾然としていた子息の身元を訪ねると、アイヒシュテットは「殿は恋がたきの存在をご存知ないのですか？」と言う。公子は動揺して熱り立つが、その時窓の外でうめき声がある。建物をカルトジオ会の修道院が使っていた頃から、回廊を彷徨う老修道士の幽霊が噂されていた。続いて扉が開き、老いた狩人が顔を覗かす。老狩人の要領を得ない話では、息子の嫁のウルズラが豪商ロイツの俸に頼まれて、最初は手紙の受け渡しを請け負っていた⁹⁹だけだったが、4日前に請われて面倒を見ていた病人がたった今、城壁から落ちて息を引き取ったと言う。

翌朝、アイヒシュテットが事の次第を早速宰相に報告しようとする、ティーデ・ロイツが宰相と話しているのを見て、驚く。指輪の印章を目にした宰相は、亡くなったのが、行方不明だったヴェーディヒ・フォン・トルーエンであった事を知り、ぎょっとする。ヴェーディヒの父は宰相の友人である。三年来息子を探している事、その死で一族が絶えてしまう事も宰相は知っていた。その日に宮廷にお目通りされる事になっている友人に一体どう話せば良いのだろう。全体に何故両替商の俸がヴェーディヒと既知だったのか？公爵家の財政にロイツ家の財力は不可欠である。「ある貴婦人たつての願いで、彼の存在を2、3日匿まって欲しい…？¹⁰⁰」と、つぶやいた後、宰相はアイヒシュテットに老狩人とウルズラを呼ぶように指示する。

自然界には春が訪れたが、人間界には、サタンが蒔いた種が様々な現象となって現れた。公国は不穏な空気に包まれ、ヨハン・フリードリヒ公の贅沢好きの為に税金が引き上げられるという噂や、公子兄弟の不和が取沙汰された。中でも宮廷人が勤しんだのは、エルンスト・ルードヴィヒ公子が身分も性質も不相応な婦人に捕まっている、という噂であった。

ところで、公子の母上であるマリア公爵夫人は病気がちで、娘と共にウッカーミュンデの城に引きこもっていたが、公子は話し相手としてシドニアを推薦していた。

5月20日のマリア祭の時、ヨハン・フリードリヒ公子は家臣を引き連れウッカーミュンデでの祭に参加したが、母思いであるはずの弟のエルンスト・ルードヴィヒは現れない。

公爵夫人の聴罪司祭の講話の内容からシドニアは、公子から結婚の誓いを受けているのを司祭が知っている事に気付き、青くなる。動揺したシドニアが、眠りに就けず暗い庭を彷徨っていると、馬に股がったエルンスト・ルードヴィヒがようやく現れる。公子によると、兄と宰相が手を組んでいるのだと言う。

公子が新たに愛を誓おうとすると、雷鳴が轟き、灰色の雲を割ってジグザグに落ちた稲妻が、古い塔の銅製の屋根に沿って青い炎となって身をくねらせながら下降し、空気の吹きだまりは嵐となり、ポツポツと降り出した大粒の雨は豪雨となり、うなりながら木々の枝をきしませた。二人の関係が知れ、自分の名誉が穢される事を心配するシドニアに、「誰かに見咎められても心配は要りません。そなたは公爵

⁹⁹ ティーデ・ロイツとシドニアがウルズラを通じて通信していたと思われる。

¹⁰⁰ シドニアがティーデ・ロイツを通して請願したと思われる。一方、何故ロイツがヴェーディヒを城内に住む狩人に預けたのかは不明である。

の奥方なのですから。」と、公子が慰めると、塔の足元の地面が割れて行くかに見えた。蓋が開いたままの大きな棺が、目には見えない手の上に乗せられて奈落から出て来ると、中から背の高い男が起き上がったかと思うと、引き抜いた剣で忠告するように威嚇した。その先には、積まれた薪が燃え盛り、その中に立つ杭にぶら下がる鎖が赤々としているのが見えた。公子がその幽霊を剣で拡散させようとする、もの凄い笑いが響き亘り、月が曇り、顔は消えたが、雷が落ちた西の翼棟から煙が上がり、火事を知らせる角笛と警鐘が高鳴った。城に戻ろうとした時、裏門の所でシドニアは狩人の妻ウルズラに呼び止められ、助けを請われる。ウルズラは、無実の罪を着せられている、と訴える。

翌朝の噂によると、母と妹を助け出した後、エルンスト・ルードヴィヒ公子は姿を消したシドニアの事をひどく心配し、その度の過ぎた動転振りは、母の目にも異様に映ったという。旅路でペーター・シュベックが噂の続きを話そうとすると、突如城の廢墟の鋸壁の狭間から水を吹っ掛けられ、「この嘘つきめ！」というしわがれ声と共に小石と瓦礫が降り注ぐ。それは、老騎士トルーエンが探していた相手、イルゼ・フォン・テッテリンであった。騎士は、この魔女に息子の居所を尋ねる為にシュベックに案内させたのであった。イルゼはしかし、とある城に生まれた赤ん坊の話をする。その子の運命は、初めと最後がイルゼと同じだと言う。「近くからも遠くからもその娘に惹かれて崇拜者がやって来ては、まるで薔薇の刺に刺されるように傷付けられる。その娘は上流階級の内ではちやほやされているが、賤民からはののしられる。」そして、それこそは息子ヴェーディヒが3年前から追い求めているシドニアであり、騎士が教会で目にした人物である事が教えられる。イルゼは、「シドニアがご息のものにならないのは、シドニアのせいではない」と言う。そして、テッテリン村の最初の家に行くよう指図する。

魔女イルゼに渡されたお守りと標章を持って騎士はテッテリンに向かうが、森に入る頃には辺りは真っ暗になった。前方に何かの存在を察知し、馬が進むのを拒むと、騎士は剣で草むらを切り開き、うつむいて半分砂に埋まっている死体の頭を傷付けてしまう。騎士は、犯人を待つ為にも樫の木の根元で夜伽をする事にする。すると、ハシバミを踏みしめる音がし、宙を白い布が近付いて来る。それは、遺体を棺に入れてテッテリンに運ぼうとする一行であった。僧服の男から、行き先がテッテリンと聞いて、騎士は魔女にもらった標章を見せ、合い言葉を述べる。そして、一行と共にテッテリンに向かう。一行が離れて建つ農家に入って行き、廊下に棺台を下ろすと、家の中に集まっていた人々が泣き出した。すると、一人の子供が騎士を指して、「あれがお父ちゃんを殺した肉屋なの？」と、尋ねた。

葬式後、牧師に招かれてビールを飲み干すと、あまりに色々な事が起きた一日に、疲れて騎士は横になる。夢にうなされていると、馬のいななきに起こされ、目を開けると、騎士は狩りの一行に取り囲まれて、まだ昨夜の森の樫の木の根元にいたのだった。

第一部はここで終わる。マトウシャク＝ローゼは、「[...] シドニアはしかし一種の犠牲者である。王子は彼女に永遠の愛を一旦誓ったが、結局は王女と結婚する。シドニアにはポンメルン公国の支配者の政治的・社会的都合により最終的に罪が着せられる。(98頁)」と述べている。

尚、ロイツとは「北のフッガー家」と言われたステッティンのロイツ家の事だと思われる。作者はシドニアの運命に加えて「ロイツ家の没落」という史実を組み入

れ、第二部ではロイツ銀行と共に公爵家を始めとする貴族階級が経済的破綻に陥る事が予想される¹⁰¹。

(3) 作品の解説

ベンノ（1777-1848）は本名をヨハン・エルンスト・ベニケと言い、プロイセンの軍人としてナポレオン解放戦争の功労として鉄十字勲章で賞された後、ステッティンとケスリンにおいて官僚として出世しながら『ボンメルン公爵ボギスラウス 10 世』（1822）や『クサリンの番人の角笛』（1824）などの歴史小説を書いた。『シドニア・フォン・ボルクー歴史小説一』は二巻に亘る二部構成であるが、第二部は入手できなかった。従って、本論文では、第一部のシドニアのイメージに限定して論述する。

冒頭に銅版画の口絵がある筈で、ハインリヒ・グスタフ・シュヴァレンベルクによる〈シドニア伝説〉が絵の説明として続く筈なのだが、本論文で参考にした、ベルリン国立図書館所蔵の本には絵は欠けている。

アルミアの作品ではシドニアの過去が歴史的事実としてタペストリーに描かれていたが、ベンノの作品では逆に、絵画が公子の未来を忠告する役割を担っている。シドニアの伯父の城の食堂で公子が目留めた絵は、次のように描写される。

カーテンで暗くした部屋に蓋の空いた棺が置かれ、頭と足下に置かれた燭台が、青い炎で横たわる美しい若者の死に顔を照らし出していた。胸の上で組まれた手には十字架を握り、閉ざされた目はまるでうっとり夢を見ているかのようだった。

横には深い悲しみに包まれ、言い尽くせぬ悲しみと切ない恋しさにとめどもなく涙する若い娘の痛々しい姿が描かれていた。[公子は] その娘からは目が離せなかったもので、遺体のそばに小動物が背後で横たわっているのや、絵を説明するように棺の上に置かれた公爵帽に気付かなかった程だ。(87-88 頁)

それは、イーダ・フォン・ドッセンが殺された恋人を哀悼する図で、家臣の娘に恋した王子は誇り高い母親に毒殺されたのだった。

この絵は物語に重要な役割を果たしている。第一部では、エルンスト・ルードヴィヒ公子はこの絵を出会いの思い出及び「永遠の愛」の象徴として捉えているが、読者にとっては絵の内容はあくまでも不吉であり、エルンスト・ルードヴィヒ公子の運命を予測するものと捉えられる。しかし、第二部では決定的瞬間に公子がこの絵を思い出し、恣意的に絵とは反対の運命を選び、すなわち自らの滅亡ではなく、シドニアが犠牲になる事を選択するのであろう。何れにせよ、この絵の醸し出すメランコリーな雰囲気は、物語にまるで原罪のように重くのしかかる。

ヴルピウスとアルミアの作品では、全くと言っていい程場面・景色や室内の描写が省略されていたが、ベンノの作品では、町の景観や室内の描写が絵画的で、特

¹⁰¹ ロイツ家は、中部ヨーロッパの塩の流通を制そうとしたが、16世紀後半からデンマークが塩に多大な関税をかけた事で、大きな利権を失った上、ポーランド王に融資した戦費が返済されなかった為 1572年倒産し、ボンメルンの公爵家並びに貴族も経済的危機に引き込まれた。(Joachim Krüger. *Zwischen dem Reich und Schweden: die Münzprägung im Herzogtum Pommern und Schwedisch-Pommern in der frühen Neuzeit*. Münster: LIT, 2006, S. 60-61 及び [https://de.wikipedia.org/wiki/Loitz_\(Familie\)](https://de.wikipedia.org/wiki/Loitz_(Familie)) 2016.10.24.参照)

に式典の様子は、作者自身が宮廷の官吏であった経験を生かしたと見え、生き生きと描かれている。

ベンノ作『シドニア・フォン・ボルク—歴史小説—』の一番の特徴は、過剰なゴシック性で、アイヒシュテットの「婚姻は天上で決定される（96頁）」という言葉通り、公子がシドニアに愛を誓う度に天罰観面が劇的な自然現象として現れる。又、「春の訪れと共に起きたサタンの悪行」として、作者が伝記から拾ったものも含めて沢山の現象が羅列され（128-32頁）、第一部はゴシック的事件を詰められるだけ詰めた感である¹⁰²。

(4) シドニアのイメージ

シドニアの容姿：

アルミアの作品で初めて描写されたシドニアは、深紅の巻き毛であったが、ベンノの作品のシドニアは巻き毛でも黒髪である。シドニアの容姿は、「火のような瞳は宝石の輝きにも勝り、白鳥のように白い胸に比べたらオリエントの真珠のネックレスも色褪せる程である。薔薇のような唇からは、笛の音のように柔らかい声と甘い吐息が漏れる。（40頁）」と描写され、色事には興味を示さない騎士アイヒシュテットにして「女神ユノーのような気品のある完璧な容姿（47頁）」と言わしめている。

シドニアのイメージ：

宮廷に入る前の様子は、公子が親友アイヒシュテットにシドニアとの出会いを打ち明ける中でしか語られず、あくまでも公子の目に映ったイメージである。実際には演技であり、宮廷に入る前後でシドニアの性質には変化は無かったと思われる。

①宮廷に入る前（公子の目に映ったシドニア像）

シドニアの容姿は、「すらっとした華奢な姿（91頁）」。まるで生まれつきの公爵令嬢のような態度と礼儀をわきまえており（85頁）、不意の高貴な客人にも恥じずに利巧な挨拶をし（89-90頁）、公子はシドニアを「女性の中でも一番利巧で愛嬌がある（90頁）」と評している。かと思えば、二回目の「偶然の」出会いでは、重病人に薬を飲ませているところを公子に目撃され、顔を真っ赤にし、震え出す。

公子の話聞いたアイヒシュテットはしかし、シドニアを「誘惑者（96頁）」と評している。

¹⁰² 「1573年バーニム公が亡くなると、オーダーブルクで雷も雨も降らなかったにもかかわらず、屋根の上の金色の風見鶏が一夜にして真っ黒になった。」（Friedrich Lucae. *Des heilige Römischen Reichs uhr-alter Fürstensaals*, Frankfurt a. M.: Knochen, 1705, S. 922）、「1592年5月23日ステッティンにおいて空から硫黄や血や火が降って来た。」（Paul Friedeborn. *Historische Beschreibung der Stadt Alten Stettin in Pommern*, Band 2, Alten Stettin: Rhete, 1613, S. 138.）などの記録はマインホルトも引用している。ベンノがこのような怪奇現象を羅列するのは、中世の人々の世界観や意識を表現したものであろうが、19世紀の読者にとっても「恐い」というよりは「過剰」ととらえられたのではないかと思われる。

②宮廷にて

a) 残酷なファム・ファタル

「誇り高く優雅な上、魅惑的」であり、「女神ユノーのような気品のある完璧な容姿と筆舌につくしがたい典雅を以て彼女に近づく誰をもうっとりさせてしまう」

(47頁) シドニアの事を、エルンスト・ルードヴィヒ公子は、身分違いの恋である事から兄に反対されながらも、諦められない。騎士ヴェーディヒは家出をしてまで何年もシドニアを追いかけ、とうとう命を落とす。ヴェーディヒの父親ゲオルグも息子を探しながらステッティンの教会の中でシドニアに目を留める¹⁰³。その様子は、「まるで何か魔法にかかったように一所に呪縛されていた(33頁)」。

ベンノのシドニアは、19世紀の後半から「ファム・ファタル」と呼ばれ、全ヨーロッパ文化圏でしばしば取り上げられた「非日常的な妖しい輝きを放って男性を誘惑する¹⁰⁴」「宿命の女、美しいが残酷で支配欲が強く、エロスの魔力で男を惹きつけその運命を翻弄したあげく、ついには破滅させてしまう女¹⁰⁵」であり、「気位が高く、傲慢でさえあり、残酷さを備えている¹⁰⁶」。

アイヒシュテットからヴェーディヒの最期の様子を聞いて、シドニアは、同情は述べるが、「彼は全くどうでもいい存在で、自分は目もくれなかった」と言い、同情よりも自分の純潔が疑われる危険を回避する事に気を遣い、ヴェーディヒの求愛も、「彼の意見は第三者(=ウルズラ)のせいでは正されなかった(119頁)」と表現し、自分に罪は無い事を強調しながら、要はウルズラに責任を課している所にも残酷性が現れている。又、「一族の名誉を重んじる自分にとって、吟遊詩人が詠うような卑しい小屋での情愛は物足りない(120頁)」と、言い切ってしまう所に傲慢さが見えよう。

b) 二重性

ベンノのシドニアにも、ヴルピウスのシドニアに見られたような〈二重性〉が下線部の箇所に現れている。アイヒシュテットのお世辞に対して、シドニアは、

…頬をほんのり染め、戯れに威嚇して見せ、哀愁を装いながら、「私を哀れんで下さいまし。私のせいで不正を働く殿方全員の責任をどう負えばいいというのでしょうか。殿方の中には、婦人の外見よりは、財産に惹かれる方もいらっしゃると思います。『美貌に財産が加われば、全ての男は屈服する』と言いますもの。」

(114-15頁)

と、言う。擬態が大嫌いな騎士は嫌悪感を覚え、直ぐにも語調を変える。ヴェーディヒの死を、自分が見た夢として語りながらシドニアを観察し、シドニアが衝撃を受け、崩れるであろうと予想していると、既に情報を得ていたシドニアは、「黒々とした目を挙げて、命令するような威厳さを以て」騎士の欺瞞を指摘し、「…見る見ると怒りが高揚し、…天使のような様子から怒れる女神へと変貌した」。(116頁)

それに対して、公子の目に映るシドニアは、公爵夫人にふさわしい社交性と礼儀をわきまえてもいるが(85及び89-90頁)、重病人に薬を飲ませているところを公子に目撃され、顔を真っ赤にし、震え出す。公子が知るシドニアは、一言で表すと

¹⁰³ 但し、性的関心からではなく、息子の仇敵として疑っただけである。

¹⁰⁴ 大澤慶子、田邊玲子編『ドイツ/女のエクリチュール』勁草書房、1994年、196頁

¹⁰⁵ 馬場孚瑳江、同上、241頁

¹⁰⁶ 同上、257頁

「天使」であり、公子は、シドニアが「怒れる女神」にも豹変し得るとは夢にも思っていないだろう。

魔女性：

シドニアに〈魔女性〉が備わっているのは、下線部の箇所暗示される。居酒屋の客は、シドニアを追いかけるヴェーディヒの話聞き、「悪魔が美しい女の顔の後ろに隠れているのが一番危険だ（17頁）」と、解説する。又、アイヒシュテットはシドニアの事を、「そばに寄った者誰にも魔法をかけてしまいます。『魔法』と私は申し上げたのですよ。（47頁）」と、公子に忠告する。

シドニアが本性を見せるのは、従兄ドゥビスラフ・アイヒシュテットに対してである。ヴェーディヒが変死した翌朝、アイヒシュテットはシドニアの街の邸宅を訪ねる。

シドニアは、美しい巻き毛の頭を百合のような腕で支え、机に向かい、考えに耽っていた。大きな数字と十二宮が描かれた羊皮紙の上で、右手に金属製のコンパスを持っていた。机の上には、様々な道具や本と共に、地球儀や星座図、風変わりな荒削りの木像、錆びた短剣の他、骨壺と頭骸骨が乗っていた。…「占星術は、人間の目には見えないものを理解し、調和と大多数の間に魔的な羨望によって被せられたベールを取り除くのに役立ち、人間の知力に未知の広大な領域を示す高度な学問なのよ¹⁰⁷。誕生時の天宮図をどうお思いになって？」

騎士には、「美しい彼女の容姿は偽りのものに、口にされる言葉は妖術のように思われた。（111-12頁）」シドニアは、コンパスと天宮図を使って会いたい人を指定する事ができ、アイヒシュテットの訪問も予知していたと言う。

それならば、エルンスト・ルードヴィヒ公子を呼び寄せる事もできたはずである。公子が初めてシドニアに出会ったのは、お忍びで狩りの最中に迷い込んだ、シドニアの伯父フランツの城の中である。公子自身も、「要塞の近くへ、近くへと抗い難く駆り立てられた（79頁）」と説明し、人気の無いその城に勝手に入ってしまった次第を、「冒険心からだったのか、それともある秘密の力が全てのためらいを捨てさせたのだろうか（79頁）」と、自問している。シドニアはたまたま伯父を訪問していたのだが、伯父が住むのはテンプル騎士団の建てた城で、その贅を凝らした趣味の良い調度に、「魔法の世界を目にしているようだった（86頁）」と、公子も目を見張ったのだった。

二回目は、公子が馬で遠出をしていて道に迷い、漁師の子供が指さす貧しげな村に向かうと、ちょうどシドニアが重病の老女を介護しているところに遭遇したのだった。シドニアに、近くにある父親ヴルフの城に招待されて、公子は二人で庭を散歩したり、シドニアがハーブに合わせて歌うのに耳を傾けた。「死ぬまで忠誠を誓う」という歌の内容は、公子がシドニアの伯父の城で見掛けた絵に描かれたメランコリーな画題と被さるものだった。絵に表された「身分違いの恋」の運命に引っ掛けて、シドニアが「私はどうなるのでしょうか」と、つぶやくと、公子はシドニアを抱きしめ、愛を誓ったのだった。

¹⁰⁷ „... weil die Astrologie eine höhere Wissenschaft ist, die dem menschlichen Geist ein weites Feld öffnet, sich mit dem Unsichtbaren zu verständigen, und den Schleier zu lüften, den dämonischer Neid zwischen die Einheit und Mehrzahl gewoben.“ (S. 111)

公子が、「鉄のように揺るぎない枷に縛られた (92 頁)」ように感じ、「偶然か不可抗力で (94 頁)」シドニアと近しくなったのは、シドニアが騎士にやっけて見せたように、天宮図を使って、公子を自分の元へおびき寄せたのだろうと考えられる。

ヴルピウスの作品でも、シドニアの〈二重性〉及び〈計算高さ〉が強調されていた。ベンノのシドニアは、公子に最初に伯父の財力を見せつけ、次には裏腹に貧しい村の重病人に手ずから作った薬を飲ませている所を見てもらった後、父親の城に招いてハーブの腕を鑑賞させる。しかし、天宮図とコンパスを使って自由自在に男を呼び寄せる力量は、既に〈計算高さ〉を超越してしまっていると言わざるを得ない。何れにせよ、薬を作る医療行為や占星術は、少なくとも〈白魔術〉の範疇に入る。



図 6 Gezeichnet von Most, gestochen von Auguste Hübner, Stahlstich. (7,6x10,8cm)

4 H. E. R. ベラーニ作『シドニア・狂気の威力』¹⁰⁸

(1) 主な登場人物

Baron Jo(b)st von Bork zu Satzing¹⁰⁹ (シドニアの従弟)
Sidonia / Sidonie von Bork (亡父は、宮廷裁判官 Hans von Bork)
Maria von Wedel (ヨーストとシドニアの姪)
Alfred Petersen (マリアの家庭教師兼恋人)
Samuel / Samiel (ヨーストの狩人、実は魔法使い)
Wolde Albrecht (ジプシー)
Blanka (ヴォルデが育てている美少女)
騎士 Roger (ブランカの恋人)

(2) あらすじ

1619年の事。代官ヨースト・フォン・ボルクの城では、姪のマリアが家庭教師のアルフレッドと、自分達の恋に将来が無い事を嘆いている。一方、迷信深い代官は、従姉シドニアの不動産を横取りした事が後ろめたく、シドニアの父の肖像画が壁から落ちるや気絶してしまう。それはマリアのいたずらだったのだが、代官は牧師に伯父の幽霊を追い払ってもらう事にする。ところが、幽霊はシドニアから報酬を得ようとする狩人サムエルの仕業であった。サムエルは、ヴォルデから「シドニアの父の不動産を返すようヨーストに仕向ける事ができた者には、シドニアが500クローネの報酬を払う」と、聞いている。サムエルはヴォルデと手を組み、シドニアに「裁判に勝つ為のお守り」としてマンダラゲ¹¹⁰を高く売りつけ、同じ物を代官には「テンプル騎士団の宝を見つける為の鍵」として売ろうとするような悪者である。代官は、「宝を守る悪魔に対抗する為には処刑された魔女の灰が要る」と、思い込む程迷信深い。しかもその魔女は貴族出身でなければならない。いよいよ宝探しに出掛ける夜、マリアとアルフレッドの逢い引きに遭遇し、代官はアルフレッドを城から追い出し、後見人でありながら自らマリアに求婚する。

マリアが伯父の元を離れ、叔母シドニアの所に引っ越す事で、場面は修道院内に移る。修道院では、シドニアが若い修道女達と、髪を引っ張る・顔を引っ掻くの争いを繰り広げていたが、宿敵から託されたマリアを腹いせにいじめる。

そこへ、ヴォルデが、ニュースを伝えに現れる。リュデケ牧師が変死した事で、シドニアが疑われているのだが、本人は「お城育ちの令嬢」である自分には手が出せないはず、と安穩としている。サムエルの為に情報提供の報を所望すると、シドニアはヴォルデとサムエルがつるんでいる事を見破り、ヴォルデを追い出す。それだけでは満足せず、シドニアは腹いせに出会う人皆を鍵の束で叩き、大騒ぎをして

¹⁰⁸ H. E. R. Belani. *Sidonia. Macht des Wahns. Historische Novelle aus dem Anfange des siebzehnten Jahrhunderts.* Leipzig: Verlag von August Taubert, 1838. (本文252頁)

¹⁰⁹ 文中 Jost と Jobst が混じっている。Satzing は正しくは Saatzig /Satzig。

¹¹⁰ ナス科の植物マンダラゲは、根の形が人間に似ている事から魔力を持つとされ、恋の媚薬、出産力を高める秘薬、催眠剤として使われ、或いは富をもたらすとしてヨーロッパの魔法使いの小道具だった。(度会、5頁及び上山、201頁)

疲れると、「犬・猫の撫で合い・引っ掻き合いと一緒！¹¹¹」と言い、締めくくった。

一方、ヴォルデは帰宅するや、逮捕される。サムエルが代官に、「ヴォルデは魔女である」と、告げ口したのだ。その際にヴォルデの養女ブランカを襲おうとして、サムエルは騎士ロガーに右腕と左手を切り落とされる。

魔女裁判でヴォルデは、サムエルとの子供を失った後、ブランカを、とあるお城から誘拐して自分の元で育てた事を白状する。拷問を受けると、「シドニアは自分よりも遥かに危険な魔女」と、シドニアを道連れにしようとする。

そこで起訴されたシドニアは、陪審員全員のみならず、公爵や神の悪口を喚いたので、身の危険を案じた検事はシドニアをオーダーブルクの牢へ連行させる。ついにはこのような民衆の狂気が1618年のフィリップ公爵崩御までもシドニアのせいにした。その証拠に、修道院の醸造所近くで兎が目撃されたからだ。（その兎を捕らえて食した事は重要視されなかった。）

ヴォルデの処刑日の朝、ピアンカは庭園で会食する公爵夫妻の前に現れ、養母を助ける為、赦しを請う。「狂気の威力」に頭を冒されている公爵は怒りを爆発させるが、公爵夫人は、ブランカこそが赤ん坊の時に誘拐された我が娘なのでは、と察する。

シドニアは拷問にかけられ、17ヶ条の罪状全てを認める。後は処刑を待つのみであったが、この件はドイツ全土を震撼させ、フランク公爵の元にブランデンブルク選帝侯とメクレンブルク公から特使が送られて来た。シドニアが生きている限り安心できないフランク公爵は、罰を撤回するつもりはなかったが、拘留条件は改善させた。眺めのいい塔の部屋を充てがわれ、死を間際にしたシドニアは自分の人生を振り返り、自分にも非があった事を反省し、心を入れ替える。

一方、法律顧問になったアルフレッドは、マリアと共にシドニアを助ける、或いは刑執行を延ばす工面に全力を注ぐつもりだった。打ち合わせに来たアルフレッドにシドニアは、実はエルンスト・ルードヴィヒ公との間に子供がいた事を打ち明ける。それがアルフレッドの母である事が分かり、シドニアは隠しておいた宝と共に認知の証拠となる公爵の指輪の在処をアルフレッドに教える。しかし、現公爵の怒りを買ってシドニアが不利を被る事を恐れ、アルフレッドは出生の秘密を守る道を選ぶ。

フランク公爵から「嫡子が生まれぬ魔法を解けば、許そう」と伝えられ、シドニアは、「その魔法には南京錠で鍵をかけ、川に放り込んだ」とし、「ヒムが言うに、私を魔女として火刑に処したら、公爵は一年後に亡くなるだろう。」と、付け加えた。それで、斬首してから体だけは燃し、灰は川に流す「恩赦」が布告された。

1620年秋の処刑後、公爵はずっと魔女の怨念を恐れ、ワインをがぶ飲みし、ある日昼食後、立ち上がった途端倒れ、その3日後に亡くなった。民衆はこぞって、シドニアの魔物ヒムに首を折られたのだと騒いだ。

一方、サムエルは主人の代官に報酬として年金を要請し、代官と争い、「シドニアと同じ目に遭わす」と脅した上、代官の書斎に放火する。が、重いドアが締まり、自らも火の海に閉じ込められてしまう。取っ組み合いをしながら二人は抱き合うようにして焦げ死ぬ。その跡からマリアが相続するはずの宝物やシドニアの父の遺書が入っている箱が見つかる。シドニアから相続権を得ていたアルフレッドは、

¹¹¹ 実在のシドニアの口癖。マインホルトの小説では魔法の呪文とされている。

代官が横領していたシドニアの領地を相続し、マリアと結婚する。そして、フランツ公爵の一人娘ブランカと結婚したロガー侯爵が統治する平和な国に移り住んだ。

(3) 作品の解説

H. E. R. ベラーニは本名をカール・ルードヴィヒ・ヘーバーリンと言い、代々大学の教授として著作活動をしていた家に生まれ育ち、自らは法学を学び、判事としての勤務の傍ら 1810 年からのアヴェネラなどのペンネームで著作活動をしていた。ブラウンシュヴァイク公国の管区財政主務官をしていた時に不正で 4 年間投獄生活を送り、知り合った出版業者のニードマンを通して『ハインリヒ獅子王』などを出版した。出牢してからは H. E. R. ベラーニ¹¹²の名で生活の為に通俗小説を多産し、しかしユーモアと美的感覚に優れた文章を残した。¹¹³ 本作品には、作者が前書きで「夜景作品¹¹⁴」と自称しているように、荒寥とした景観を絵のように詳しく描写する事で、効果的にゴシック的雰囲気配されている。

『シドニア・狂気の威力』では、他のシドニア文学と違って、先ずはシドニアの宿敵ヨーストを主人公に話を進め、シドニアの修道院や裁判での言動はほぼ史実に沿わせている分、更に二つの身分違いの恋愛物語を加える事で、シドニアの修道院時代を中心とした物語が平板で暗澹とした調子になる事を避けている。

作品中の恋人達は、17 世紀に生きている割には非常に進歩的なのが特徴である。時代の「狂気」に影響され、魔術に耽り、或いは迷信に振り回されている人物達は皆、火により罰せられ¹¹⁵、啓蒙的な若い恋人達は身分違いが解決され¹¹⁶、無事結ばれる、啓蒙が迷信に勝つハッピーエンドになっている。

作者は、コミカルな皮肉で教会や貴族に対する嘲笑を交えている。しかし、それは組織や階級全体への批判ではなく、あくまでも迷信深い人物に集中する。貴族の代表として、迷信深いフランツ公爵にはしばしば「狂気の」という修飾語が付けられている。一番コミカルに描かれているのはしかし、「迷信の権化」であり、魔女裁判の陪審員でもある代官ヨーストである。この登場人物を嘲笑する事で、物語に冒頭からコミカルでドタバタ劇的な要素が加えられている。「テンペル騎士団の宝」を発掘しようとする過程などはコミカルな皮肉となっており、結局魔女狩りを推進する側も呪術や迷信を信じており、魔女と魔女審問官に差異は余り無い事を暗示している。

尚、作品中マリアが話すシドニアの若い頃の逸話の中に、「経験の浅い愚か者がシドニアの罠にかかって求婚すると、シドニアは笑いながら振った。コケットリーで男達の心を操る術に長け、複数の崇拜者が絶望の中で命を断つたらしい。ある 16 才の青白いきゃしゃな田舎者など、狂人になったと言う。(85 頁)」という下りがあるが、その「狂人になった若い男」はベンノの作品中の郷土ヴェーディヒ・フォ

¹¹² 本名 HAEBERLIN のアルファベットの並び替え

¹¹³ https://de.wikisource.org/wiki/ADB:Häberlin,_Carl_Ludwig. 2016.11.4.参照

¹¹⁴ 夜景作品＝絵画に由来し、強い明暗対比を用いた夜の情景、とりわけ、荒寥とした景色や殺人などの血腥い場面を描いた絵のジャンル (亀井、275 頁)

¹¹⁵ 但し、ヴォルデに「占ってあげよう」と騙され、公爵家の赤ん坊 (実はブランカ) が誘拐されてしまう原因を作った女官は、井戸に身を投げる。又、魔女裁判に関わっていたシドニアの父は、処刑場で突然死し、魔女狩りに熱心だったフランツ公爵は途中で倒れる。

¹¹⁶ 但しピアンカは公爵夫妻の娘、アルフレッドはシドニアの孫である事が判明するので、貴族と庶民の身分差が克服されるプロットではない。

ン・トルーエンを指すと思われる。「シドニアの崇拜者の間に死者が出る」のはベンノの作品が最初で、マインホルトにも受け継がれる。

(4) シドニアのイメージ

1619年から語られているので、宮廷でのシドニアの若かりし頃は、マリアがアルフレッドに語る中でしか描写されない。(86-106 頁要約)

シドニアは若かりし頃、ポンメルン公爵家の宮廷から宮廷に移って見たが、女よりも酒が好きな公爵家の六人の兄弟達は誰もシドニアのわなに引っかかる者はいなかった。そうこうしている内にシドニアは年を取り、周りの若い令嬢達に結婚話が持ち上がるのを苦々しく思い、どんどん意地悪くなって行った。しかし、化粧と長年培ったコケットリーの力を借りて、若い田舎者の娘達にはまだまだ負けず、人気を保ち、崇拜者にも事欠かなかった。

そこへ、長年修道僧のような教育を受け、政治も女も経験の無いまま 20 才でヴォルガストの公爵位に就いたエルンスト・ルードヴィヒがボルケ家を訪れた。彼がシドニアに目を留めると、シドニアはすぐわなをかけた。彼は、シドニアを非の打ちどころの無い最も貞節で美しい女性だと思い込み、シドニアの、ある時は火のような、思い焦がれるような目、ある時はため息を抑制し、何かをほのめかすような態度を、自分への烈しい恋の証拠と捉え、自らも情熱を抱くようになった。しかし、人々は「シドニアが公爵に惚れ薬を盛った」と、噂した。

エルンスト・ルードヴィヒ公は血のインクで十字を三つ書いた誓約書でシドニアと結婚する事を誓ったので、シドニアは宮廷裁判官であった父とヴォルガストの宮廷に移り住んだ。しかし、シドニアは二人の関係を秘密にできず、公爵が兄弟や家臣を納得させる前に「公爵が『魔法使い』のシドニアと婚約した」という噂が広まってしまった。

公爵の兄弟や家臣はしかし、ブラウンシュヴァイク家との政略結婚を推し、公爵はなかなか結婚に踏み切れないまま時は過ぎ、シドニアは不機嫌に、公爵の情熱は冷えて行った。それに気付いた兄弟達は団結してエルンスト・ルードヴィヒに、美しさの誉れ高いヘドヴィヒ・フォン・ブラウンシュヴァイク姫との結婚を勧め、わざわざフィレンツェから呼び寄せた著名な画家に描かせた、人間というよりはビーナスのように描いた姫の肖像画を、ちょうどシドニアと喧嘩をしたタイミングを見計らってエルンスト・ルードヴィヒに見せた。彼は、つい先程目にしたシドニアと比較せざるを得なかった。姫の新鮮な若々しい美しさに対してシドニアの色香は枯れつつあった。姫の青く穏やかな目と、シドニアの媚びるような目付き。鮮やかに赤い小さな唇の優美な笑顔と、萎んだ口の作り笑い。そして、最近その口は怒りの発作で青く染まる事が多かった。

ヘドヴィヒ姫の美德、つつましさ、心の美しさ、教養などが誉め称えられたが、「先方も偶然エルンスト・ルードヴィヒ公の肖像画を見て、心を動かされた」とも付け加えた。公爵は、ポンメルン家で一番ハンサムだと言われ、「美形のエルンスト・ルードヴィヒ」という異名を取っているのを自慢していた。

公爵は、シドニアとの関係を清算する事を決心したが、なかなか習慣とシドニアの支配とから逃れる事ができず、ずるずると関係が続けながら、段々シドニアから遠ざかって行った。一方、痺れを切らしたシドニアは、陰謀や悪口で全ての貴族や家臣や信頼できる人々も敵に廻してしまった。そこで、公爵がようやく「穏便な方法で『魔法使い』シドニアを国外に退ける」事を承諾した時、狩りが大々的に催された。シドニアも父親のハンスも結婚式と勘違いし、やっと長年の念願が叶うと信じ込んでいたが、朝 6 人の兵隊が寝室を襲い、ハンスは馬車に乗せられ、シドニアは馬に乗せられ、国境まで連れて行かれ、公爵とヘドヴィヒ姫の結婚が決まり、シド

ニアが宮廷にいる事は望まれない事、公国への再入国が禁止された事が通達された。

シドニアは、その場にいた廷臣を始め、公爵と公爵の兄弟達を罵倒し、呪ったが、一行は猛スピードで去って行った。シドニアが、呆気にとられている父を両腕でつかまえ、怒りをぶつけ、揺すっている内に、ハンスは事切れてしまった。

シドニアは、悪魔が自分を取り込もうとするのに抗おうとし、全財産を寄付し、修道院に入る事に決めた。しかし、人々は、「シドニアが公爵家を呪い、跡継ぎが生まれず、ポンメルンの国と民が他所の君主の手に渡るよう呪いをかけた。」と、噂した。公爵夫妻の間に生まれたエリザベート・マグダレーネは幼少時病気がちで、結婚してからは健康になったものの、跡継ぎが生まれなかった。跡継ぎが無いまま 1595 年に公爵は飲酒と怒りの発作が災いして亡くなり、他の兄弟達も跡継ぎが無いまま崩御した。人々は、「シドニアが年老いた魔女に習い、魔法の煮汁に浸けた [婚約] 指輪を、呪文を唱えながら川に投げ入れた。」とか、「パンの生地で公爵を象った人形を火にくべた。」などと、噂した。

シドニアはマリアフリース修道院に入ったが、聖書を読む代わりに『アマデイス』を 100 回以上読み、特に恋人に去られた令嬢達が、皆魔法を使って仕返しをするのを楽しんだ。それ以来シドニアは迷信深くなり、マリアの話では、「あらゆる悪魔めいたものに関わり合うようになった。」と言う。

シドニアの容姿：

①宮廷時代…「媚びるような目付き・萎んだ口の作り笑い (91 頁)」

シドニアにも初々しく若い時期はあったはずだが、ベラーニの作品ではその時期には触れられず、シドニアは宮廷時代も老練であり、若々しくはない。ベラーニのシドニア像は「持って生まれた運命的 (ファタル) な美しさ」よりも「努力した結果の美しさ」が強調されている。又、ベンノのシドニアは黒髪に黒い目だが、ベラーニのシドニアは青い目をしている。

②修道院時代…魔女的容貌

容姿に関しては、シドニアの後年は魔女ヴォルデに近く、

80 才という高齢が既に背を曲げ、髪を白く漂白していた。かつての美しさはほとんど消えてしまっていたが、形のいい頭と、恐ろしいが繊細な顔立ちや、白い柔らかな肌に惚ばれた。目は今でも大きく青いが、丸く高く突き出た額の奥に窪んでいた。きれいなカーブを描く鼻はケシの葉のように細い鉤鼻になり、ほとんど歯の無い口元は萎み、突き出たあごが鼻の先にくっ付きそうになっていた。(120-21 頁)

裁判官の前に立ったシドニアは更に「目の周りが赤みがかって (183 頁)」おり、皮肉めいた苦々しい薄笑いに裁判官達は震え上がってしまう。

グリム童話の魔女は、「赤い目」をし、「動物のように鼻が利く」「茶色い顔」「長い鼻」「細い指」「頭をがくがくさせながら近づく」などを特徴とする¹¹⁷。又、魔法使い (= Zauberin) も「からだか二重におれたばあさん [...] 黄色くて、やせっぽちで、目だまは大きく、まっ赤で、ひんまがった鼻の先はあごまでとどく

¹¹⁷ 大淵知直「グリム・メルヘンに登場する 4 人の『魔女』たち—魔女・魔法使いの女・賢女・老婆—」慶應義塾大学藝文学會第 81 号、慶應義塾大学藝文学会、2001 年、166-69 頁

118」という特徴で、魔女の姿と重なり、シドニアとヴォルデの容貌¹¹⁹はグリム童話の魔女や魔法使いに酷似している。

シドニアのイメージ:

① 宮廷時代…コケットリーに老練した熟女

ベラーニのシドニアは、エルンスト・ルードヴィヒ公よりも年上で、宮廷で繰り広げられる色事に長けている。シドニアの「ある時は火のような、思い焦がれるような目、ある時はため息を抑制し、何かをほのめかすような態度（86頁）」は、ヴルピウスのシドニアに近い。すなわち、目では明らかに好意を示しているのだが（ベラーニ：「恋い焦がれるよう」、ヴルピウス：「好意的」）、態度ははっきりしない（ベラーニ：「ため息を抑制し、何かをほのめかすような態度」、ヴルピウス：「リュートを取り出し、折々ため息をつきつつ歌う」）。

シドニアは宮廷時代も老練であり、若々しくはない。つまり、「若くて清純なシドニア」vs.「年老いた、魔女となったシドニア」という構図を持たず、「昔のシドニア」と1619年現在のシドニアにはあまり差が無い。

② 修道院時代…意地悪婆さん

シドニアは魔女ではなく、恐ろしく性質の悪い「意地悪婆さん」として描かれている。自分の元に姪が越して来たのを、

魔法使いシドニアは大喜びした。やっと、思いのままに苦しめる事ができる人間の子供が支配下に置かれた。この、まだ若さと優美さに輝く乙女の幸せを潰し、不幸に終わった自分の恋の仕返しをし、恨みを晴らす事がこれのできるのだった。

（128頁）

と、作者は説明する。シドニアは、「猫のヒムと同じように可愛がってあげよう」と言い、「跪いて机の下のヒム用の牛乳をなめてもいい」と、許可を与え、敬遠するマリアの口に、干からびたプレツェルをヒムの牛乳に浸し、無理矢理押し込む。又、マリアを「子猫ちゃん」と呼びながら「身の毛もよだつ程優しく鳥獣の鉤爪のようにひん曲がった、骨ばかりの細い指で頬を撫でた。（131頁）」それでいてマリアはシンデレラの如く朝から晩までこき使われた。

魔女性:

① 宮廷時代

人々は、シドニアを「魔法使い」と呼び、「公爵に惚れ薬を飲ませた」、「公爵家に呪いをかけた」という噂がたつ。アルミアのシドニアのように、本人が「薬を処方する」などの白魔術を行使するシーンは出て来ない。「雷と稲妻と嵐の真夜

¹¹⁸ 同上、166頁

¹¹⁹ ヴォルデの容貌は、「歯の無い口は窪み、鉤のような鼻は突き出たあごに届くばかりだった。黒い目は奥から光り、目の周りは赤くただれ、黒い髪は細い束に別れて皺の刻まれた額からこけた頬へ垂れていた。」（32頁）

中に指輪を、呪文を唱えながら川に投げ入れた（105頁）」という話は、アルミニアのタペストリーに描かれたシーンを彷彿とさせるが、あくまでも人の噂に過ぎない。

②修道院時代

シドニアの部屋の棚には「沢山の薬のビンやフラスコ、薬草を入れる箱」が置いてあり、「神秘的なもの¹²⁰に囲まれるのが好きだった。（122頁）」

シドニアは、「魔女」として告発され易かった、口うるさい「ガミガミ女¹²¹」であった。しかし、下記の理由から魔女としては描かれていない。

① 白魔術を実際には行使していない。

② 五つの小説群の中で唯一「エルンスト・ルードヴィヒとの間に子供がいた」という設定になっているが、その子も女の子なので、噂はあっても実際に「男児が生まれない」という呪術を行使した可能性は低い。何故なら同様に「自分には男児が生まれる」という呪術を用いれば自分の立場を有利にする事もできたはずだからだ。

③ 作者は、シドニアが後年魔女に近い存在になった直接のきっかけを『アマディス』のせいにしてしている。それによりシドニア自身の責任即ち「生まれ持つ魔女性」が軽減されている。又、猫と雄鶏を飼ってはいる事実は述べられるが、実物は登場せず、シドニアの周りを徘徊しない事で、やはり魔女性が抑制されている¹²²。

ベラーニのシドニアは性質が悪く、容貌が魔女的だが、実際には「エルンスト・ルードヴィヒを落とす為」或いは「跡継ぎが生まれない」魔術は行使しない。従って、他にゴシック的登場人物を設定する必要があり、サムエルとヴォルデが呪術を操る¹²³ゴシック的人物となっている。男の魔女（= Hexenmeister）サムエルは甘やかされて育ち、父が司祭でありながら放埒で、酒とギャンブル以外には何も覚えようとしなかった。そして、父が保護していたまだ子供のヴォルデを誘惑してから家出をした、という経歴の持ち主であり、死ぬ間際には悪魔に助けを請う。「甘やかされて育ち、放埒で若い女性を誘惑し、その後放浪する放蕩息子」というキャラクターは、シドニアを誘惑するアッペルマンとしてマインホルト作『修道院の魔女』に踏襲されている。

¹²⁰ 黒い雄鶏と灰色の雄猫、鮫や梟の剥製、机の下の箒と火かき棒、鎖で鍵のかかった本など。

¹²¹ = 英 scold（度会、157頁）（本論文6頁）

¹²² これに対して、代官ヨーストの黒猫は、ヨーストの脚にまといつく。シドニアの部屋と代官の部屋を比べると、天井から吊るしている鮫の剥製は共通項で、代官の部屋は怪しい道具でゴった返す「錬金術の秘密の実験室」だと作者は言い、それでも代官はシドニアを魔女裁判にかけて駆除する事ができた、という不公平さが強調されている事になる。

¹²³ ヴォルデは、マンダラゲを見つける為に呪文を唱えながら鑄金し、サムエルは水晶の玉を使って、他人を観察する事ができる。

5 マインホルト作『修道院の魔女シドニア・フォン・ボルケ』¹²⁴

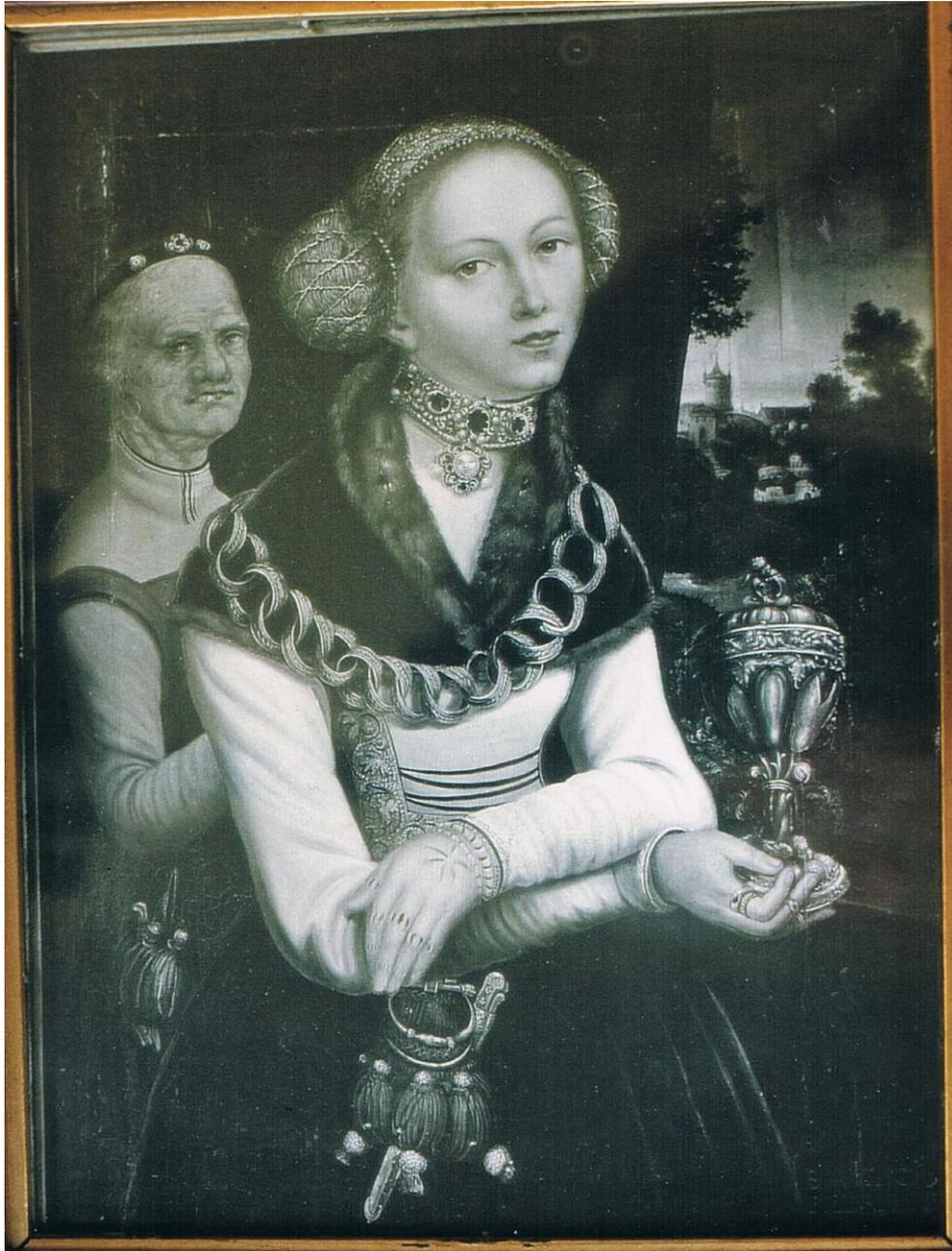


図7 元スタゴード城蔵の肖像画。1945年消失。（板、油彩 65x42cm）

シドニアは程よい器量の若々しい様子である。ほぼ金髪のは髪は金色のネットで纏められ、首や腕や手を幾重の小さな宝飾品で飾り、毛皮に縁取られた緋色の胸衣に青いスカートを纏った絢爛たる様子で、大変洒落た茶色い皮のポンパドゥールのような物を手にしている。しかし美しいながらも目と口は感じがよくない。特に、目が冷たく意地悪いようだ。[...] そのすぐ後ろにまるで恐ろしい幽霊のように、魔女のシドニアがやや小さく加筆された。

¹²⁴ Meinhold, Wilhelm. *Sidonia von Bork die Klosterhexe, angebliche Vertilgerin des gesamten herzoglich-pommerschen Regentenhauses*. Leipzig: Insel, 1911. (本文804頁)

[...] 特徴のある、恐ろしい、コントラストにぞっとし、見る者は目を背けたくなる。(6
頁)

(1) 主な登場人物

Herzog Ernst Ludwig (母と弟カジミルと共にヴォルガスト城に住む。)
公爵未亡人 Herzogin v. Pommern (Ernst Ludwig の母)
Herzog Barnim (Ernst Ludwig 公子の叔父。ステッティン城に住む。)
Ulrich v. Schwerin (侍従長。シドニアの敵)
Jacob v. Zitzewitz (書記官。シドニアの味方)
Johannes Appelmann (宮廷の主馬頭。シドニアを誘惑し、森に逃亡する。)
Jacob Appelmann (ヨハンネスの父でスタガードの市長)
Claus v. Uckermann (物語の語り手。かつてはシドニアに求婚していた。)
Anna Wolde = Wolde Albrechts (ジプシー)
Sidonia v. Bork
Otto v. Bork (シドニアの父)
Clara v. Dewitz (宮廷におけるシドニアの友人。後にマルクスと結婚。)
Marcus v. Bork (シドニアの従弟。ヴォルガスト城に仕える。)
Jobst v. Bork (マルクスとクララの息子)
Diliana v. Bork (ヨプストの娘)
Georg v. Puttkammer (ディリアナを信望。後に結婚する。)
Eggert Sparling (修道院長)
Magdalena v. Petersdorff (女子修道院長)

(2) あらすじ

1629年¹²⁵に私プレンニースは、ボギスラフ14世閣下の命でシドニア・フォン・ボルケに関する情報を収集する為に旅立ち、シドニアを幼少から知り、かつてはシドニアに求婚していたという郷土クラウス・ウッカーマン(92才)をダーロウにて見つけ出しました。以下はウッカーマンの話した内容であります：

①ストラメール城にて—シドニアの養育(第1部・第1～3章：ウッカーマンの話)

シドニアの父オットーは、異端者であったが裕福なので、1560年のその日も大勢の郷土がストラメール城に集まり、会食していた。オットーが異端的考えを披露すると、封臣の一人が勇敢にも異議を唱えた。すると、オットーはいきなり短刀で襲いかかり、封臣は床の上に倒れて死んだ。ところがその後オットーは、客人に幼いシドニアを披露する度に、シドニアに「お前は誰だい？」と尋ね、「私はお城育ちの令嬢です」と、誇らしげに挨拶させ、「パパは敵をどうする？」と聞くと、シドニアは片手を剣になぞらえて父親の腹に突き刺した。そして、シドニアが10～12才位になると、「結婚相手はポンメルンならポンメルン公爵家かエーバースブルク伯爵家」と、教え込んだ。

シドニアの姉の結婚式の日、シドニアは真珠とダイヤモンドに埋もれる程豪華な衣装を着ていたが、教会に行く途中狩人に体当たりされ、水溜まりで転び、後で腹いせに、狩人を青くなるまで殴らせた。ダンスが始まると、私はシドニアにダンスを申し込んだ。ダンスの合間にシドニアが椅子に座ると、周りを郷土が囲み、一人は彼女の手の指輪を、一人は彼女のヘアネットをいじった。二人きりになった時、

¹²⁵ シドニアが処刑されてから9年目

私はすかさずシドニアに求婚した。するとシドニアは突然立ち上がり、大声で「百姓の分際でもくもまあ！このくそ郷士が！」と、笑って馬鹿にした。

好色で有名なポンメルン公爵バーニム9世は、シドニアをステッティンの自分の宮廷に送るようオットーに求めた。最近大学からヴォルガスト城に戻って来たエルンスト・ルードヴィヒ公子の、アポロンのような様子を噂に聞いたシドニアは、小さな白い手でバーニム公の髭を撫で、自分をヴォルガストの宮廷に推薦してくれるよう訴えた。

②ヴォルガスト城にて（第4～17章）

ヴォルガストでは受け入れるつもりはなかったが、既にシドニアは父の承諾を得ないままステッティンに向かっていた。親切なバーニム公爵は、シドニアを早速船でヴォルガスト城に連れて行った。ヴォルガストの公爵未亡人は、仕方なくシドニアを受け入れるが、決して若い騎士たちに色目を使わぬようシドニアに釘を刺した。

晩餐会ではバーニム公は、シドニアが同じテーブルに着く事を望んだ。10部屋に股がってテーブルが用意され、侍従から馬丁まで全ての家臣が席に就き、ドアの隙間から廊下を通るシドニアを垣間見ようとした。シドニアは、羽織っていた黒テンの長いマントを脱ぎ、赤いビロードのコサージュに金色のバンドで縁取られたデコルテを露わにして牝鹿のような足取りでその前を通って行った。

食事が済むと公爵は、イタリア風のエチケットだと言い、隣席の公爵未亡人とシドニアにキスをし、エルンスト公子にも真似するよう進言した。公子が恥ずかしそうに下を向くと、シドニアは、「すぐにお覚えになられますわ。」と、まるで心臓を射るような視線でささやいたので、公子はシドニアに口づけしたくてたまらなくなった。

敬虔な公爵未亡人は、シドニアにキリスト教的教養が全く欠けている事に気が付き、「是非ともこのまま公爵夫人の元でキリストの教えを極めたい」というシドニアに、勉強を見てもらうようクララを紹介した。しかしシドニアは、教理問答を練習する代わりに『アマデイス』を愛読した。

毎日夕食30分前に太鼓が鳴り始めると、シドニアは廊下を踊り脚で行ったり来たりし、使用人達をベタ褒めし、チップをやって、すっかり自分の味方にしてしまった。郷士に対してはしかし恥ずかしい振りをし、わざわざ他の人に、「なんて素敵な郷士なこと！」などと、大きな声で褒めた。ある時ヴェーディヒ・フォン・シュヴェツコウとヨハンネス・アッペルマンが通ると、「まあ、有力市民なのね！かえって貴族より尊敬するわ！」と、聞こえよがしに言ったので、二人共すぐにシドニアに夢中になった。ところが、アッペルマンはスタガードの市長の息子で、公子の主馬頭でありながら評判が悪く、好色で手当たり次第に女に手をつけていた。

食後もシドニアがわざと遠回りをし、騎士達の食堂の前を通ると、皆ドアの所に鈴生りになった。老ツイツェヴィッツまでが廊下に急ぎ、二人で手を組んで外へ行くと、ゾロゾロと郷士達がついて来た。飼われている鹿に餌をやったり、ツイツェヴィッツが角を押さえ、シドニアが鹿に股がろうとするのを、公子は羨ましそうに窓から観察していた。どうもシドニアは自分を避けているようなのだ。

ある日、シドニアが鹿の背に飛び乗った処、驚いた鹿が猛スピードで走り出した。アッペルマンは追いかけ、シドニアが放り出され、気絶しているのを見つけ、シドニアの手、足、唇などに好き勝手にキスをした。ヴェーディヒはしかし、城守のわんぱく坊主が転がした玉に躓いて転び、出遅れた。主馬頭がシドニアを抱擁し、キスしているのを目にしたヴェーディヒは怒り心頭になり、「お城育ちの令嬢

に何をする！」と叫び、短刀を出すと、アップルマンも短刀を出した。駆けつけた公子も事の次第に蒼白になったが、母君と侍従長を起こさないよう騒ぎを治めようとした。「公爵夫人と侍従長」と聞いて、シドニアはすぐ退散しようとは一番近い戸を開けた処、ハンス・フォン・マリンツキーが、ちょうど父の形見である鎧を着て、兜を被ろうとしていた処に出くわした。シドニアが、外にいる二人の喧嘩を止めるよう頼むと、ハンスは、「姫の為なら死ぬ覚悟！」と、兜を被ったまま走り出て、人集りの中で長剣を振り回した。アップルマンの狼藉を知ると、「私が姫の小さな靴に口づけさせてもらい、喜んでいる間に百姓の倅が何と?!」と、激怒する。この隙にアップルマンが橋から小舟に飛び乗ると、逃がすまいとヴェーディヒがびっこを引きながら飛びかかったが、川に落ちてしまった。泳げないヴェーディヒがハンスに助けを求めたので、ハンスは鎧のまま後を追い、こうして二人共水底に沈んでしまった。

シドニアの従弟マルクス・フォン・ボルケが真相を報告したが、エルンスト公子は、侍従長と母を脅してまでシドニアを庇う。それを知ったシドニアは、短めのドレスを着込んで公子が廊下を通るのを待ち伏せし、公子の足元に泣き崩れて礼を言った。公子はたまらなくなり、シドニアを抱き起こしてキスした。

S: まあ、何をなさいますの、こんな所を人に見られたら、二人共もうおしまいですわ。

(公子は構わずもう一度キスして彼女を胸に抱きしめた。)

S: (ほとんど聴き取れない小声で) ああ、何故私は殿をこんなにもお慕いしているのでしょうか! 離して下さいまし、私をこれ以上不幸になさらないで。

E: ではそなたは誠に私を慕っているのですか? まだ信じられない。もう一度おっしゃって下さい、至福の乙女よ。

S: (両手で目を隠し、全身で震えながら) まあ、私としたら、何を申し上げてしまったのでしょうか、愚かにも。

E: もう一度おっしゃって下さい。そなたが私を慕っているなど、信じられない。他の誰にでも優しく、何度私は胸も張り裂けそうになったことか。

S: (両手を目から離して) それは、父上が、そうする方が乙女にふさわしいと私に教えたからです。でも...

E: ...でも? 話を続けて下さい。

S: まあ、殿! (両手で再び目を覆う。)

すると、公子は彼女をもう一度抱きしめ、キスし、本当に好きなのか三回問いただして、やっと彼女は「はい」と答えた。が、このような告白が死ぬ程恥ずかしいとでもいうような振りをして、自室に飛んで帰った。

ところが、公子が侍従長と出掛けてしまうと、シドニアは老郷土達と戯れ、ダイヤモンドで覆われた手を差し出し、事件を密告しなかったお礼を言った。ツイツェヴィッツは満足せずシドニアの唇にキスをさせてもらい、皆の羨望を買った。その日は五人程の郷土がシドニアの部屋に押し掛け、求婚した。クララは、最早侍従長ばかりか公爵未亡人を始めとする全女性陣が、シドニアが男性陣に色目を使っているのを良く思っていない事、又、求婚者を片端から振っている事にふれて、公子がありふれた身分の貴族の子女と結婚するはずはない、と忠告し、シドニアを激怒させた。

そこに、魔女として処刑されそうになってクララの実家から逃げて来たヴォルデが現れる。シドニアは「キリスト教徒として助けるべき」と言い張り、クララは仕

方なく面倒を見てやる事にした。恩を売ったシドニアは、内緒でヴォルデに惚れ薬の作り方を教えるように命じる。

公爵未亡人の誕生会が催される事になったが、シドニアは一向に教理問答を覚えようとしないので、罰として自室に監禁される。シドニアは大声で泣き、下女を使って不遇を宣伝する。この日、泉には水の代わりにビールが流されたので、皆が酔い、勢いに乗ってシドニアを助け出した公子が、シドニアを舞踏会に連れて行った。謹慎を解いてくれるよう、シドニアが侍従長の髭を撫で、訴えると、侍従長はシドニアに平手打ちをくらわし、場は騒然となる。頭に血が上った郷士が侍従長の手を刺した上、公爵未亡人の手を叩くと、駆けつけた獄吏が長剣で郷士の首をはね、公爵未亡人を筆頭に気絶者が続出する。

シドニアは夜逃げするようにステッティンに送り返された。しかし、エルンスト・ルードヴィヒ公子が寝込んでしまったので、対策としてゾフィア・ヘドヴィヒ姫に打診して、肖像画を公子のベッドの上に飾ってみた。しかし公子は「シドニアに看取られる事」を最期の望みとするので、決して求婚しない事を条件にシドニアを連れ戻す事が検討される。侍従長は、命よりも公爵家の名誉の方が大切であると説き、辞職を願い出る。

一方、ステッティンにはシドニアの父オットーも駆け付け、シドニアを再びヴォルガストにやる代わりにイーナ川の税収入を要求した。バーニム公と船に乗り、ヴォルガストに着くと、シドニアは一晩中看病し、公子は見る見る元気になった。

公爵未亡人はバーニム公の為に狩りを催した。頃合いを見計らってシドニアが一人森に入ると、公子もついて来た。

S: まあ、何故ついていらしたのです？母君がこんなところをご覧になったら、大変な事になりますわ。どうぞお戻りになって下さい。

E: いいえ、二人きりになってもう一度そなたの気持ちが聞きたいのです。

S: 私に何のご用ですの。私とは結婚しないと誓われたのではないのですか。誓いは守らなければ。

E: 無理です。至福の乙女に比べれば、国や民なぞ [...]

(公子は何度もシドニアを抱きしめ、キスした。)

E: そなたは私の事が好きではないのか？

(シドニアは両手で目を覆って、草むらに腰を下ろし、)

S: 私が殿を好きではないなどと...ああ、殿だけです。でなければ死を選びます。

E: 泣かないで下さい。そなたが泣いている姿を見てはおれませぬ。相談してみたのです。

S: (目の覆いをはずして) で、ツイツェヴィッツは何と？

E: 秘密裏に結婚すれば、もう悪魔も侍従長も離婚させる事はできないと。

狩りが終わると、公爵未亡人はオットーに、シドニアを連れ帰るように言うが、晚餐の後、公子は再び倒れてしまい、シドニアが看病を続ける事になった。

この頃、死んだヴェーディヒの幽霊の噂が立っていたが、クララは夜遅くに鎧を着たヴェーディヒの霊が既に続く隠し戸から出て来たのを目撃する。幽霊が重い鎧を動かす事ができる事に疑問を持ち、次の日も待ち伏せた処、幽霊はシドニアの部屋に入って行った。婚約者マルクス・フォン・ボルケに相談し、宮廷に呼び戻された侍従長とも打ち合わせた結果、皆で幽霊を待ち伏せる事になった。

実は翌朝シドニアと城を抜け出す約束を交わしていた公子は、事の次第を聞いても信じなかったが、幽霊は本当にシドニアの部屋に入って行った。ドアを突き破ると、部屋の中央にはなんとアッペルマンが立っていた。部屋に飛び込んだ侍従長

は、下僕の身で貴婦人の部屋に入り込んだアッペルマンを叱りつける。シドニアは「彼が押し入った」と訴えるが、アッペルマンは、全てシドニアの指図に従った事を訴える。怒ったシドニアはアッペルマンに飛びかかり、公子は辛くて倒れてしまった。シドニアは、本人の望み通りステッティンの公爵の元に送られる事になった。

一方オットーは、スタガードの市長ヤコブ・アッペルマンに、イーナ川を通る船の荷の税金を支払うように伝えていたが、市長は証文を見ないうちは譲らなかった。業を煮やしたオットーが、家臣と共にスタガードに近づく船を襲うと、娘シドニアが男と船に乗っているのではないか。シドニアは、「公爵未亡人が息子と組んで哀れな私を陥れようとして、婚姻の夜、公子の代わりに馬丁を送り、それを知らない私が公子だと思って抱きついた処を皆で部屋に押し入った。」と、泣きながら訴える。しかし、それを聞いていたヨハンネス・アッペルマンは馬丁呼ばわりされ、「まるで安い売女のように俺を追いかけ回した癖に！」と怒り狂った。

そこに、市長を筆頭にスタガードの市民達が駆けつけ、オットーとヨハンネスは牢に、シドニアは市長の所に連れて行かれた。ところがその夜、オットーは自殺してしまう。牢中したための遺書には、所持金は弁償として市長に、遺産は全て息子に相続したい旨が書かれ、シドニアにはツァッホーの農場が残されたのみだった。

③ステッティンにて（第1部・18章～第2部・第7章）

ステッティンのバーニム公はシドニアの到着を喜んだが、シドニアを決して城に入れようとはせず、ポンメルン中が後宮と見做している隣の建物に棲むよう指示した。シドニアが泣く泣く入居すると、そこではパン屋の娘が公爵の寵を得て取り仕切っていた。バーニム公はシドニアを、「ヴォルガストの公子達も出席するヴォリーンの会議に連れて行ってあげるから」と、なだめた。

公子が相変わらずシドニアに恋い焦がれながら病床に着いたのを不審に思った主治医は、魔法をかけられているのではないかという疑惑を抱く。そこで、牢に繋がれている魔法使いに拮抗薬を処方してもらおうと、公子は元気を取り戻し、逆にシドニア嫌いになった。それで、バーニム公に連れられたシドニアを見て、短剣で襲いかかろうとした。会議においてバーニム公は引退を表明し、ステッティンはヨハン・フリードリヒ公が、ヴォルガストはエルンスト・ルードヴィヒ公が治める事になった。

一方、ヨハンネス・アッペルマンは父に約束した通り毎日仕事をし、夜は自宅謹慎の日々を送っていたが、母親がこっそりと甘やかせていた。父がヴォリーンの会議に出席している隙に、ヨハンネスは、出掛けた居酒屋でシドニアの居所を知る。早速裁断屋に扮してシドニアを訪ねるが、バーニム公に現場を取り押さえられてしまい、シドニアは公の庇護を失う。

ヨハン・フリードリヒ公は公国を継ぐや、築城の為の課税の件でステッティンの議会と争った。議会を説得できない公爵は、納税するまで刑事裁判所を閉鎖する事にしてしまったので、以来盗賊がはびこっていた¹²⁶。人々が剣で私的に処罰を下す世になったのはヨハンネスにとって好都合であった。ヨハンネスは便宜を図ったにもかかわらず自分を主馬頭に推薦してくれなかった郷土達に仕返しを企んだ。粉挽き屋からならず者に転向したコンネマン¹²⁷から盗賊の頭領になる話を持ちかけら

¹²⁶ ロイツ銀行の倒産に共倒れした者が沢山いた。

¹²⁷ 実在のシドニアは52才頃にペーター・ケーネマンと婚約した。（Borcke, 2002, S.41）

れ、シドニアに結婚の約束をし、最後の装飾品を提供させ、その資金を元にジプシーの占い師を含む一味を結成した。シドニアは一文無しになってしまった。

④森にて（第2部・第8～14章）

ヨハンネスがヨハン・フリードリヒ公の主馬頭に馬と馬車を借りて森に入ると、当の公爵と出会い、公爵に馬を売ってダイヤモンドを得た上、「シドニアをスタガードに下ろした後で馬を届ける」と嘘をついた。公爵に「これが噂のシドニアか。美しいのに残念な事だ。」と言われ、シドニアは恥じてうつむいた。

新しい仲間と落ち合うと、早速酒盛りを始め、ヨハンネスはジプシー娘といちゃつきはじめた。衣装を分けるよう命じ、シドニアの荷物を勝手に開けるヨハンネスを見てシドニアは、この盗賊の巣窟から自分を救い出してくれるよう神に祈り、脱出を試みたが、狼に阻まれ、戻って来た。

一方、ヨハンネスの父は森に入り息子を捜し出す。ヨハンネスは「これから仲間とポーランドまで戦争に参加しに行くところで、もう決して家には戻らないからお金を都合して欲しい」と頼み、再び父から金を騙し取ろうとする。シドニアはヨハンネスの父と一緒に森を後にしようとはせず、ヨハンネスと行動を共にする事にした。シドニアは後に裁判で、この頃ジプシー女から「子供を授かる事ができない術」を教わり、ポンメルン公爵家にその術を用い、一族を断絶させたと証言する事になる。

兄をステッティンに表敬訪問した後、ヴォルガストの公爵夫妻が帰路森を通ろうとすると、嵐になり、雷の中、ヨハンネスの一味に出会う。シドニアは、自分が恨みを持つマルクスと公爵夫妻を襲うようけしかけるが、賊共はマルクスがばらまいた硬貨に気を取られたので、一行は命からがら逃げる事ができた。

この時点で一味は100人に膨れ上がっていた。シドニアは、ヴォルデが魔女として捕獲された事を聞きつけ、ヴォルデを救う事をヨハンネスに頼む。ヴォルデは二度までシドニアに命を救ってもらい、シドニアに忠誠を誓う。ヴォルデから、マルクスとクララの結婚式にヴォルガストの公爵家のメンバーが参加する事を聞き、シドニアはヨハンネスに、仕返しをしてくれるようせがむ。ヴォルデは、「一味に神を加えても叶わない程強い『友人』」としてシドニアに猫のヒムを渡した。言われた通り三回唾を吐きかけると、猫は、黒い上着に赤いズボンを履き、サギの羽根の付いたビロードのビレット帽を被っている立派な男に変身した。そして、シドニアの首に抱きつき、「お前の敵なら知ってるぜ！俺の言う通りにしたらダーバーの城を破壊してやろう。」と、約束した。

クララの父の居城ダーバーでは、ステッティンの刑事裁判所を再開してくれるよう、母や侍従長がヨハン・フリードリヒ公の説得を試みるが、公は機嫌を損ねて退出してしまう。すると神の罰が下り、その夜オーダーブルクのバーニム公が亡くなり、雷も雨も降らなかったにもかかわらず、オーダーブルク城内の全ての十字架や風見鶏が真っ黒に変色した。

ダーバー城において祝宴が続く中、新郎が新婦を屋外へ連れて出ると、人声が聞こえ、二人はシドニアとヨハンネスが侵入して来た事に気付く。ちょうどヨハン・フリードリヒ公が外へ出て来た処をヨハンネスが押し倒すが、同時にマルクスが後ろからシドニアを羽交い締めにし、クララが警鐘を鳴らすと、ヨハンネスは逃げ、シドニアは捕らえられる。

ヨハン・フリードリヒ公はマルクスを騎士に叙任し、ザーツィヒの代官に任命した。シドニアは涙して改心する事を誓った。皆に反対されながらもクララはシドニアを新居に引き取る事にした。

⑤ザーツィヒ城にて（第2部・第15～16章）

マルクスの留守中クララに男の子が生まれた。「スープも冷めない距離」に住む両親に使いを出した処、両親は熱いスープを使いを持たせた。シドニアは、「冷た過ぎるから」と言い、スープにジプシー女に伝授された薬を密かに混ぜた。するとクララの体が硬直し、冷たくなり、とうとう息が絶えた。帰宅したマルクスはシドニアに疑いの目を向けたが、シドニアは「一番の親友が逝ってしまった」と泣き叫び、夜も遺体から離れようとしなかった。

しかし、実はクララは仮死状態にされただけだったので、シドニアは地下聖堂のクララの棺の上に座って待ち、目を覚ましたクララが助けを求めると、「私だって今頃公爵夫人として公子を産んでいたかも知れないのに、あなたのせいで馬丁の売女に成り下がってしまった。」と恨みを述べ、クララが窒息してしまうまで棺の上で踊りながら旧約聖書詩篇の109番を口ずさんだ。

⑥放浪時代（第2部・第17～23章）

ツァッホーの自領に引きあげる途中狼の群れに阻まれ、シドニアは偶然ヨハンネスに出会う。警戒するシドニアにヨハンネスは、「ケチな父親が遺産を分けてくれる事になり、城を買ってポーランドに住むつもり」であり、一緒に馬車に乗るよう説得する。

ところが、金の受け取り先でヨハンネスはスタガード市民に押さえつけられ、シドニアも拘束された。「金を用意しなければ町に放火する」と脅すまでになった息子に、市長である父は牧師と獄吏と黒い棺を持った六人の男を連れて現れた。ヨハンネスは、父を懐柔できないと観念するや、悪魔に助けを求めたが、最後は牧師に告解し改心した後斬首された。シドニアはしかし、「帰依してもこの様なのね!」と、笑い飛ばし、皆が賛美歌を歌っている間にいなくなった。

その後30年間、シドニアは消息を断っていたが、1592年5月1日のヴァルブルギスの夜が明けた朝、ヴォルガスト城のエリザベート・マグダレナ姫は廊下で痩せ細った老女に、「なんとお父上に似て美しいのでしょうか!」と声をかけられ、請われるままに手を差し出すと、老女はその手に3回息を吹きかけ、呪文を唱えた。すると、数日後にも姫はサタンに乗り移られ、何週間ものたうち回って苦しみ、教会で皆に祈祷してもらい、牧師のお祓いを受けると、ようやくサタンは姫の体を離れ、つむじ風を起し献金皿を宙で振り回した後、去った。

エルンスト・ルードヴィヒ公はこれに懲りて魔女を八人程処刑したが、城の廊下に置いてあるビールの樽の影から三つ足の兎が背に小人を乗せて現れ、又、去って行ったのを道化師が目撃すると¹²⁸、エルンスト・ルードヴィヒ公は間もなく亡くなった。

1600年にハフ湖が鏡のように美しく凍ると、ステッティンのヨハン・フリードリヒ公はブランデンブルク選帝侯とメクレンブルク公を橇遊びに誘った。ところが、公爵の橇の前にシドニアが現れ、マリーエンフリース修道院へ推薦して欲しい、と訴えた。推薦するつもりはない事を伝えた公爵は、数日の内に倒れ、亡くなった¹²⁹。人々は、ポンメルン公爵家は呪われている、と噂した。バーニム10世が公国を

¹²⁸ この兎は80年前にボギスラフ公が亡くなられた時にも目撃されていた。

¹²⁹ 道化師が再び三つ足の兎に股がっている小人を見た、と報告していた。

継ぐと、裁判所を再開した。兄達がシドニアに会うなり死んだので、公爵が通る前には鞭で老女を先払いさせ、警戒していたが、病床に着いている弟カジミルを見舞う途中でシドニアに待ち伏せされた。公爵は、自分に嫡子がいない事も、シドニアの仕業と疑っていた。シドニアは、今まで誰にも魔女呼ばわりされた事がない事を訴え、公爵達の死が自分に結び付けられるのはおかしい、と開き直った。公爵はシドニアを捕まえさせようとしたが、逃げられた。バーニム公はステッティンに戻った2日目に亡くなった。葬式では急に悪天候になり、人々は魔女の仕業ではないかと噂した。雲の形が、まるで犬の尾が半円を描くような形だったのだ。

カジミル公は病気がちなので、公国を相続する事を拒否したが、それから1年半経って48才の若さで亡くなった。

ステッティン公国を継ぐ事になった父ボギスラフに、息子フランツは、シドニアを処刑してから爵位に就くよう願ったが、長男のフィリップ2世は、魔法が使えるのかどうかは分からないのだから、修道院への推薦状を出してあげるのがあるのではないかと、と言う意見だった。シドニアから早速請願書が届き、その日の夜の内に返事は指定された教会の祭壇に置かれたが、使いの従僕は、誰が手紙を取りに来るか見届けるよう命ぜられていた。すると、明るい月光が差す中、手紙はひとりで祭壇を降り、柵を越えて回廊を飛んで行った。

シドニアは翌日老婆をもう一人連れて修道院にやって来た。ちょうど公爵からの手紙を読んだ女子修道院長は卒倒しそうになった。門が開け放たれているのを見てシドニアは、「何と言う由々しき事態！これではまるで男共が鳩のようにいつでも勝手に入出りできるではないか！恥じるが良い！」などと、早速仕切り出した。部屋を見せられると、「豚小屋では過ごせない」と言い、さっさと下女に荷物を運ばせ、祈祷室を占拠してしまった。この下女とは魔女ヴォルデ・アルプレヒツだったが、誰もヴォルデを知る者はいなかった。

⑦修道院にて（第3部・第1～24章）

翌朝、敬虔なドロテア・ステッティンと好奇心の強いアンナ・アーペンボルクがやって来て、シドニアを歓迎した。シドニアは、二人は使えると判断し、愛想良く修道院の様子を聞き出した。教会の参事会員の為に手袋を編むよう毛糸を渡されると、「お城育ち」の自分が何故太鼓腹のおじさん達に編み物をしなければならないのか、と女子修道院長を呼びつけた。又、修道院長スパーリングの使いが糸を紡ぐよう持って来ると、シドニアは怒り出し、使いを追い出した。修道院長が怒って鞭を持ってやって来ると、シドニアは箒を振りかざして修道院長を叩き出した。修道院長と女子修道院長は他の修道女を集合させ、シドニアを追い出してほしいと皆で公爵に請願する事にした。ボギスラフ公からはシドニアに忠告の手紙が届いたが、ねつ造だとしてシドニアは火にくべてしまった。そして、仕返しに両修道院長に息を吹きかけた。すると、二人共左手の小指から始まって手足が痛み出した。スタガードからシュヴァレンベルク医師が呼ばれたが、塗り薬は効かず、結局二人共シドニア自身に病気を治してもらえるようお願いせねばならず、ペーターゼン女子修道院長は、もしドロテア・ステッティンが自ら副修道院長の座を降りればシドニアが替わっても良いと認め、スパーリング修道院長はシドニアの小間使いに成り下がってしまった。

女子修道院長の病床に来ていたリュデケ牧師が未だ独身である事を知ると、シドニアは早速自分も重病を偽って牧師を呼び寄せた。そして、両手で顔を隠し、昨晚牧師と結婚する夢を見た事を恥ずかしそうに告白した。すると牧師は、偶然自分も同じ夢を見た事を話した。しかし牧師は、ヴォルガストの慶事のせいだと言う。エ

ルンスト・ルードヴィヒ公の息子が結婚する事を聞き、シドニアが「何だって？あの呪われた女子院長は8日後だと言っていたのに！」と怒り出したのを牧師は不審に思う。好奇心の強いアンナは、シドニアがその晩ヴォルデだけでなく、もう一人の人物と一緒に公爵家が絶滅するよう呪いを唱えているのを窓から目撃する。シドニアは更にヴォルデに牧師に自家製のビールを届けさせたが、恋薬を混ぜておいた。すると、一口飲んだ途端牧師はヴォルデを崇め奉るようになってしまった。

シドニアは、牧師がヴォルデに迫った事をドロテアの前でヴォルデに証言させる。二人は牧師を罷免する事に意見が一致するが、責任を取りたくないドロテアに、シドニアは、自分が替わって副院長の責任を負う事を提案する。そして、修道女達を自室に集め、副院長の座をシドニアに譲りたい旨をドロテア自身に発表させた。女子院長が昨晚の奇妙な出来事について質問すると、シドニアは笑って、アンナを怖がらせる為にヴォルデと踊った事、「低い声」は猫ヒムの声だったと説明した。

副女子修道院長となったシドニアの元には更に二人の魔女らしき人物達が入り出すようになったが、シドニアは、他の修道女達には外出する事や、親元を訪ねる事も町の祭に行く事も禁止した。若くて美しいアンブロシアに恋する郷土が門番に面会を申し込み、アンブロシアが格子越しに連れて来られると、シドニアは怒り狂い、斧を投げ、彼女の足に怪我をさせた。門番がシドニアを壁に押さえつけたので、シドニアは「死を以て報いるがいい！」と叫び、門番は三日後に死んだ。この間シドニアは昼も夜も籠り切って呪文を唱えた。

門番が悶死すると、アンナは部屋に閉じこもり、純真なドロテアですらシドニアに対して疑惑を抱いた。シドニアの犠牲者は皆同じ症状で死んだ。このような時にシドニアから告解を受けたいと申し込まれた牧師は、ホスチアが悪用されるのを恐れ、拒否する決心をする。ドロテアが、シドニアを敵に回さないよう牧師に忠告しようとした処、シドニアに「二人は祭壇の後ろで逢い引きしていた」と、咎められる。

エッガート・スパーリングの元に、シュヴァレンベルク医師、ヨハン・ヴェーデル、ヨプスト・ボルケがシドニアに対する調査委員会のメンバーとして結集すると、シドニアが窓から覗くので、先生がシドニアの手を鞭で叩いた。シドニアは早速唾を吐き、呪文を唱え出した。すると先生は苦しみ出し、倒れ、シドニアは猫と踊りながら「犬や猫と一緒に！」と歌い、揶揄した。

一方、賛美歌を歌っている最中ドロテアは突然悪魔に取り憑かれた。そこへヨプストの美しい娘ディリアナが現れる。ディリアナは、シドニアに魔法をかけられた父ヨプストの苦痛を治してもらおう為、シドニアに仕えようと言うのであった。ディリアナに求婚している郷土プットカマーも現れ、ディリアナにもしもの事があれば容赦しない事を言い渡し、何をも恐れないその勢いにシドニアもたじろぐ。

ドロテアは治ったものの、悪魔払いを務めたリュデケ牧師は倒れた。ところが、教会に安置された牧師の遺体は何度直しても腹這いにひっくり返っていた。誰の仕業かを見届ける為、夜教会に隠れていると、一匹の狼が現れ、遺体を引き裂くので、勇敢なディリアナは狼を墓地まで追い、十字架を投げつけた。すると狼の代わりにシドニアが現れたので、ディリアナとアンナは驚くが、口に血が付着しているので、他の者は狼がシドニアだと気付いた。

公爵が身も心も清らかな乙女を探している、と聞き、シドニアは修道女達を試す為に「飲むと品性が露見するスープ」を皆に振る舞う。皆が怒鳴り、呪い、声も表情も振る舞いもいつもと違うのに女子修道院長ペーターゼンは驚き、修道院長スパ

ーリングを呼びに走り、公爵に使いを出す。告げ口されたシドニアは、三日間断食し、部屋に籠った。テーブルの下には新しい箒二本が交叉して置かれた。女子院長は公爵に手紙を書く段階で覚悟し、遺書を書いて死装束も選んでいたが、案の定具合が悪くなり、亡くなった。最後の支えを失った修道女達をシドニアは招集し、早速新しい女子修道院長を選ぶ為、アンナに意見を聞いた。アンナがシドニアを推薦し、それに反対できる勇気の持つ者はいなかったので、シドニアが女子修道院長に選ばれた。

用事の途中に修道院に寄ったフィリップ公は激怒し、「皆恐れてシドニアに反対しなかった」と正直に答えたアグネス・クライストを女子院長に任命する。シドニアは早速呪いをかけ、アンナは三つ足の兎を目撃し、フィリップ公は修道院を出た後具合が悪くなり、1618年に亡くなった。

一族断絶の危機感を抱くフランツ公はジョエル先生に相談し、一族にかけられた呪いを解き、シドニアを退治する方法を精霊に聞く為、果敢で純潔な乙女を探していた。ディリアナに白羽の矢が立ち、父ヨブストは反対するが、ディリアナはプットカマーと共に協力する事にする。

現れた〈日の天使〉オッホは、ディリアナに「先ずヴォルデを捕まえよ。すればシドニアの魔物の力が萎える。」と、アドバイスする。すぐに修道院に待機している郷土プットカマーがヴォルデを捕らえ、ヒムを一打で真っ二つにした。

拷問下ヴォルデは、シドニアこそ大魔女だと証言したので、シドニアも裁判所に召喚された。「今ならまだ魂が救える」と言われてヴォルデは知っている事全てを告白し、シドニアを激怒させる。翌日ヴォルデの処刑では、何故か火がヴォルデを避けるので、魔術を見抜いた農夫がヴォルデの黒い帽子を取り除くと、帽子の下から黒いカラスが現れて飛び去り、ヴォルデは火の勢いに飲まれた。

フランツ公爵に再び協力を求められるのを恐れて、ヨブストは娘に早く結婚するよう勧め、ディリアナとプットカマーは婚約する。シドニアが死んだ、という噂が流れ、ディリアナは結婚식을7月18日に取り決めた。しかし、シドニアは死んでおらず、ちょうどその日に処刑される事になる。

公爵は牢に宮廷絵師を送り込み、シドニアの若かりし頃の肖像画にシドニアの最期の姿を付け加えさせようとした。シドニアはその絵を見て泣いた。肖像画はかつての婚約者エルンスト・ルードヴィヒ公が描かせたものだった。シドニアは新たに公爵家を呪った。

ザーツィヒ城には式前夜から親族が集まっていたが、翌日ステッティンから到着したマツケ・フォン・ボルケに「公爵様はワインよりも血を見る事を選ばれた。」と知らされ、場は騒然となる。公爵は、三カ所でシドニアに極刑を与えろと言う。ディリアナはウェディングドレスのまま馬に股がり、公爵の元へ直々恩赦を願いに行く。ディリアナたつての願いに公爵は譲歩し、刑は「斬首の後に火刑」と定められた。結婚式を一日延ばし、ディリアナは亡き祖母クララの衣装を死装束としてシドニアに届けさせ、処刑場へと向かう一行が通り過ぎるのを喪服に着替えて待った。処刑場の方角から煙が上がるのを見て、プットカマー、ディリアナ、マツケの妻は三人で賛美歌を合唱し、祈りを上げた。

結婚式で公爵は、指輪を落とさぬよう牧師に念を押した。何故なら公爵家の不幸は、祖父母の結婚式でルターが指輪を落としてしまい、指輪に息を吹きかけ、「サタンよ、去れ!」と言った、その過ちから始まったからだ。

(3) 作品の解説

作者 *Johann Wilhelm Meinhold* について¹³⁰ :

1797年2月27日にウーゼドム島に生まれる。エキセントリックな父（ルター派の牧師）に自宅で教育を受けた後、16才からグライフスヴァルト大学で二年間神学、文献学と哲学を勉強する傍ら、G. L. コーゼガルテンに詩の手ほどきを受け、ゲーテやシラー、ヘルダー、ジャン・ポール、クロプシュトックなどの文学に接する。

1812年コセロウに牧師として招聘される。1827年にフリードリヒ・ヴィルヘルム4世と出会い、1841/42年に部分的に発表された小説『琥珀の魔女』の原稿を王に請われて渡した事により、1843年に出版されると大反響があり、同作品はハインリッヒ・ラウベにより劇化され、ベルリンにて上演されもした。

1840年にエアランゲン大学より神学博士号授与。しかし、宗教観が神秘主義に傾いて行き、1847年に発表された『修道院の魔女シドニア』にも神秘主義思想が見られる。執筆当時スタガードの牧師に就任していたが、教区民との長年の諍いの結果1850年退職し、翌年ベルリンで亡くなった時にはカトリックに傾いていた。

構成と文体について :

1848年出版のヴェーバー版では、①口絵、②前書き¹³¹（③絵に添付された説明¹³²、④手紙）、⑤本文、という順序で三巻に亘って語られ、巻末などに⑥作者の意見¹³³が挟まれており、構成が非常に複雑である。本論文では、本文のみの構成の、①～④及び⑥が省かれたインゼル社版を用いた。

前作『琥珀の魔女』が実録と間違えられて評判になった事にあやかろうとし、本作品でも作者は前述の構成を取る事により実話であるかの如く語り、17世紀のポンメルン地方の方言（低地ドイツ語）や、端々でラテン語を加えている。この擬古体の言語と複雑な構成が災いとなり、本作品がドイツでは振るわなかった原因の一つになっている。又、ユダヤ人に関する意見書や第3部第13章はユダヤ人及びユダヤ教に対する偏見が混じっている。

意見書や本文中の作者のメッセージが多く、作者から読者へのメッセージ性が強い。

伝説と創作の融和

¹³⁰ Walther Killy. *Literatur Lexikon* 8. München: Bertelsmann, 1990. S. 63-64. 及び Killy *Literaturlexikon: Autoren und Werke des deutschsprachigen Kulturraumes*. Band 7, Hrsg. Wilhelm Kühlmann. Berlin: de Gruyter, 2010, S. 124-48.

¹³¹ 作品とシドニアの肖像画に関して作者が一人称にて解説

¹³² 肖像画（本論文46頁、図7）に添付されたシュヴァレンベルクの説明は、所謂〈シドニア伝説〉である。

¹³³ 巻末などに「ドイツにおける教育について」、「どうやって貧困層の娘達を結婚させるか」、「ユダヤ人について」などの作者の意見が挿入されている。

シドニアに関する伝説に、16世紀に実在したアッペルマン父子に関する伝説を組み込んだプロット。「スタガードの市長ヨアッヒム・アッペルマンが、『100ターラーをくれなければ放火する』と脅して来た放蕩息子ヨハンネスを、市民が迷惑を被らないよう1576年に処刑させた」というポンメルンに伝わる有名な「美談」は、ルードヴィヒ・アッヒム・フォン・アルニム¹³⁴によって人形劇に著された他、シドニアをテーマに悲劇¹³⁵を書いたパウル・ヴェントも『ドイツのブルータス』という題で取り扱っている。インゼル社版に解説を書いているパウル・エルンストは更に、マイホルトがデンマークに実在したマリー・グルッベの生涯を参考にした可能性を指摘している¹³⁶。マリー・グルッベ（1643-1717）は実在の人物で、デンマーク及びノルウェー王フレデリック3世の庶子¹³⁷と結婚していたが、離婚後「卑しい水夫¹³⁸」と再々婚した事で当時、世間を騒がせた人物である¹³⁹。しかし、ヤコブゼンが「マリーは、いくら夫が度々酔っぱらい、彼女に暴力をふるっても尚、夫を世界中で一番愛していた。¹⁴⁰」と言うように、マリーは自分の意志により身分の低い夫を選んだが、マインホルトのシドニアは自分の意志とは裏腹にどんどん身を落として行く。

(4) シドニアのイメージ

シドニアの容姿：

I. 若い頃：

「骨格・歩き方・瞳・胸が美しく、笑顔が愛らしくてポンメルナーの美貌と言われていた。」（第1巻13頁）

他の箇所でもシドニアの衣装の描写はあるが、容貌の描写はほとんどなく、衣装もスカートの色に触れる事はまれで、デコルテの強調を特徴とする。

II. 晩年：

約三十年後に突然現れたシドニアは、身の毛もよだつ目付きをし、頬のこけた痩せぎすの老女（第2巻51-52頁）と成り果て、久し振りに会ったエルンスト・ルードヴィヒ公にシドニアは、「私の頬がこけたのを見て、さぞかしいい気味でしょうね。」と、嘲笑する（52-53頁）。修道院に入ってからシドニアの容姿に関しても、「干涸びた黄色い腕（第2巻169頁）」、「山羊のような長い白い髪が翻り、赤い目はまるで2個のりんごのように顔から突き出していた（243頁）」、「髪を振り乱

¹³⁴ Ludwig Achim von Arnim. *Die Appelmänner. Arnim's Schaubühne*. Bd. 1. Berlin: Realschulbuchhandlung, 1813. アルニムの作品では放蕩息子の名前は Vivigenius と置き換えられ、首を切られた後、処刑人が魔法の塗り薬で首をつなげ、生き返ってからは心を入れ替える、という落ちになっている。

¹³⁵ Stettin Stadt-Theaterにて1879年12月1日に初演。

¹³⁶ Meinhold, 2. Band, S. 418. 但しヤコブゼンの小説は1876年刊行なので、エルンストの言う Peter Jacobsen ではなく、参考にしたとすれば Ludvig Holberg か Steen Steensen Blicher の著書であろう。

¹³⁷ ノルウェー副王 Ulrik Fredrik Gyldenløve

¹³⁸ Jens Peter Jacobsen. *Frau Marie Grubbe*. Rostock: Hinstorff, 1990, S. 252.

¹³⁹ https://de.wikipedia.org/wiki/Marie_Grubbe, 2016.10.18. 参照

¹⁴⁰ Jacobsen, S. 253.

して、赤いギョロ目（366頁）」、「風に翻る真っ白な髪（373頁）」、「痩せぎすの黄色い肩甲骨（255頁）」という情報しかない。ディリアナが修道院に現れた時点で作者は、「記述するのを忘れていたが、シドニアはとっくにサタンの符号通り目の中も周りも赤い色をしていた。（第2巻243頁）」と付け加えている。

又、処刑場に向かう姿は、「長い白髪の頭の周りには、金色の花が付いた指程の太さの黒いリボン巻いていたが、髪は風にはためいていた（407頁）」。これは、図7の〈二重肖像画〉の老いた方のシドニアの肖像に合わせたものと思われる。

シドニアのイメージ：

この作品の特徴として、事件や言動が次々と述べられ、〈動〉の要素は多いが、しかし、〈静〉の要素である状態の描写は少なく、人の容貌や景色の描写は皆無に近い。従って、イメージをまとめるにも、主に言動を拾う事になる。

I. 若い頃

①自領ストラメール城にて（幼少期～青春期）

父親同様、他人に対する同情心は皆無。この性向は、動物虐待を楽しむ残虐性にも表れており、同じ残虐性で郷土をこっぴどく振った。

姉の結婚式に先んじて催された熊狩り前の朝食で、「あちこち愛嬌のある目で魅惑しながら飲食を勧めるシドニアを見て、騎士達は皆息を呑んだ。（第1巻15頁）」、「従兄が私〔ウッカーマン〕の目の前でひっきりなしにシドニアにキスし〔…〕とうとう彼女を膝に乗せた。（21頁）」、姉の結婚式で誰にでも手や髪を触られても平気な様子は、コケティッシュを越え、無節操であるが、シドニアが魅力的である事を伝える。作者がこの時期のシドニアの性質を表す言葉を使っているのは一カ所のみで、「邪悪（28頁）」。

最終的に魔女として処刑される人物の生い立ちを描くのに、宮廷に入るまでのシドニアの性質を表す言動を作者は過大に誇張している。それは、次の三つの「事件」に見られる。

a. ガチョウを虐待するシーン

シドニアが14才の頃、17才のガチョウ係の娘に「結婚が何か説明しろ」と迫るが、答えに満足せず、他の百姓娘達を連れて、その子のガチョウを生きたまま羽根をむしり、逃げられないよう周りに火を起し、火あぶりにし、生きたままのガチョウの肉を削いで食べてしまう。このシーンは「動物虐待」という残虐性と「将来シドニア自身も火あぶりになる」という運命を暗示するものと思われる。

b. 台所で熊を料理するボルケ姉妹

但し、「熊の口元から肉を削ぎ取り、鼻を突き刺してから砕いた」のはシドニアではなく、郷土ウッカーマンである。

c. ステッティン城に一人で乗り込む。

②ヴォルガスト城の宮廷にて

ヴォルガスト城に入ってからシドニアのイメージは安定し、性悪でありながらコミカルで、独特の魅力を発揮する。夕食の度に宮廷に仕える人々が集まるのを利用してシドニアは、使用人には金銭を与え、仕事振りを直接褒め、郷土は聞こえよがしに間接的に褒める事で宮廷の人気者に申し上がる。公爵未亡人の誕生祝いの後、いったん宮廷から追い出されてから父とバーニム公と船に乗り戻ると、「迎えに来

た郷土達はシドニアの姿を認めると、歓声を上げた。シドニアの人気はかえって高まったようだった（161頁）」。

シドニアは、度々鹿の背に乗ろうとするが、これは魔女が牡山羊の背に乗り空を飛ぶ¹⁴¹事から、シドニアの「魔女性」を暗示する為のエピソードだと思われる。シドニアが熊を飼い馴らそうとするのも、同じ理由から付け足されたと思われる。

③森にて

宮廷を追われてからのシドニアは、アッペルマンと会う度に最後の財産である宝石を一つずつ貢がされ、衣装の詰まった荷物も、ステッティンの公爵の主馬頭が馬車を取り返した時に持って行かれてしまい、一文無しになってしまう。二度狼の群れに出会い、森の中ではシドニアは完全に無力でアッペルマンに頼るしかない。ヴォルガスト城では宮廷をかき回すその能動性が魅力的であったが、森に入ってからシドニアは受動的で、魅力が失せてしまう。それは、アッペルマンが早速新しく一味に加わったジプシー娘に手を出す事や、泣いても笑われるばかりで誰も味方になってくれない事にも表れている。ステッティンの公爵が「美しいのに残念」と言ったのを最後に「美しい」という形容詞は用いられなくなる。

その一方、この時期にエルンスト・ルードヴィヒ公とゾフィア・ヘドヴィヒ姫の結婚とマルクスとクララの結婚が重なり、シドニアは宮廷を追われた仕返しを謀る。両方の襲撃においてシドニアは積極的に賊共をけしかけ、ダーバー城での結婚式の襲撃では、刃物でマルクスに向かっている。この時期からシドニアは「復讐の鬼」になったと言えるだろう。

④ザーツィヒ城にて

シドニアに接触する事は禁ぜられるので、シドニアは引き続き受動的に潜伏するしかない。しかし、あてがわれた下女を森へ送り、櫛の木の洞に隠した猫ヒムを取りに行かせる。マルクスの留守を利用して秘薬を用いてクララを仮死状態にし、教会の地下で目を覚ましたクララが起き上がる事のないよう棺の上で「呪いの祈祷¹⁴²」をあげる。棺の中からクララが慈悲を請い、「自力で棺の蓋を開けられないなら、上に行って人を呼んで！」と、頼んだのに対し、作者は「だが、悪魔がシドニアに吹き込み、『私があなたのようにおしゃべりで、出来事を何でもかんでも人に話すとも思っているの？』と答えた。」（第2巻14頁）と解説している。

マルクスの泣き声が聞こえると、シドニアは「心が切り裂かれ、自分のした事を後悔した（47頁）」。又、ザーツィヒ城を去る前にクララの忘れ形見を腕に抱かせてもらった時、ヒムは「赤児にも自分で呪いをかけるか、俺にやらせろ。（20頁）」と囁いたが、シドニアは何もしなかった。これは、シドニアの人間的な一面が示される最後の場面である。

II. 晩年

¹⁴¹ 「牡山羊が魔女の乗り物なのは、古代の太母神の乗物が牡山羊だったからである。」
（大和、22頁）

¹⁴² 旧約聖書詩篇の109番

マインホルトの作品では、シドニアはヨハンネス・アッペルマンが実父の手により処刑されてから約30年間姿を消す。この間にイメージの断絶¹⁴³があり、第2部19章からシドニアは「痩せぎすの老婆」として現れる。それまでは、魔女ヴォルデ或いはジプシー女から得た秘薬を用いたり、アッペルマンの手を借りて、公子を腑抜けにする、ヴォルガストの公爵夫妻を襲う、従弟の結婚式を襲う、などの悪行を行っていたが、老婆になってからは、シドニア自身が魔女として呪術を行い、敵と見定めた人々を病気にし、或いは死に追い込む。その際、ヴォルデはシドニアを補佐するのみで、率先して魔術を使う事はない。悪魔ヒムも、シドニアとヴォルデと三者で一緒に呪う（「そのように犬猫も引っ掻き合いじゃれ合う」と歌いながら踊る）時以外、普段は猫の姿をしており、修道院の住人或いは読者にとっては恐怖の対象ではなく、シドニアは悪魔ヒムよりも恐ろしい存在として描かれている。

⑤放浪時代

ステッティンの公爵の橋遊びの最中に突然氷の上に現れたシドニアは、みすぼらしい服をまとい、漁夫の長靴を履いて、「どこかのお母ちゃん（第2巻70頁）」のような姿である。しかし、教会に置かれた手紙を取りに行くのに姿を現さず、手紙がひとりで宙を飛んで行くエピソードからも、魔術をこなし、魔女と人間を隔てる「垣根」を既に越えてしまったのが明らかである。

第2巻62頁では、「長年シドニアは汚辱の中まみれていたもので、段々と邪悪になって行った」と説明され、シドニアを指す言葉として主に「妖婆」が使われている¹⁴⁴。

⑥修道院にて

修道院に入ってから冒頭でやはり、「古い肉に湧くうじ虫と同じで、シドニアは年を経る毎に邪悪になって行った。（第2巻、99頁）」と説明される。シドニアを指す言葉として新しく用いられる表現は、

- ・ （抜け目ない/高慢な/老いた/地獄の）ドラゴン
- ・ （邪悪な/黒い）マムシ
- ・ （邪悪な）蛇（のように喘ぐ）
- ・ （呪われた/凶暴な）畜生悪魔
- ・ 厭うべきサタンの申し子
- ・ 雌狼
- ・ 年老いた喧嘩好きの猫

などである。

アッペルマンと森に入ってからからは、シドニアは受動的なイメージであったが、修道院では、入居した一日目から非常に精力的で能動的になる。これは、悪魔と結託して力を増した事を暗示すると思われる。修道院に一步踏み入れるや、「これが本当に女子修道院？門が開き放たれていて、これでは野郎共がまるで鳩のようにいつでも中に入り込めるではないか！恥ずかしくないのかね、ふしだらな淫売娘達は。

¹⁴³ マトゥシャク＝ローゼは、「この作品は内容的には若い頃と老年期に分かれるが、両者は連結せず並んでいるだけである。」と述べている（82頁）。例えば、修道院に入ってからシドニアは急に聖書に詳しくなっている。

¹⁴⁴ 他、「（醜悪な/狡猾な）妖婆」、「ぞっとする頭巾（=gräuliche Nachthaube）」、「悪魔の妖怪」など。

待ってなさい、このシドニアが秩序を正してやるから。（第2巻94頁）」と牽制する。そして、すぐにも両修道院長を呪術で痛めつけ、優位に立つ。女子副院長とは仲良くし、上手く言って座を譲り受け、もう一度呪術を使って女子修道院長を殺害してから自らが院長になり、〈呪術〉という暴力で修道院を牛耳って、若い修道女達の生活を圧迫する。

魔女性：

上山が、「『魔女への鉄槌』が非難の対象にしたのは、意地の悪い、信仰心の薄い、好色の女性だった。この段階で悪行（マレフィキウム）の概念が固まった。従来のカノンでは全く触れていなかった悪魔との情交という概念が、キリスト教にとって最悪の冒瀆とされ、悪行の核になった。（112-13頁）」と述べているように、マインホルトのシドニアは、『魔女への鉄槌』の定義通りの魔女、すなわち〈教会の創造による魔女〉である。シドニアと裁判で対決すると、ヴォルデは、「シドニアは男の姿をした悪魔ヒムと一週間に三回同衾していた。」と、証言している（第2巻、376頁）。

更に、〈民間伝承の魔女〉でもある事を示すエピソードは、

- ・突然突風が吹き、馬二頭が脱走した。（第2巻、381頁）
- ・アンナが鍵穴から覗くと、シドニアが幼子に黄色い乳を吸わせていた。（同、159-60頁）
- ・狼に変身し、牧師の遺体を引き裂いた。（同、239-40頁）
- ・シドニアが壁に穴を開けて角の筒を差し込むと、そこから牛乳が流れ出たが、同時に修道院の牛舎で一番優秀な雌牛は乳が出なくなった。（同、171頁）
- ・シドニアが箒に股がって煙突から飛翔するのが目撃された。（同、304頁）

などである。風を起こすのはペルヒト或いはホルダ伝説の〈風の魔女〉、ストリガは嬰兒をさらって毒のミルクを飲ませたり、動物に変身する。（本論文第一章1(2)a.)

(5) マインホルト作『修道院の魔女』まとめ

他の作品と異なるのは、マインホルトが『修道院の魔女』を一種の「教育書」として書いている点で、それが、「ドイツにおける教育について」、「どうやって貧困層の娘達を結婚させるか」などの意見書を小説の合間に挟んだ理由だと思われる。この作品でマインホルトが言いたい事は、次の文章にまとめられている。

息子〔ヨハンネス・アッペルマン〕の不幸は全て母親のせいであった。それは、シドニアの父親〔の非〕と同じである。〔母親はヨハンネスを〕幼い頃から甘やかし、ベタベタ愛撫して我が儘に育て、父親に対抗するよう支えた。（第2巻298頁）

従って、作品の中ではシドニアが如何に魔女へと成長して行ったかが語られている。そのプロセスは、

①自領ストラメール城にて

幼少時から高慢で我が儘に育ち、情操教育やキリスト教的教育を与えられない。残虐性を正されない。青年期に入って、更に二重性と節操の無さが加わる。

②ヴォルガスト城の宮廷にて

コケットリーと浮気性が災いしてアップルマンのような男に貞操を奪われる。
〈魔女〉に初めて接触し、〈魔女〉の手を借りて婚約にこぎつけ、呪術を用いて目的を手にする体験をする。

③森にて

アップルマンの人生に引き込まれ、人生初めて生活苦を味わう。盗賊と行動を共にする中でジプシー女及び魔女ヴォルデからそれぞれ〈秘薬〉と〈魔物〉を得る。

④ザーヒツィヒ城にて

殺人を犯す¹⁴⁵。幼少時から「人に仕返しをする」という習慣が身に付いていた上、動物を虐待していた事が、殺人を犯すハードルを低くしたと思われる。

⑤放浪時代

アップルマンは、処刑間際に一旦悪魔に助けを求め、「目の前で父の息の根を止めてくれたら未来永劫忠誠を誓おう！」と叫んだが、最終的には牧師に懺悔すると改心し、キリスト教徒として死んで罪を償う事を自ら選ぶ。この点が魔女となるシドニアとの大きな差異である。シドニアにとってはこの出来事が魔女に変身する分岐点となる。改心したにもかかわらず斬首された事に対し、シドニアは「帰依してもこの様なのね！」と、嘲笑い、最早自分も、改心しても神には救われない存在である、と自覚したのであろう。三十年後には自分の気に入らない人物にことごとく呪いをかける魔女になっている。

⑥修道院にて

「そのように犬猫も引っ掻き合い、じゃれ合う」という呪文をヴォルデと魔物ヒムと一緒に唱えて、修道院の人々及び公爵達を次々と病死させる。

⑦牢中にて

処刑間際に公爵家にかけての呪いを解くよう説得されると、「生きている間も死んでからも悪魔のままにいるつもりだ」と答え、改心する事を拒み、魔女として死ぬ。

シドニアは、若い頃は「ポンメルナーの美貌」という評判だったが、晩年は白髪に赤目の魔女的容顔で、〈民間伝承の魔女〉及び〈教会の創造による魔女〉として描かれている。キリスト教において「悪魔との情交」は最悪の冒瀆であり、シドニアには最悪の〈魔女〉のイメージが与えられている。

¹⁴⁵ シドニアは、「クララとマルクスのせいで自分は公爵夫人になり損ねた」と、逆恨みしているが、クララ自身は敬虔で非が無く、ヴォルガスト城において親しくしてくれた相手だった。シドニアの従弟マルクスと結婚した事によりシドニアの身内である事から、これは重い犯罪であった。

まとめ

シドニア処刑後に民衆の間に広まった、「美形の公爵と結婚できず逆恨みしてポンメルン公爵家を滅ぼした」という噂は、1682年にはレンチにより記録され、1800年頃より特に流行った年代記や伝説記によって先ずは広められた。しかし、「中世に実在した貴族階級の女性が魔女として処刑された」という内容は、同じく19世紀初頭より流行り出したゴシック小説の格好の題材に成り得た。

1812年人気作家ヴルピウスにより著された小作品集『注目すべき名高いご婦人方のパンテオン』にシドニアの「二重肖像画」及びシドニアと王子の会話を中心とする創作が発表されると、1848年にマインホルトが長編小説『修道院の魔女シドニア・フォン・ボルケ』を発表するまでに、シドニアをテーマとする小説が少なくとも三篇著された。本論文ではこれら五篇の創作品の中で主人公シドニアがどのように描かれているか、すなわち「魔女」シドニアのイメージの比較を試みた。

実在の人物である事から、先ずはシドニア・フォン・ボルケ（1548?-1620）が生きていた時代の歴史的背景を調べた。シドニアが生きていた約80年間は、ポンメルン公国がプロテスタントに改宗した直後の、信仰が不安定で既存秩序が動揺し、更に三十年戦争に巻き込まれ、魔女狩りが一番盛んだった時期と重なっている。又、魔女について調べ、〈魔女〉を三種類の概念に整理した。すなわち〈民間伝承の魔女〉と〈教会の創造による魔女〉が当時の人々の想像上の存在であるのに対し、〈実在の魔女〉もいた（或いはいる）事が分かった。

次に、これらの小説が書かれた19世紀の人々が抱いていた魔女のイメージが、果たして我々が今日抱いているイメージと同じなのかどうか疑問を抱き、いくつかの民話集とメルヒェンの中の魔女像を確認した¹⁴⁶、魔女の姿やイメージに関する情報は意外に少なく、グリムのメルヒェンでさえ具体的に容姿が描写されるのは、実は『ヘンゼルとグレーテル（KHM15）』と『太鼓たたき（KHM193）』だけである事が分かった。〈魔女〉の容姿は、「赤い目」「動物のように鼻が利く」「茶色い顔」「長い鼻」「細い指」「頭をがくがくさせながら近づく」などであり、ベラーニのシドニアやヴォルデと変わらない。マインホルトは、「女の魔女では赤い目（目の中と目の周り）がサタンの符号であり、男の魔女¹⁴⁷では目の周りが黒い事と顔色が灰色である事」だと述べている（243頁）。

以上をふまえて小説の分析を行った処、主人公シドニアは、マインホルト以外の作品では必ずしも〈魔女〉として描かれていない事が判明した。五篇の内、最初のヴルピウスは〈魔女性〉に関しては謎のままにし、続くアルミア、ベンノはシドニアを〈実在の魔女〉のカテゴリーに入る〈白魔女〉として描き、ベラーニの作品では「魔女的な外見の、迷信深い、口うるさい婆さん」であっただけで、魔女ではなかったにもかかわらず、処刑されたとしていた。

但し、ボッティングが、「ゴシック性の特徴は『過度』と『境界侵犯』」と定義

¹⁴⁶ グリムの伝説集においては585話の内7話に限り魔女が登場、しかし容姿やイメージに関する情報は皆無（DS538：「年取った魔女」）。ディードリヒスの民話集では「リンダウアーの魔女」は「70才ぐらいの老婆」「奇妙」「変わっている」「醜い顔」「黒っぽい服装」「腰を曲げて歩く」などの形容詞で表されており、やはりグリム童話の魔女の姿に近い。

¹⁴⁷ ベラーニの作品中の男の魔女/魔法使いの容姿も「色黒い肌のミイラのように（2頁）」。しかしグリムのメルヒェンには、男の魔女の容姿や年齢の具体的な描写は無い。女の魔女と比べるとより平凡な人間に近い像である。

するように¹⁴⁸、特に〈白魔女〉は行為によっては〈黒魔女〉へと境界を侵し易く、更に、「不確実性」はゴシックの要素なので、上記の内、ヴルピウスとアルミアのシドニアの魔女性に関しては、判断が難しい。ヴルピウスにおいては、宮廷に入る前のシドニアには魔女性が見られない上、「秘薬を用いた」とも作者は述べないが、王子に対して〈黒魔術〉を行使した疑惑がぬぐえない。又、アルミアのシドニアは、ヴルピウスのシドニアよりも更に魔女性が無く、魔女裁判に対する作者の批判的態度からも、〈白魔女〉として描かれているが、やはり一度だけ「不妊の呪術」を用いている。

これらに対して、マインホルトの作品ではシドニアは幼少時から魔女的素質があり、華やかな宮廷生活で貞操を失って宮廷を追われ、身を落とし、盗賊やジプシーと共に森を放浪する遍歴を経て、悪魔と結託して「敵」に復讐・殺害する〈教会の創造による魔女〉兼〈民間伝承の魔女〉として描かれている。

それぞれの作品のシドニアの魔女性、所業、イメージ、容姿の比較は表にまとめた（本論文67頁）。

尚、マインホルトは『修道院の魔女シドニア・フォン・ボルケ』において究極的なゴシック性を追求している。作品中ボンメルン家の公爵崩御の度に現れる「三つ足の兎」及びシドニアの父オットーが自殺した夜現れた「後ろ足で立つ三匹のヒキガエル」、或いはシドニアが狼に変身し、箒に股がって煙突から飛翔する事には違和感も覚えるが、〈狼男〉の信仰、魔女が〈三つ足の鬼〉や〈ガマガエル〉に変身するという信仰は、古くからゲルマン地方において伝承されて来た¹⁴⁹。

第2章において数多く現存する伝説集の中から小説家達が参考にしたという二作品を取り出し、そもそも小説が書かれる前にはシドニアの運命がどう伝えられていたのかを調べた処、例えば「三つ足の兎」はマインホルトの創造ではなく、（実在の）シドニアの処分を望んだ人々の証言として実際に裁判記録に記載され、当時シドニアが魔女である事の証明の一つとされていた事が分かった¹⁵⁰。同様に、「シドニア裁判の噂話をしていたら突然突風が吹き、馬二頭が脱走した」というエピソードも裁判記録にある証言で、ペルヒト伝説及びホルダ伝説の〈民間伝承の魔女〉の所業にあたる。又、マインホルトの小説上シドニアの周囲の人々が病気になり、或いは死亡するが、「シドニアの呪術のせいで何週間も四肢の痙攣に苦しんだ後、寝込み、5日後に亡くなった。片方の下肢は茶色い痣に覆われ、鼻と口から出血しており、胸が唇の高さまで膨らんでいた。」という症状も、裁判記録に残された証言であった。

ベンノとマインホルトの作品は「過剰なゴシック性」を特徴とするが、両者が引用している「屋根の上の金色の風見鶏が一夜にして黒く変色」、「空から硫黄や血や火が降る」などの怪奇現象は、伝説集を含む歴史書に数多く記録されているとい

¹⁴⁸ Fred Botting. (河内恵子『深淵の旅人たち—ワイルドとF・M・フォードを中心に』慶應義塾大学出版会、2004年、83頁)

¹⁴⁹ 本論文5頁

¹⁵⁰ 「…証拠は、修道院の醸造舎で目撃された一匹の兎で、同じような兎はボギスラフ公爵の死後も修道院で目撃された。この兎は、[シドニアの猫]ヒムが兎の姿に化けてシドニアに殺害成功の報告をしようとした姿で、大ボギスラフ公の崩御の後にも目撃された。」

(Dähnert, 4. Band, S. 239) 「白い首輪をした三本足の兎又は猫がシドニアの部屋の前に座っていた。」 (Dähnert, 5. Band, S. 129)

う¹⁵¹。ベンノの作品中、公子は棺桶から起き上がった幽霊を前にして、「古い伝説に聞くフリッツの仕業だから、怖がる事はない。」とシドニアをなだめるが、〈民間伝承の魔女〉等を信じていた中世の人達は、このような怪奇現象や幽霊と共に日常生活を営んでいたと想像される。「中世回帰」を売り物とするゴシック文学は、このような中世の雰囲気を楽しむ意図の文学でもあっただろう。

『ドイツのゴシック文学』において亀井は、「ドイツでは「恐怖」のモチーフを含む作品は当初は主にバラードの形をとり、戯曲・メルヒェン・ザーゲの形でゴシック文学が創造され、その特徴は、『口承民話の伝統と著しい視覚効果を結び合わせた文学形式』であった事である。(11頁)」と説明しているが、ヴルピウスからマインホルトまでの作品では、絵画の効果を利用しているものが多い。これは、最初のヴルピウスが巻末でシドニアの肖像画の銅版画を載せた事も影響していると思われる。作家達はシドニアの毛を赤いとしたり、或いは黒いとし、作品によってシドニアの容姿も異なる。同様に、色々な画家がそれぞれシドニアの容姿を想像し、論文中に掲載した以外にもシドニアの肖像画が制作された。

デナートは、数多の年代記作家のせいでシドニアの話に寓話が混ざった事を憂慮し、「G. H. シュヴァレンベルクを手本に、裁判記録に忠実に、シドニアへの冤罪を証明する」目的で年代記『ポンメルンの著書』にシドニアの魔女裁判に関する記録を収めたが、第三者により当の「G. H. シュヴァレンベルクの叙述」としてシドニアの「二重肖像画」の説明書が添付された事により、結局やはりシドニアに関する寓話が広まる事になり、小説、劇や絵画の創造に結び付いた。

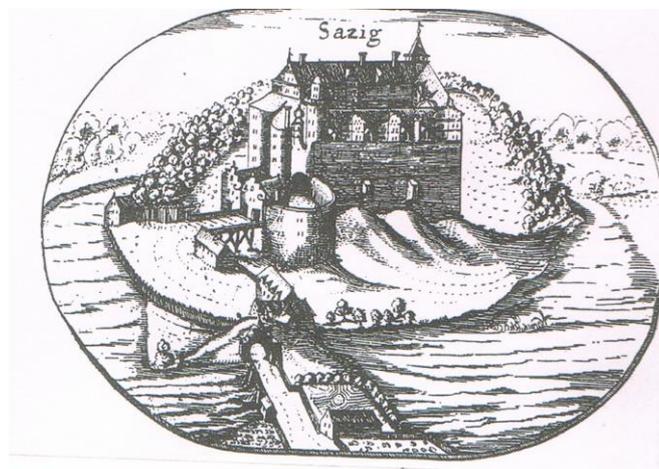


図8 ザーツィヒ城 17世紀初頭 E.ルビヌスによる銅版画

¹⁵¹ ベンノによると、「ステッティンの教会で福音の朗読の最中まるで天井が落ちて来そうな音がし、信者達が避難した」、「スタガートの教会の壁の穴に着いた血は拭いても消えず、石で塞ぐ事も不可能だった」、「不運を予告する彗星が現れ、日中太陽が三つ観測され、地震により山や村が地に沈んだ」などの記録が実際にある。(Benno, S. 128-32.)

表1 シドニアのイメージ

作家	場面	魔女性	魔女としての所業	容姿	イメージ
Vulpius	①自領 ②宮廷 ③森	①なし ②なし ③謎	①、②なし ③泉の水に少量のワインを ついで王子に渡し、「子供 を授からない」と予言	容姿の描写はない 美しさと魅力に恵まれ、 自己の美しさを過信	①田舎育ちで夢見がち ②、③二重性 計算高い コケティッシュ
Arminia	①自領 ②宮廷 ③自領	①なし ②なし ③白魔女	①なし ②一度だけ黒魔術を行使 (不妊症のまじない) ③村人への医療行為	背のすらっとした、白鳥 のような首 深紅の巻毛 大きな深い青色の瞳	美しくて賢明 思慮分別 気品のある話術
Benno	宮廷	白魔女	コンパスと天宮図を使い、 会いたい人をおびき寄せる	黒い巻毛、火のような瞳 薔薇のような唇 白鳥のように白い胸 百合のような腕	ファム・ファタル 二重性 計算高い
Belani	①宮廷 ②修道院	魔女では ない	①なし ②神秘的なものに囲まれる のが好き	①媚びるような目付き 萎んだ口 ②魔女的容貌	①コケットリーに 長けた熟女 ②意地悪、魔女的容貌 ガミガミ女
Meinhold	①自領 ②宮廷 ③森 ④クララ の居城 ⑤修道院	①不信心 ② 〃 ③魔女か らヒムを もらう ⑤悪魔 ヒムと 結託した 黒魔女	①動物虐待 ②公子に媚薬を与える ③盗賊と行動を共にする ④「親友」クララを殺害 ⑤呪術で敵を暫時殺害 四肢に激痛を与える 悪魔に憑依させる 狼に変身 箒に乗って煙突から飛翔	①ポンメルン1の美貌 骨格・歩き方・瞳・胸 が美しく、愛らしい笑 顔 ⑤頬のこけた痩せぎすの 肌の黄色い老女 身の毛もよだつ赤い ギョロ目をし、白髪を 振り乱している	①外見は美しいが、 非情・残虐・浮気性 ②コケティッシュ 浮気性 ③、④復讐の鬼 ⑤無敵のドラゴン

参考文献

シドニアに関する文献：

- Barthold, Friedrich Wilhelm. *Geschichte von Rügen und Pommern*. Vierter Theil, zweiter Band. Hamburg: Friedrich Perthes, 1845.
- Belani, H. E. R. *Sidonia. Macht des Wahns. Historische Novelle aus dem Anfange des siebzehnten Jahrhunderts*. Leipzig: Verlag von August Taubert, 1838.
- Benike, Johann Ernst (Benno). *Sidonia von Bork. Ein historischer Roman*. Stolp: Heinemann, 1833.
- Bibra, Philipp Anton Sigmund Freyherrn von. *Journal von und für Deutschland*, Dritter Jahrgang. Eilftes Stück. Fulda: 1786.
- Borcke, Wulf-Dietrich von. *Sidonia von Borcke: Die Hexe aus dem Kloster Marienfließ, 1548-1620*. Schwerin: Thomas Helms Verlag, 2002.
- _____, *Marienfließ – ein Kloster und Damenstift in Hinterpommern*. In: *Christi Ehr und gemeinen Nutzen Willig zu fordern und zu schützen: Beiträge zur Kirchen-, Kunst- und Landesgeschichte Pommerns und des Ostseeraums*, Band 2. Hrsg. Michael Lissok & Haik Thomas Porada. Schwerin: Helms, 2014.
- Dähnert, Johann Carl. *Pommersche Bibliothek*, vierter Band. Greifswald: Verlag Dähnert, 1755.
- _____, Fünfter Band. _____, 1756.
- Fischer, Hubertus (Hrsg.) *Klosterfrauen Klosterhexen. Theodor Fontanes Sidonie von Borcke im kulturellen Kontext*. Neustadt am Rübenberge: Rübenberger, 2005.
- Friedeborn, Paul. *Historische Beschreibung der Stadt Alten Stettin in Pommern*, Band 2, Alten Stettin: Rhete, 1613.
- George, Marion & Andrea Rudolph. (Hrsg.) *Hexen: Historische Faktizität und fiktive Bildlichkeit*. Dettelbach: Röhl, 2004, S. 155-222.
- Grässe, Johann Georg Theodor. *Sagenbuch des Preußischen Staats*, 2. Band. Glogau: Verlag von Carl Flemming, 1871.
- Hamann, Ludwig. *Die Klosterhexe von Marienfließ und der Untergang des Pommerschen Herzogs-Geschlechts*. In: *D. H. G. Roman-Sammlung zeitgenössischer Schriftsteller*, Band 1. Leipzig: Deutsche Handels-Gesellschaft, 1917.
- Haugwitz, Karoline Albertine Eleonore Luise von (Arminia). *Das Dritte Dreiblatt oder Pommersche Geschichten von Arminia*. Leipzig: Kollmann, 1832.
- Lucae, Friedrich. *Des heilige Römischen Reichs uhr-alter Fürstensaals*. Frankfurt a. M.: Knochen, 1705.
- マインホルト『琥珀の魔女』前川道介・本岡五男 訳、創土社、1984年
- Meinhold, Wilhelm. *Die Hexe von Coserow. Eine Novelle*. Hinstorff, 2000.
- . *Sidonia von Bork, die Klosterhexe, angebliche Vertilgerin des gesammten herzoglich-pommerschen Regentenhauses*. Leipzig: Insel, 1911.
- . *Sidonia, the Sorceress. The Supposed Destroyer of the Whole Reigning Ducal House of Pomerania*. Trans. Lady Wilde. London: Reeves and Turner, 1849.
- Reichard, Elias Caspar. *Vermischte Beyträge zur Beförderung einer nähern Einsicht in das gesamte Geisterreich: Zur Verminderung und Tilgung des Unglaubens und Aberglaubens; Als eine Fortsetzung von D. David Eberhard Hausers Magischen Bibliothek*. herausgegeben, zweyter Band. Helmstedt: Kühnlin, 1788.
- Rentsch, Johann Wolfgang. *Brandenburgischer Ceder-Hein, worinnen des Durchleuchtigsten Hauses Brandenburg Aufwachs- und Abstammung, auch Helden-Geschichte und Gros-*

- Thaten, aus denen Archiven und Ur-Briefschaften, auch andern bewerten Documenten mit Fleiß zusammen getragen und neben zirlichen Kupfer-Bildnißen vorgestellt worden.* Brandenburg: Bareut, 1682.
- Schwallenberg, Gustav Heinrich. *Curieuser Geschichts-Calender, Darinnen alles, was sich in Vor- und Hinter-Pommern von Ao. 1600. biß 1699. Denckwürdiges begeben, kürztlich erzehlet wird.* Stettin: Plener, 1700, S. 25.
- Stark, Susanne. (Hrsg.) *The Novel in Anglo-German Context: Cultural Cross-Currents and Affinities.* Amsterdam-Atlanta: Rodopi, 2000, S. 213-28.
- Temme, Jodocus Donatus Hubertus. *Volkssagen von Pommern und Rügen.* Berlin: Nicolaischer Buchhandlung, 1840.
- Vulpus, Christian August. *Sidonia von Borcke.* In: *Pantheon berühmter und merkwürdiger Frauen, Dritter Theil.* Leipzig: Hanschen, 1812, S. 69-88.
- Wisniewski, Roswitha. *Geschichte der Deutschen Literatur Pommerns: Vom Mittelalter bis zum Beginn des 21. Jahrhunderts.* Berlin: Weidler, 2013.

ゴシック文学に関する文献：

- Bürger, Gottfried August. *Gedichte.* Ditzingen: Reclam, 1997.
- Goethe, Johann Wolfgang von. *Götz von Berlichingen mit der eisernen Hand Ein Schauspiel.* In: *Goethes Werke*, 6 Bde. Frankfurt a. Main: Insel, 1979, Bd. 2.
- Musäus, Johann Karl August. *Volksmärchen der Deutschen.* München: Winkler, 1961.
- Schiller, Friedrich. *Der Räuber.* Stuttgart: Reclam, 1969.
- Thalmann, Marianne. *Der Trivialroman des 18 Jahrhunderts und der romantische Roman: Ein Beitrag zur Entwicklungsgeschichte der Geheimbundmystik.* Berlin: Emil Eberling, 1923.
- Vulpus, Christian August. *Rinaldo Rinaldini.* Dortmund: Harenberg Kommunikation, 1985.
- 石川實「ドイツ恐怖小説の研究を求めて」*独逸文學* 83、日本独文学会、1989年、25-33頁
- 亀井伸治『ドイツのゴシック小説』彩流社、2009年
- .「『ドイツのゴシック小説』あるいは『恐怖小説』というジャンルの問題について」*比較文学年誌* (42)、早稲田大学比較文学研究室、2006年、149-70頁
- 河内恵子『深淵の旅人たち—ワイルドとF・M・フォードを中心に』慶應義塾大学出版会、2004年
- 胡屋武志「書誌亀井伸治著『ドイツのゴシック小説』（彩流社）について」*国際文化表現研究* (6) 2010年、405-09頁
- 富岡悦子「書誌亀井伸治著『ドイツのゴシック小説』」*日本比較文学会編* 53号、2010年、126-29頁
- 能木敬治「ゴシック小説とドイツ・ロマン派の運命劇」*西日本短期大学大検論叢* 38、2000年、31-43頁
- 前川道介『ドイツ怪奇文学入門』綜芸社、1965年

魔女及び魔女裁判に関する文献：

- 上山安敏『魔女とキリスト教』講談社、1999年
- 大和岩雄『魔女論—なぜ空を飛び、人を喰うか』大和書房、2011年

- 小林繁子「近世ドイツ農村における民衆と魔女」西洋史論集第5号、北海道大学文学部西洋史研究室、2002年
- ジェフリ・スカール／ジョン・カロウ『ヨーロッパ史入門魔女狩り』小泉徹訳、岩波書店、2007年
- 度会好一『魔女幻想』中公新書、1999年
- 浜本隆志『魔女とカルトのドイツ史』講談社、2004年
- ヘルマン・シュライバー『ドイツ怪異集：幽霊・狼男・吸血鬼』関楠生訳社会思想社、1989年
- 三成美保「魔女裁判と女性像の変容—近世ドイツの事例から」『アジア遊学 186』勉誠出版、2015年、119-31頁
- 野村仁子「いわゆる『魔女への鉄槌』における「魔女」概念について」『宗教研究』第85巻、日本宗教学会、2012年
- 同上「『魔女への鉄槌』研究(1) —第一部の分析を中心に—」愛知県立大学大学院国際文化研究科論集第12号、愛知県立大学大学院国際文化研究科、2011年
- 森島恒雄『魔女狩り』岩波書店、1970年

グリム童話や民話に関する文献：

- Früh, Sigrid. / Rainer Wehse. *Die Frau im Märchen*. Kassel: Röth, 1985.
- 奈倉洋子「グリムの魔女像をめぐる一書き換えの過程における魔女像の変化について—」ドイツ文学研究26号、1994年、31-44頁
- 榎本浩司「グリム童話の女性たち—魔法や超人的な力を行使する女性たちの役割と位置づけ—」関西外語大学研究論集第97号、関西外語大学、2013年
- 大淵知直「グリム・メルヘンに登場する4人の「魔女」たち—魔女・魔法使いの女・賢女・老婆—」慶應義塾大学藝文学會第81号、慶應義塾大学藝文学会、2001年
- 小林喬「ドイツ民話にみられる魔女像と民衆心情」群馬県立女子大学紀要第9号、群馬県立女子大学、1989年
- 野口芳子「グリムのメルヘンと魔女—魔女狩りの史実を見据えて—」ドイツ文学語学研究、36号、1995年

その他：

- Arnim, Ludwig Achim Freiherr von. *Die Appelmänner*. In: *Schaubühne*. Hrsg. Wilhelm Grimm. Berlin: Veit & Comp. 1840-48
- Belford, Barbara. *Oscar Wilde Ein paradoxes Genie*. Zürich: Haffmans, 2000.
- Fesser, Gerd. *Duden. Basiswissen Schule: Geschichte*. Hrsg. Prof. Hans-Joachim Gutjahr. Dudenverlag, 2007.
- Jacobsen, Jens Peter. *Frau Marie Grubbe*. Rostock: Hinstorff, 1990
- Killy, Walter. *Literatur Lexikon 8*. München: Bertelsmann, 1990.
- Killy Literatur-lexikon: Autoren und Werke des deutschsprachigen Kulturraumes*. Band 7, Hrsg. Wilhelm Kühlmann. Berlin: de Gruyter, 2010.
- Kraus, Hans-Christoph (Hrsg.) *Neue deutsche Biographie*, Bd. 7. Berlin: Duncker & Humblot, 1966. (<http://daten.digital-sammlungen.de/0001/bsb00016325/images/index.html>)

Krüger, Joachim. *Zwischen dem Reich und Schweden: die Münzprägung im Herzogtum Pommern und Schwedisch-Pommern in der frühen Neuzeit*. Münster: LIT, 2006.

加藤耕義『ドイツの伝説における水の精霊』学習院大学人文科学論集 3、1994 年
田邊玲子編『ドイツ／女のエクリチュール』勁草書房、1994 年

星野純子『ゲーテ時代のジェンダーと文学—金りんごを盛る銀の皿』鳥影社・ロゴス企画部、2005 年

https://de.wikipedia.org/wiki/Stammliste_der_Greifen#Bogislaw_X._bis_Bogislaw_XIV., 2016.11.8.

<http://www.ruegenwalde.com/greifen/>, 2016.11.8.

https://de.wikipedia.org/wiki/Amadis_de_Gaula, 2016. 9. 8.

<https://ja.wikipedia.org/wiki/教皇派と皇帝派>, 2016. 9. 13.

[https://de.wikipedia.org/wiki/Loitz_\(Familie\)](https://de.wikipedia.org/wiki/Loitz_(Familie)), 2016.10.24.

https://de.wikisource.org/wiki/ADB:Häberlin,_Carl_Ludwig., 2016.11.4.

https://de.wikipedia.org/wiki/Marie_Grubbe, 2016.10.18



図 9 Sidonia by Thomas Lowinsky. (ジュリアン社版『修道院の魔女』)

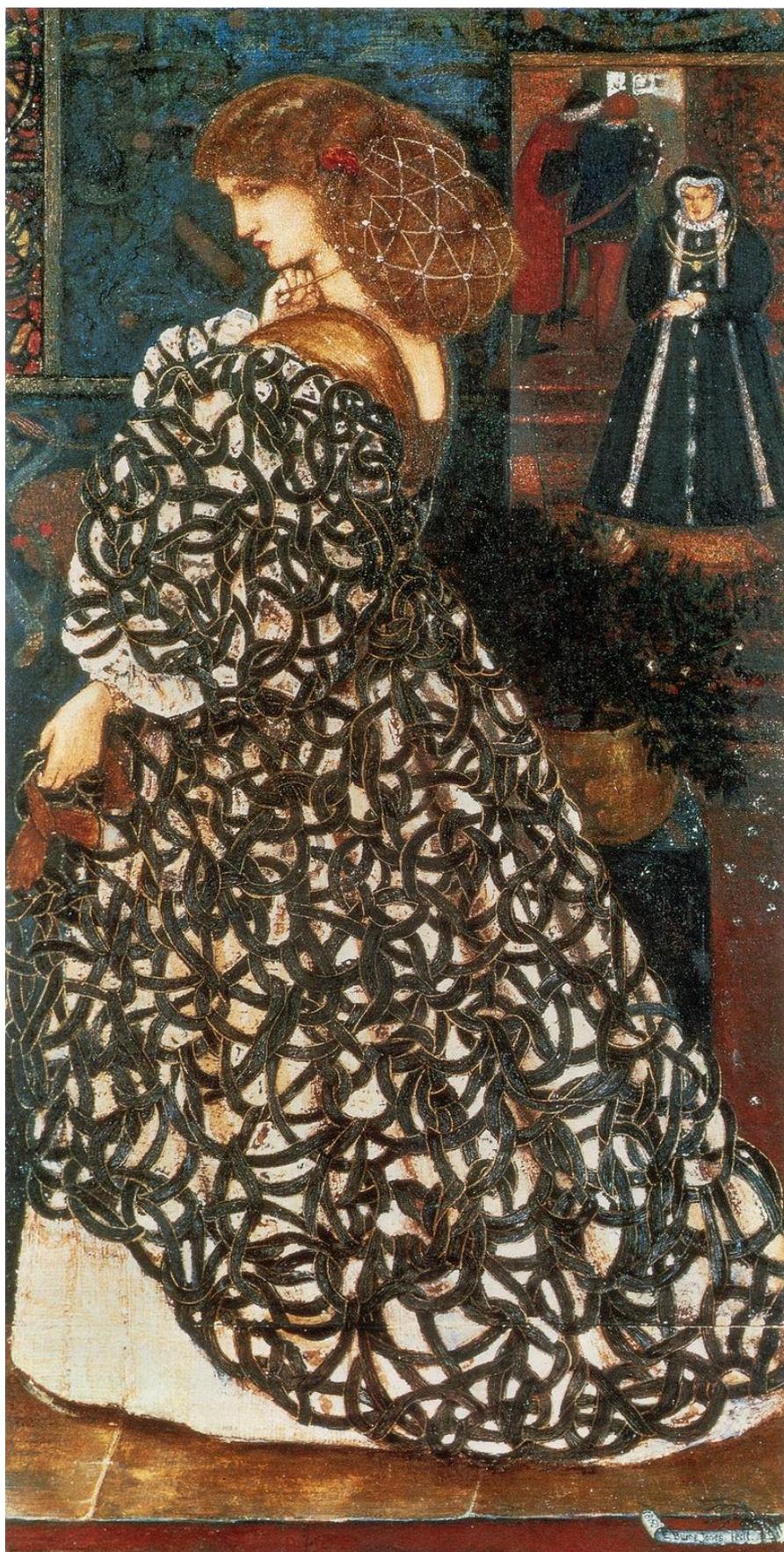


图 10 Sidonia von Bork, 1860 by Sir Edward Coley Burne-Jones, Tate Gallery 所藏